
ロッカールーム

ワタナベヨウリョウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロツカールーム

【Nコード】

N6310P

【作者名】

ワタナベヨウリョウ

【あらすじ】

不良と勘違いされても別にどうって事のない優等生の久瀬誠。その癖を直そうとする鬱陶しいハンドボール部実質部長の福井百合奈。

百合奈の親友でおしとやかな優等生で陸上部のエース、沢里佳子。常に牛乳を放さない明るい赤点マスター須藤康博。須藤のよき理解者で恋愛沙汰には敏感な前沢詩。

特にこれと言って関係のなかったこの5人。

ところが、誠が里佳子の秘密を知ったことで誠を取り巻く環境と5人の関係が少しずつ変わっていく・・・。

それぞれ、違う悩みを持つ個性的なキャラが織り成す青春群像劇。

温かく見守ってください；

始まりと半分こ

俺とソイツとが関係を作ったのはとある駅のコインロッカーで出会いが大きい。

別に肉体関係というわけでない。だからと言って友達で踏みとどまるほどの距離感でもない。

けれど、

強いて言うなら俺とソイツの関係は“夫婦”みたいな物だった。

「ロッカールーム」

まずは、この物語の主人公を紹介しておきたいと思う。

電車の中で非常識もケータイを弄り倒して時たま音楽をカシヤカシヤ鳴らしている。

彼の名前は、久瀬誠。くぜまこと 現在は高校2年生。来年は受験生なのだが緊張感はずゼロ。

学校では、友達は少なくクラスメートから不良扱い。しかし、そんな事は全く気にしていない。

むしろ、その生活の方が物静かで気に入っている。

「塚口、塚口駅です」

プシューッと電車の扉が両方に開くと慌てる事無くゆっくり立ち上がり出口へと向かう。

電車の発車メロディーのなり終わる頃に彼は電車を降りる。いつもの生活リズムだ。

同じ電車に乗っている高校生は誠のほかには彼のクラスメートの福ふ井百合奈しかいつもいなかった。

誠の住んでいる所が学校から遠く仕方なしに早い目の電車に乗るしかなかったのだ。

一方、百合奈は生徒会と部活動の早朝練習の関係でこれまた早い目に家を出る。

そして、百合奈と誠の鉢合わせも彼の生活リズムの中の一つとなっ
てしまっていた。

「おっはよ、久瀬君」

「・・・」

百合奈に挨拶されても返事せずそのままスタスタ歩いて階段のほうへ去っていく。

これも、誠の生活リズムの一つだった。

「ちよっ、ちよっと待ってよぉ」

百合奈が後ろから走ってついて来る。今日の百合奈はいつもと様子が違った。

いつもだったら、誠に無視されて終わりなのに今日は誠にピタッと引っ付いてそのまま離れない。

誠は無言の訴えを続ける。“引っ付くな”と。

そしたら百合奈の次の行動は、誠の腕をガシッとつかんで誠を引張り自分の顔に近づける。

「・・・」

誠の不機嫌且つ眠たげな顔は百合奈の顔に急接近した。

「やっほー」

嬉しくない。誠は百合奈の腕を振り払って改札口に向方向転換をする。そうしたら、突然百合奈が泣き出す。泣き出した百合奈の大声に驚いて振り返る。

振り返った時、誠の目線に届いたのは崩れ落ちた百合奈だった。

「フッ・・・」

初めて誠が声を出した。ため息だけど第一声には違いなかった。頭をバリバリ掻きながらケータイを取り出して時間を確認する。

時間は、7時42分。学校にはまだ間に合うよな・・・。

誠はケータイをポケットに仕舞うと百合奈に近づく。そして、腰を下ろして百合奈に視線をあわせる。

「おいっ、福井」

「・・・」

「福井い！」

「・・・たの・・・前」

百合奈の途切れ途切れの声に誠はゆっくり耳を傾ける。

「アア？」

「下の名前がいいなあ」

誠が聞き取った百合奈の言葉。イライラする誠。又ワーツと悶える誠。

百合奈の理不尽な要求。学校の遅刻は避けたい。そして早く立ち去りたい。

「クツ・・・」

そう考えると妥協せざるを得なくなった。仕方ないとばかりに

「ゆっ・・・百合奈・・・」

そついうと肝心の相手はむくつと顔を上げて嬉しそうな顔を誠に見せた。

「はい 誠くん！」

すつと立ち上がって改札口に指をさした。

「さあ！改札口へいざゆかん！」

「カッーーーー！」

誠はイライラを押さえて改札口に向かう。IC定期券をカバンから取り出そうとしたときに
前を歩いていた百合奈がある人物の存在に気付いた。

「ありやー??? 里佳子お??」

「ふえ???」

「やっぱり、里佳子だっ」

「あっ、百合奈・・・と久瀬君？」

「・・・」

挨拶はなし。そのままスルーしようとする百合奈すぐさま呼び止める。

「ちょっと、誠くん。里佳子に挨拶しなよ」

「・・・ヨオ／＼」

「うつ、うん・・・」

少々顔を赤らめて里佳子に挨拶をすると誠はさっと改札口に逃げ出してIC定期券をかざして駅を脱出。

そのまま誠は逃走した。

「あはは 可愛いな。誠くん。ねえ、里佳子？」

「あつ、うん。そうだねえ・・・」

塚口駅を飛び出して行ってしまった誠の後姿を見送った百合奈と里佳子は

改札口を通り駅から脱出して2人で並んで歩いていた。

「ちよつと、寒いなあ」

季節は10月の半ば。もう秋の色に染まった黄色いイチョウや赤い街路樹。

朝早いせいか、街路樹の周りの公道に自動車の姿は無く自由気ままに公道の上を

チェーンをまわして走る自転車暴走族の人間が幾人かいるだけだった。

冷たい風をほっぺに感じつつ里佳子と百合奈は歩道の上で積もっている

枯葉の山を時々崩しながら歩いていく。

「ああ、寒い！」

百合奈は自分の通学カバンから手袋とマフラーを取り出した。

この日の最低気温は15度と天気予報では言っていた。

しかし、それは詐欺だと百合奈は頭の中でイライラを感じながら考えていた。

「天野キャスターの嘘つきー」

プハーっと白い息を威勢よく吹いた百合奈。その隣で頬を寒さで赤くした里佳子。

「？」

里佳子の真つ赤な頬を見て百合奈は自分の手袋をはずいて里佳子のほっぺに手を当てる。

「ひゃっ」

百合奈の突然の行動に少し驚いた里佳子。ムーっと考え込む百合奈。その場で止まってしまった2人の女子の空間。

そして、百合奈の脳みそから導き出された答えが口を動かした。

「冷たい・・・ね」

「えっえっ??」

混乱し疑問符をたくさんつけている里佳子の顔を横目に見て百合奈は手袋をはめ直してマフラーを首から半分外した。

そして、ほらっと言って半分のマフラーを差し出す。

「半分こ」

「あっ、うん・・・ありがと」

里佳子は恐る恐る百合奈の出したマフラーを手にとって自分の首に巻きだす。

マフラーを首に巻きつけた里佳子の姿を見た百合奈は言っ。

「いい？里佳子」

「はい??」

「このマフラー半分こはねえ、間違えればどっちかの首が絞まる危険な行為なんだよ?」

「えっ?それはつまり・・・」

「並列して走ろうかって事さ」

「はっ、走る???」

そう聞いた里佳子の眼前に百合奈は自分の手首に巻いているデジタル腕時計の

時間を見せ付ける。7時50分。

「まだ、マニアイソウナキガシマスガ?」

「生徒会は待つてくれないのさ」

そう言い放つと百合奈は自慢の脚力で里佳子を半ば引つ張りながら走り始める。

「ゆ・・・百合・・・奈アア・・・」

「伝言は後で！」

ハアハアと息を切らしている百合奈と、ゲホゲホと咳をして歩道に座り込む里佳子。

「しっ、死ぬかと思った・・・」

「ごめん」

歩道に座り込んでいた里佳子は首に巻かれていたマフラーを外して百合奈に差し出す。

「はいっ、もう十分暖まったから」

里佳子は言い切ると百合奈は差し出されたマフラーを受け取った。マフラーを受け取り百合奈は里佳子に手を伸ばして「立って」と言った。

百合奈の手を握って何とも頼りなさげに里佳子は立ち上がった。

「ホント、ゴメンね」

「もう良いって・・・」

里佳子は少し苦笑いを見せて百合奈も苦笑した。そして、また2人が歩道を並んで歩いていく。

「そっといえさ、里佳子お」

「ん??」

「どうして、コインロッカーから出てきたの？」

「ふえっ? あっあれは・・・」

「ん???」

「別にいいじゃんツ、人には知られたくない事がいっぱいあるんだしい」

「ふーん・・・」

「なっ、なに？その疑いに満ち満ちた目は・・・」

「ううん？別にい？？」

「嘘だー！！！」

そう2人が言い合っている間に学校の校門は近づいていた。

始まりと半分こ（後書き）

と言うわけで「ロッカールーム」第一話はお楽しみいただけただし
ようか？

駄文で申し訳ない次第ですがこれからも投稿いたしますので
どうか、温かい目で見守ってください。

ウザい女子と無視する男子

百合奈と里佳子が校門を通ってから数分も経たぬうちに、生徒達が自転車を通学してきたり、教師達が自動車やバイク等を利用して次々と校門をくぐっていく。

「おはよっ」と飛び交う生徒同士の朝の挨拶。パチパチと点き始める校舎の廊下や教室の蛍光灯。

誠は教師の少ない朝早い職員室から鍵を取って教室の扉を開けて自分の席に座り、

1人だけの教室を楽しんでいた。自分以外誰もいない空間。窓際の教室の隅っこ。

誠にとつてこれほどにまで落ち着く場所は残念ながら数分間しか楽しめない。

だからこそ、余計に貴重だと感じるのだ。

そして、毎回毎回1番のりの誠を発見するのが誠が最も苦手としている“アイツ”である。

「おっ、はよー！」

「・・・」

生徒会の役員の1人であり堅物なのどこか頭のネジが抜けている福井百合奈。

自分の事を“百合奈”と呼べ！と強要したりする女子だ。

「おやつ！挨拶が全く聞こえないなあ」

「・・・」

そう百合奈に指摘されると誠は机に自分の机に顔を押し付けて狸寝入りを敢行した。

すると、ドドドドという足音が聞こえてきて耳元で“奴”は大音量で自分の声を張り上げた。

「もーしもーし!？」

「・・・」

「おい！！」

誠は思う。何でこんな野郎が真面目な真面目な生徒会の役員をやっているのか？と。

誠のストレスのボルテージが徐々に上がっていく。誠のイライラを上げている百合奈の方は

攻撃を止めない。むしろ、攻撃を活発化して来た。

「起きろー」「ちよーつとシカトお؟؟？」

そして、止めの一撃。

「誠くん??」

その一言で誠はブハツと顔を上げて眠たげな目で笑顔を振りまく百合奈を見つめる。

百合奈は笑顔を絶やす事無く手を振ってニコニコしながら、一言。

「おっは」

「・・・おやよ・・・」

誠の惨敗。百合奈の攻撃に見事に撃沈された。

まるで、謎の潜水艦から魚雷を発射された豪華客船みたいに。

誠の夢の空間はこうやって無くなる。しかも、無くなる理由は全て百合奈。

百合奈は誠にとって悪魔の化身と言う位置づけがされていた。

「百合奈あ・・・」

頼りない声を上げて1人の女子生徒が教室に入ってきた。すると、ぴよこつと猫耳立てて

百合奈が教室の扉に目を向ける。

「あつ、里佳子」

教室にへなへなもたれながら入ってきたのは今朝、誠が塚口駅のコインロッカーから出てきた

同級生の沢 里佳子だった。

「どうしたのさ？里佳子。私より遅いなんて」

「さっきまで保健室だよお」

「えっと、ソリヤドウシテカナあ??？」

「半分こでしょ！半分こ！」

誠には意味不明な原因だった。変な理由で保健室行っただなと誠は心の中で言った。

里佳子の席は誠の斜め右。百合奈の席はよりにもよって誠の隣。

うるさい騒音メーカーを右に抱えたなと1ヶ月前の席替えのときくじを引いた自分と

くじを作った担当教師を恨みに恨みまくった。

でも、どうしようもないと彼は半ば諦めた。諦めたら諦めたなりに百合奈対策を模索したが

どれも結局は失敗に終わったのもまた事実だ。

1ヶ月が経ちもうそろそろ席替えしても良いでしょと希望の光が射すのを密かに心待ちにしている。

席替え〓百合奈から離れる〓静かになる〓天国。

「あつ、おはよ。久瀬くん」

一方物静かでおしとやかな里佳子とは隣同士になっても良いかな？とも思っており

その彼の心境は実に曖昧な物であった。

「おはよ」

と普通に里佳子と挨拶を交わすと百合奈がすぐさま猛抗議。

「私には、すぐに挨拶してくれなかったのにイ、里佳子とはあっさりやるんだあ」

「今日は寒いなあ」

「話をそらすな！」

無視。

これだけが、百合奈必勝対策で唯一成功している方法だ。5分もすると彼女はなぜか諦める。

彼女の行動パターンを調べ上げて出した結果が“無視する”だった。

5分。その時間にはもう一つ理由がある。それは、5分も立つと必ず同級生の1人は登校してくるからだ。

そして、今日もクラスメートの男子が教室に入ってきた。

「あつ、おはよ、沢に、福井・・・、えつと久瀬君」

「あつ、おはようっす」

「おはよう」

男子生徒が誠の苗字に君付けをした理由。それは誠を不良としてみているからだった。

あまり、人との関係を築いていない誠はクラスだけでなく2年全体で不良のレッテルを貼られていた。

しかし、本人はそんな事どうでも良かった。どう思われてでも彼は“1人”を好んだ。

1人と言うモノを愛していた。

8時25分

本日、最初の予鈴のチャイムが学校中に鳴り響く。そのチャイムを聞いて校舎の外にいる生徒たちは少しばかり急ぎ足で校門を目指す。

「オハヨ」「おはようっ」

次々と教室に流れ込む生徒たち。切れた息で挨拶を交わす友人たち。教室に10人くらいの生徒が一斉に入室して来た。

彼らの視線には必ずと言っていいほど角の誠の席が見えたが挨拶をする人間は1人もいない。

それから、5分もすると2度目の予鈴のチャイムが鳴る。そのタイミングが一番混む。

朝寝坊、朝飯の食うスピード、乗り損ない・・・理由はいろいろある。

なんにせよ、みんな遅刻して出席日数の少なさによる平常点の減点

が嫌なのは目に見える。

赤点マスターなら尚更だ。

だから、家が遠いと言うのはある種の幸運かもしれないと誠は思う。

「はい、みんな座れー」

担任教師の藤枝のお出ましだ。日番日誌や生徒たちに配る手紙類。

そして前回の提出物のノートを脇に挟んでいる。

「そんじゃあ、前の数学のノート返すぞ」

朝のHRの始まりはノート返却で始まった。段々自分の番が近づく。

「加藤・・・久瀬え」

「はいッ・・・」

誠は立ち上がって教室の前にある教卓に足音立てて近づく。

机と机で出来た道。そこを歩く誠。両端の机の主たちは目を逸らし誠も別に驚きもしなかった。

そして、教卓にたどり着きノートを受け取る。

「今回も、完璧だったぞ」

藤枝はノートを渡す間に誠の耳にささやいた。

そついわれた誠は小声で“ありがとうございます”とかすれた声で答えた。

そして、ノートを受け取り自分の席に戻った。

誠がノートを受け取った後も生徒たちは次々と立ち上がって受け取りに行く。

たまに、“再提出”という付箋を貼られる生徒もいた。

「嘘だろ！？再提出だどっ！？？」

そう大声で言い放ったのはクラスの人気者、須藤康博である。

須藤はクラスで人気はあるが頭が非常に悪いことで有名だ。

「くそっ！前沢！ノート見せてくれエ！」

「・・・」

「嘘だろ！???」

須藤にご指名された前沢 詩はそつと先ほど返されたノートの表紙を須藤に見せる。

そこには、“再提出”の付箋が貼られていた。須藤、悶える。前沢、なだめる。

「よしっ！今日も牛乳だ！前沢！！再提出もとい、牛乳飲み仲間同士で勉強会だぜ！」

「おー」

そんな光景がこのクラスでは当たり前になっていた。

「はいっ、須藤。告白は後にしろ」

藤枝が須藤に落ち着いた声で言い、須藤はそれに反発するように立ち上がって答えた。

「告白じゃないっすよ！？ただのお誘いですよ！お・さ・そ・い・っ」

「そんなに欠点嫌なら、久瀬のノート見せてもらえればどうだよ？」
「えっ??久瀬君の??？」

そう藤枝が発言すると藤枝はチラッと誠を見て、須藤も誠に視線を移す。

誠は、イスから立ち上がって教師・藤枝に抗議する様にポケットに片手を突っ込んで、

「せんせえ、虐めるのは止めてくださいよ」と言った。

ところが、藤枝は抗議に屈しない。落ち着いて誠の目を見た。

「久瀬、お前は優等生組なんだからもつと社交的になっただろうだ？」

“優等生組”と言う単語に教室中が少しばかりざわめき出した。

嘘？久瀬君って頭いいの!?

不良だから頭悪いのかと・・・。

何点くらい取るのかな??

噂に耳を傾ける事無く誠はさらに続ける。

「俺は、“1人”が大好きなんですよ、先生」

「そんな頭持っていてもつたないぞ??久瀬」

「……」

誠は左の人差し指で頬をぼりぼり搔いて黙り込む。

「お前くらいだぞ？進路調査票出してないの……。先生が進学を勧めているのに」

「流石に俺の頭じゃお勧めの大学は進めませんよ？」

「何を言うんだ、お前の頭の良さなら東大も夢じゃないんだぞ」
ざわめきがことさらにうるさくなる。

ととととつ、東大！??

嘘だろ！????

「進路調査票、まだ提出期限2週間あるからそれまでに提出しろよ？」

「……はいっ」

誠は席にゆっくり腰を下ろす。ざわめきはまだ止まない。

朝のHRの最初の10分間はこうやって消費され藤枝が話題を変える。

「さて、今度の期末テストなんだが、」

誠は、欠伸をしながら窓の外下一刻と変わりゆく景色を覗いていた。

テスト事件と学食事件

2学期の期末テストは、11月の30日から12月6日からの予定だったのが、

1日ずつずれて12月1日から12月7日に変更になった。

理由は、3年生の1日目のテスト（化学）の担当教師が盲腸になり入院したからだそうだ。

つまり、それまで作っていた段階にあった問題用紙がお流れになつて、

他の教師が急遽作ることにになり、それに合わせてテスト自体が1日ずれることになったのだ。

赤点マスターや公式の暗記が苦手等の生徒からしてみればこれほどラッキーな事はない。

現に、誠のクラスメートの須藤や前沢。その他の“おバカ連合会”の方々。

誰もが、この“緊急事態”を喜んで飛び上がる生徒さえ垣間見えた。誠や、優等生組として名高い里佳子にとってみればあまり心揺さぶられる話ではなかったが。

藤枝が、生徒たちにとって幸福の知らせを言い放った後、

「そんじゃ、その間テスト勉強」

と、クラスメート全員に聞こえる様に大声で言った。

「よっしゃー！」「なんかやる気が出てきたぜー！」

「静かにしろっ！」

わいわい騒ぐクラスメートの女子生徒やら男子生徒たち。当然のごとく誠はその輪には入らなかった。

そして、机をガタガタ音を立ててみんな班を作つてそれぞれ勉強と意見交換会を開始し始めた。

誠も、1人で机の脇にかけてあるカバンから苦手な方に当たる世界

史を取り出してノートも広げた。

真っ白なノートは授業ノートではなくあらかじめ用意していた“自主勉強ノート”だ。

誠の世界史の教科書は太文字とその他の重要語句等に蛍光ペンでアンダーラインを引いていた。

彼はそのアンダーラインの文字をノートに写してその意味を書き出す作業を始めた。

すると、1人の男子生徒が誠に近づいてきた。

「えつとお、久瀬君??」

誠は黙って声の主の顔を確認する。

「よおッ・・・」

その顔の主は、先ほど再提出のノートで悶え苦しんでいた須藤であった。

須藤は苦しそうな笑顔を顔に浮かばせていた。蛇ににらまれた蛙である。

もちろん、蛇は誠で、蛙は須藤の事である。

「なに?」

須藤と初めて交わした誠の言葉は“なに?”の記号含めての3文字だけであった。

誠のちよつと低い目の声に少し須藤はおののいている。

須藤は、おののいたまま黙り込み、誠は須藤の目をじっとにらみつけている。

「何もないなら帰ってよ」

「あつ、そぞ。そうじゃないんだよ。久瀬君っ!」

「だったらさあ、用件まとめてからまた来てよ。須藤 康博君よ?」

「あつ、うん・・・。分かりました・・・。また出直します・・・」

須藤の言葉の最後の方はいつの間にも敬語に成り果てていた。

とぼとぼ、背中を向けて自分の“グループ”に戻る須藤。それを目で送る誠。

可哀相なくらい須藤は完敗し、誠の圧勝であった。

そして、須藤のグループで誠についてのグループ会談が開催された。テスト勉強は一体どうしたのだろうか？

『どうだったよ？須藤』

『もうマジ怖かったぜえ、背筋が凍ったつうかなんつうか』

『やっぱ、目が怖いよなア、誰いるか？久瀬君に対抗できるギリギリは』

『いる訳ねえだろ。分かんたろ？？だから赤点マスターから脱出出来ねえんだよ？』

『関係ないだろ！？？』

『あつ、休み時間だ』

ちょうど、1時間目のチャイムが鳴り終わった瞬間だった。

午前中の授業があつという間に過ぎ去り昼休みになった。

「一緒に弁当食べよー」「うん、いいよ」

「あつ、終わったら大富豪しようぜ？」「ドベは、チョコバーだぜ？？」

「バーカ、次の授業トランプハンターの池永だぜ？」「そんじゃ、2本が限界かな？」

それぞれが、自分の領域に入っていたが、その領域を開放するのがこの昼休みだ。

弁当を向かい合わせて食べたり、友人同士でトランプしたり開放の仕方は人それぞれだった。

「百合奈、一緒に食べよ」「おう、里佳子。いいねえ、食べよう食べようッ！」

隣の席の騒音メーカーの百合奈は里佳子と「いただきます」と一言言って弁当を食べ始めた。

そのタイミングを狙って誠は自分の席から立ち上がって教室からそ

つと姿を消した。

「うまいのー、ほら里佳子。肉巻やぞ〜??」「貰っちゃおうか?」

「何を言うのさね!? 私の好物だぜ!??」「だからだよぉ〜??」

「・・・」

誠が向かった先は学生食堂だ。

誠の教室から学食まで距離はそう遠くない。歩いて3分もあれば十分な距離だ。

遠くないのに、歩いて3分ほどなのに学食に着いた頃にはほとんど満員状態。

だから、閑取に苦労する場面も少なくない。集団行動している連中ならなおさらの事だ。

いや、1人でも十分難しいのだが不良がそこにいると言う理由だけでみんな席を譲ってくれる。

誠がまさにその良い例だ。不良と勘違いされてはいるもののみんなの目から見れば不良だ。

不良の誠が学食にいる時点でみんなこぞつて一瞬だけ立ち上がって席を譲ろうとする。

毎度毎度の学食の光景だ。

恐らく今回も同じような光景がこの学食で発生すると思う。

あらかじめ、券売機で買っておいた安いカレーライスの券を調理台で調理をしている

調理師に券を渡して出来上がりを待つ。その間にコップに水を入れて箸を取って。

「カレー」と言う呼び声が聞こえて器を手に取りお盆に載せていつ

もの特等席に向かう。

そして、今回もやっぱり行く過程で全員が一瞬だけ席を譲ろうと立ち上がって誠が通り過ぎると

また席に座りなおして自分の話の領域に戻る。

立って座るみんなの行為は、まるで体育大会でよく見かけるウェーブの样だった。

通称“学食大会ウェーブ”。

誠の学食の特等席は窓際のやっぱり端っこ。人間誰しも端っこがなぜか落ち着く。

誠もその人間のうちの1人である。

みんなもその窓際の端っこが彼の特等席だと言っていることを知っている
ので、

あえて学食常連者たちはその席を空けて座る。

今日もいつもどおり・・・。

「やっほー!」

「・・・」

もう分かると思う。例のごとく例の女である。

自分を下の名前で呼ぶ様に強要し、苗字に都道府県の名前が入っている、

「おやおや?お忘れかな??この私を??」

「福井百合奈・・・」

「大正解ッ!」

なぜか、先ほど里佳子と教室で弁当を食べていた百合奈が自分の目の前に自分の特等席を占領している。

どういう事だよ?百合奈より遙か前に自分は教室を出て行ったはずなのに・・・。

「そこ・・・、退いてくれないか?」

「どうしてだい?席なら余るほどあるでしょ?」

「・・・」

誠を黙り込ませる程に説得力のある反論。百合奈は徹底的にその席を退こうとしない。

特等席の隣は空いている。自分の特等席を退こうとしない彼女。仕方あるまい。誠は隣の席に座ることにした。

そうすると、

百合奈はさつと左足を伸ばしてその左足をイスの上に乗せた。

「おいっ、人の食事を邪魔する気かよ？ 福」

「はぁーん??」

“福井”と苗字で呼ぼうとしたら百合奈はもう片方の足を伸ばして両足でイスを占領した。

これは、嫉妬深い女子の犯行なのか？それともただの虐めか？

「これは、虐めか？俺のクラスメートの女子Y・F」

「いやぁ、ちよつとした弄りだよ。私のクラスメートの男子M・K君」

「人を空腹に陥れて楽しいのか？Y・F」

「うにゃー、“陥れる”は酷い言い様だなぁ。M・K」

イニシャルトークで会話する誠と百合奈。一向に話が進展しない。せっかく、買っておいだたカレーライスが冷める。冷めたカレーなんて美味しいはずがない。

しかし、その隣は自分のことを知らない1年生の女子集団。

さすがに、後輩に“不良”と言うみつともない脅しは掛けたくない。別の席を探すか、例のごとく妥協案を行使するのか。誠は悩む。

昼休みは、もう10分近くしかない。カレーの白米は冷め始めている。

「ゆ・・・百合奈・・・。退いてくれ・・・ませ・・・ん・・・か？」

ブルブル震える声で“百合奈”と名前呼び退いてくれないかと誠は頼んだ。

ぴょっこと犬の耳を頭から飛び出した百合奈は両足を退けて特等席からも立ち上がる。

「はいっ、どうぞ」

「カッーーーーー……!」

理性を失いそうになるもグツと抑えて先ほどまで百合奈の尻が占領していた生暖かいイスに座った。

立ち上がった百合奈はその隣の席に座ってジツと誠の方を見つめる。

「ジーーーーー……」

ご丁寧なことに擬音を口に発して“貴方を見えています”サインを発していた。

カレーを急いで口に運ぶ誠は彼女の熱視線を無視し続ける。

「のうー、誠君によー?」

舌足らずな口調で百合奈は声を掛ける。誠は当然無視。

百合奈はそのまま話を続ける。

「なにゆえ、この私が“一匹狼”のキミにこうやって話をし続ける
か分かるかいのう?」

「……」

口をモゴモゴ動かすも徹底的に無視を行使。更に彼女は続ける。

「私は“誘導”しておるのだよ??」

「ハア???」

手元のカレーを全て食べ終えてスプーンを置いて彼女の発した二字
熟語“誘導”が

気になり“ハア???”と言う言葉で聞き返した。

「キミが“社交的人材”になる為にさ」

「ハアア??」

「現にチミは、こうやって私と会話を交えているではないか。そう
でしょ??」

「アッ……」

誠は百合奈の発言で気が付いた。知らず知らずの内に彼は彼女の策
略にハマリ

百合奈と会話を広げていたのだ。

「お前、その頭の良さをもっと学問に生かさん?」

「目標は、高く言うだろお？私のハードルは60点が限界なのさね」

「・・・・・・・・」

誠は席から立ち上がり皿を載せたお盆を手にとって片付け用の食器棚に足を運ぶ。

百合奈もその後について行く。

「付いて来んなよ」

「だって、キミとクラス一緒だもん。付いて行っているんじゃないくて、道が一緒だもん」

「・・・、勝手にしろ」

そう、彼女を冷たくあしらい、彼は食器を食器棚に置いて学食を離れて自分の教室に戻って行った。

掃除当番と乳酸菌

百合奈との昼休みの学食での激闘を繰り広げた誠は憔悴しきっていた。

例え、スタミナの付くカレーライスを食べたとしても、精神はすでにズタボロだった。

5・6時間目の授業もズタズタにされた精神のままで誠は受けた。

「おーいつ、誠くん??」

「・・・・・・・・」

そして、放課後のSTになり今日の掃除当番が発表された。

「今日の教室当番は3班。小山から須藤だぞぉ?」

「マジかよ!?!」

須藤が、掃除当番の発表に敏感に反応してその場で立ち上がった。立ち上がった須藤の後姿を見た須藤の牛乳飲み仲間の前沢が冷かしをこめて言葉を掛ける。

「康博ちゃん、ふぁいとー」

「前沢!!!心無い言葉掛けんな!!!」

前沢の冷かしに満ち満ちた言葉に須藤は大声を上げて怒鳴ったが当の本人はスルー。

その時の、前沢の冷かしのレベルは半端じゃなかった。

“ふぁいとー”に到っては平仮名でしか表現できないほど頼りないものだった。

すると、須藤の冷やかしいに担任の藤枝も割り込んで

「須藤、痴話げんかなら校門でしろオ」と前沢も抱きこんだ様な冷かしを言い放った。

須藤は、猛講義を藤枝にぶつけて中々掃除が始まらない。

その不毛な冷やかしいの最中、自分の机の中の用意をカバンに詰め込む同級生たちは数知れず。

誠や百合奈、里佳子たちもその数知れないメンバーに属していた。

「あほらしい・・・」

誠はつぶやいた。ものの10分もあれば済む事なのになんでそんなに嫌がるのか。

嫌がる理由が分からなかった。

「先生！痴話げんかなんて酷いつすよ!？」

「じゃあ、“夫婦漫才”か??」

「余計に酷い!!!!!!」

なんだろう? 空気が教室掃除の当番の話から教師と生徒のコント大会になっている。

藤枝がボケ担当で、須藤が頼り甲斐のないツツコミ役。

話の当事者の前沢は、爪に塗ってあるマニキュアを見ながらふーつと息を掛けて話には混じらない。

誠の彼女の評価は“面倒くさがり”。まさに今の状況がそうだった。これじゃあ、いつまで経っても話に埒が明かない。

「諦めて、掃除に参加しろよ、須藤」

「そうだぞー、康博ちゃん」

「前沢!!! 当事者が威張るな!!!!」

「あつ、ちと剥けてるな・・・。塗り直さないと・・・」

「無視すンな!!!!!!」

なんで須藤の“ん”が“ン”になったかと言えば声がひっくり返ったからだ。

もう、3人コントの劇場と化したこの教室は異常なほどに喧しい。

廊下側の窓から教室から出て行き下校や部活目的の生徒たちが一瞬だけ教室の様子を

覗き込んで通り過ぎていく。同じ班の小山が須藤に話を持ちかける。
「須藤、いい加減諦めろよ。お前が参加しないと俺達帰れないんだからよ」

「こつ、小山までエ」

藤枝の顔フツと緩んで須藤の目を見たまま教室中に聞こえる様に言

った。

「はい、礼！」

「せんせ」

「起立ッ」

と須藤が『先生』と言いかけたが委員長の“起立”と言う声に負けた。

「気をつけっ・・・、礼！」

「ありがとうございました」

「ありがとうございましたア」

と、一斉に生徒達が立ち上がった礼をして、教室を出て行く。

誠も、イスを机に上げて教室を出て行こうとした。

「ほらっ、ほうき」「こここっ、小山あ」「諦めて掃除」

掃除当番でSTを5分くらい時間を消費した須藤はまだ往生際が悪い。ほうきを中々受け取るうとしない。

誠は、須藤の姿を見て朝方の姿を思い出した。

朝自分に何かを頼もうとして誠の攻撃に見事に惨敗した須藤。

須藤の意図は分かる。絶対、アレを見せて欲しかったのだと思う。

誠は、カバンからある物を取り出して手を取って往生際の悪い須藤の机に近づく。

「だからよー」

「・・・」

須藤の机の上に投げつける様に“ある物”を置いた。その誠の姿を見て須藤は目を向けた。

誠は何も言わずに教室の前側の扉から出て行く。

「久瀬君？」

須藤は、扉から出て行った誠を見送って机に視線を落とす。

「あっ」

“数学 久瀬 誠”と書かれていたノートが置いてあった。

「数学ノート・・・。案外優しいのかな？久瀬君」

誠は階段を手すりに手を掛けながら下りて行つた。

誠は、クラスメートや同級生たちと群れる事はしない。

だから、部活動はしていない。

階段をさつさと下りて1階にたどり着くと自販機の前に一瞬立ち尽くして

気に入るジュースが無かつたらすぐさま立ち去る。ほとんどが彼の気分だが。

今日は甘い物が飲みたいなとか、ただ単にのど渴いたなとかとで買うか買わないか決めている。

今日の気分は、イライラしているから（百合奈関係）カルシウムを摂取したい気分だ。

「あつた」

“ヨーグルト風味乳酸菌” ちよつと違う気もする訳だがこれしか牛乳に近い飲み物が無かつた。

牛乳のペットボトルがある訳でもない。あつたら逆に気持ち悪い。

「120円は安いよな」

高校の自販機の500ml入りのペットボトルはなぜか安価なのだがこれは高校生にとっては救いだ。

特に、バイトとかをしておらず部活に金をつぎ込む生徒にとっては・・。

3枚の硬貨を投入口に入れてボタンに赤い光が点灯し自販機が選択を強いる。

「さあ！選べ！！」とばかりに赤々と丸い小さい光が点いていた。

“ヨーグルト風味乳酸菌”のボタンを押してジュースを取り出し口から取り出す。

取り出してすぐに、ペットボトルのキャップをパチツと音を立てて開けて中身を飲みだす。

冷たいヨーグルトの味のする“乳酸菌”。頭にキンツツと響く耳鳴

り。

全体の3分の1ほどを飲み干すとカバンの脇に突き刺してその場から立ち去ろうとした。

「久瀬君！」

階段の上から聞き覚えのあるちよつとおバカっぽい男子の声が廊下に反響して聞こえてきた。

この声は、さっきのSTで5分ほどを消費して前沢に弄り倒されて掃除当番の存在を否定した、

「須藤……」

階段の踊り場に到着していた須藤の片手には親切にもさっき誠が貸してやった数学ノートがあった。

須藤はカバン片手にノート片手に踊り場から誠の元に降りて来た。

「ハアハア……」と息を切らしている須藤。それを見ている誠。

「間に合って……、良かったア……」

「何の样だよ？ 須藤」

「何の用って……、そりゃ」

誠は、須藤に背中を向けて校舎の出口を目指す。その後を須藤が追いかける。

切らした息で誠を追いかけて、誠の方はそれに負けじと誠もスタスタ歩く。

「待ってくれよ……！ 久瀬……君……」

「お前そのノート、まだ写し終えてないだろ？」

スタスタ歩きながら誠の歩行スピードは更に上がる。須藤は肩を掴もうとするもギリギリ届かない。

「ソリヤ……、そうだけ……ど」

「じゃあ、なんで付いて来るんだよ？」

誠は足を止めて、くるっと回れ右をして須藤に顔を向ける。須藤も顔を上げる。

「ストーリーか？」

「いやっ！ 決してそうではなく！」

「じゃあ、なんだよ？」

「いやー・・・、ちよいと・・・」

勉強、数学教えてくれないかなアつと・・・。

「・・・」

ハアアア?????

ノートを片手に持っている須藤の姿と予想を裏切る発言に誠は少し戸惑う。

戸惑い。

誠が想像していた須藤の言葉は、『ノート、ありがとう!』と言うものかと想像していた。

それが、予想を覆し『勉強教えてくれ』。

これはちよつと面白い奴かもしれない。

誠は、自分の数学ノートを持って息を切らしている須藤の話を聞くことにした。

コイツの面白みがどれだけの物か、試すことにしたのだ。

「なんで？」

無難に須藤にその質問をぶつけてみる。すると、須藤は答える。

「なんでつて、ソリヤ頭悪いからだよ!」

「それを何で俺が教える??」

「キミの、ノートを借りたから・・・」

「そんじゃあ・・・、その片手のノートは???」

すると、須藤は少しばかり黙り込んで誠のの目に真顔で答えた。

「カバンに入らなくて！」

「・・・プツ」

「あっ！笑った！！！！」

誠の顔にちよつとだけ笑みがこぼれて誠は須藤の肩を叩く。

「合格だ、須藤。一緒に図書室に来いよ」

「おっ。あっあああ・・・、ありがとう」

図書室と運動部

「およ？およよよ？」

現在、部活のユニフォームを着ている福井百合奈が目の前にしている光景は実に異色な光景であつた。

自分が、社交的に友だちとの付き合い方を一所懸命に教えている久瀬 誠が、

クラスの人気者、須藤康博と少し笑みを浮かべて並んで歩いていたのだ。

「どうしちまつたのかなア？誠君」

誠に声を掛けようと2人の背後から高い声を出そうとした時に突然自分に声を掛けられた。

「福井先輩ッ」

百合奈の所属している女子ハンドボール部の後輩の久保田である。

久保田は、やっと見つけたと言って百合奈の目を見た。

「あつ、久保田。どうしたの？」

百合奈がそう聞くと久保田は顧問から承った内容を話した。

「飯島先生が大会の話があるから来いって言っていましたよ？」

「あー、そっぴやもうすぐ大会だったねえ。何処とやるんだっけ？」

「それを話すと思うのですが・・・」

そう言われれば、そういう事になる。大会のいきさつや流れ。強化合宿の日程やらメニュー。

それらをまとめて話すそうだ。

だから、行方不明になっていた百合奈の探索に久保田が選出されたのだった。

「いま、飯島先生何処にいんの？」

「運動場でジャージ着てまっていますよ」

「うん、すぐ行くわ。ありがとね久保田。先に行っておいて」

「分かりました」と久保田は運動場に向かって小走りで行っていった。

た。

百合奈が久保田の背中を見送ってさっきまで誠と須藤がいた廊下に目を向ける。

久保田と話しているうちに2人はどこかへ消えてしまっていた。

「行っちゃったかぁ・・・」

百合奈は、久保田に声を掛けられる前の言葉を忘れていた。

誠と須藤に何を言おうとしたのか、どうして声を掛けようとしたのか。

彼女は全てを忘れていた。

くるっと、方向転換をして百合奈も運動場へ走り出した。

「まあ、いいか・・・」

誠は須藤に数学を教えるために図書室へ歩いていた。

誠が、図書室に行くのは初めてだったが放課後に落ち着いて勉強を教えられるのは、

図書室位だろうと彼の思考回路はその答えを導き出した。

「ねえ、久瀬君」

須藤が相変わらずの口調で声を掛けてきた。誠は最もメジャーな答えを返した。

「なんだ？」と。須藤は続ける。

「久瀬君、って結構優しい奴なのに、どうして不良に勘違いされているのかなあ？」

誠は、須藤に顔を向けないまま、まるで廊下に答えるように口を開く。

「知るかよ。勘違いして奴の気持ちなんか。勝手に勘違いしているだけだよ」

「そっ、ソリヤそうだね・・・」

女子ハンドボール部のメンバー全員が運動場に揃ってこれからの部活の方向等の説明をやっていた。

顧問の飯島 友香はこの学校では若い方の女性教師で高校時代はハンドボールをやっていた事から

顧問と言う役に就いていた。飯島は女性のランクで言えば美人の部類に属するが

性格が非常に男勝りで言葉遣いもどちらかと言えば男くさかった。

「それじゃあ、以上で説明を終了。残りはプリントを見て。返事は？」

「はいッ」

「……、声小さいなあ……。これじゃあ勝てんかもだなア……」

「は——いッ！！！」

「よろしい。そいじゃあ、校舎ラン15周ッ」

「エー——ッ！? ? ? ? ?」

「コラッ、返事より十分デカい声出して
“ エッーーーーッ！？？」
かい！？？」

「朝練で十分ですよ。飯島先生」

「甘ったれるなッ！それじゃあ天敵の成城女子には勝てないぞ！」

飯島とハンドボール部の部員たちの不毛ない争いが勃発し始め、ついに、部員の1人の後輩が禁句を飯島にぶつけた。

「先生。もうちょっと女の子っぽくしてくださいよ。男が寄り付か

L

「ええい！もう怒った！校舎ランニング25周！」

「エッ――！！！」

図書室に到着した2人は図書室のドアを開けて中に入った。

すると、テスト勉強をしている生徒たちが何人かチラホラ見えた。

「どこに座る？ 須藤」

「アッ、何処でも良いけど？」

咄嗟に目のあつた図書室の机を指を差しそこに座って勉強を教えることになった。

誠が先に席に座ると須藤がアッと受付を見て声を出した。

図書室の図書委員の顔を見て言ったのだと思う。

「前沢ッ」

「よーっす。康博ちゃん。珍しいのオ。康博ちゃんがココに来るなんて」

今日のSTで大混乱を招いた人物の1人、前沢 詩である。

「なんで、ココにいるんだよ。お前が」

「だって、図書委員なんだもん」

と言って彼女はブレザーに付けている図書委員のバッジを堂々と須藤に見せ付ける。

「そうじゃなくて、お前の当番、金曜だろ？」

「いやあ、友だちが“彼氏とでーと”とかってバックれたらしてねエ。そんで白羽の矢が立ったのさ」

「なんで、断らないんだよ？」

「突き刺さった矢は中々抜けなくてね。そう言う康博ちゃんは？勉強？？」

「あつ、そうなんだ。久瀬君が教えてくれるって」

「久瀬君が？あの？？」

と、受付から前沢は目を凝らして誠の姿をロックオンした。

「そんじゃ、俺」

「あのさ」

“俺行くわ”と言いかけたときに前沢がそれを邪魔した。

「私もさあ、教えてもらっちゃおうかな」

「えっ？？」

「数学ウ」

誠のクラスメイト沢里佳子は陸上部に所属している短距離の選手。里佳子は陸上部の部室の鍵を開けて“沢”と書かれているロッカールームの前で着替えを始めた。

脱いだ制服をロッカールームに入れるためにドアを開きハンガーに制服をかける。

そして、制服の、自分の足元に視線を落とす。

「あちゃー・・・、どうにかしなくちなあ・・・」

里佳子がそれを見て落胆していると後輩が部室に入室して来た。

後輩が部室に入室すると里佳子は慌ててロッカーのドアを勢いよく閉めた。

「沢先輩、こんにちは」

「あつ、セリちゃん。こんにちは」

「あれ？今日は早いですね？着替え」

「エッ・・・？うんっ！だってもうすぐ大会だもんね！と言うわけで先行つとくね」

「？はい？？」

大会と言って里佳子は大急ぎで部室を飛び出していった。

後輩のセリちゃんは、顔に疑問符を浮かべたまま着替えを始めた。

「ハア、もう後4周かあ」

福井百合奈率いる女子ハンドボール部の部員たちは顧問の飯島に言われた課題

校舎ランニング25周を脅威のスピードで走っていた。わずか15分で21周を達成していた。

さつさと終わらせた気持ちで募百合奈やその他の部員たち。

「飯島ちゃんも、ドぎつい内・・・容させ・・・るもんだ・・・よ・・・ね」

「話し・・・ている・・・暇あつ・・・たら・・・しゃっしょと走つ・・・て・・・よね・・・」

全員の足の筋肉の疲れがピークに達しかけていた。当然のごとく百合奈も。

「ひゃあゝ、ひゃと・・・2周・・・ぎゃんばれゝ」

「ふぁーいー・・・」

体の疲れと言うのは実に恐ろしい物である。まず足の筋肉が疲れて、その後疲れは口など発言にまで影響を及ぼす。その状態がまさにソシ。

「アッ・・・」

百合奈目の前に見覚えのある人物が校舎の出口から飛び出してきた。校舎ランニングの途中参加である。

その人物は、百合奈のよく知っている人物で、今朝駅のコインロッカーから出てきた

「りきやきよー」「ふえ???」

百合奈が頼りなさ気に「りきやきよー」と叫んだが正しくは「里佳子」である。

「百合奈???ってキャーーーーー!!!」

キャーーーーーと里佳子が叫んだ理由は百合奈の今にもぶっ倒れそうな体勢と疲労で歪んだ顔が原因。

「りきやきよーーーー」

「来ないでーーーーー!」

誠と須藤の数学の勉強会に前沢が混ざり誠が数学を2人に出来るだけ分かり易く伝わる様に教える。

クラスのほとんどが手こずった問題に差し掛かり須藤が質問する。

「そんで、この式ってどうやって使うの?」

「この場合は、この式使うよりもっと分かり易い方法があるんだ」

「えっ!? そうなの!??」

前沢が大声で立ち上がりながら感嘆の声を上げた。その途端にあちこちから“シュー”の声。

顔を赤らめてイスに座る。

「前沢……。お前……」

「良いでしょ……。驚いちゃったんだからさア……」

「戻って良いか？」

校舎ランニング25周を終えた部員たちのスタミナは100%切れ
ていた。

冬と言うのに冷たいお茶や水を一気飲みする部員たち。

「よし！25周終わり！！本日終了！！」

「まだじゃ！ボケ！！！」

鬼顧問の飯島の声がギンギンに耳に響く。その声は校舎ランニング
中の里佳子の耳にも届いた。

後輩たちもその声にちよつとだけビビッていた。

「凄いですね……。ハンド部」

「凄いと言うか……。鬼が島だよね……」

里佳子の秘密と百合奈の名前

「ありがとうございますー!!」

時刻はすでに6時30分。辺りの空を真っ赤に染めていた夕日は完全に落ち、

暗闇と静寂が空を支配していた。

トラックには眩しい白いライトが落とされてその光の下で運動部の部員たちは練習を続けていた。

もうすぐ、ほとんどの運動部が大会を迎えることがあつて筋肉をつめているのである。

陸上部、女子ハンドボール部、野球部、サッカー部等の大手の部活ばかりだ。

「それじゃあ、大会すぐだから家帰ってもストレッチを忘れないように!」

「はいっ!」

そんな、カリカリした雰囲気運動部の中でいち早く解散したのが里佳子の陸上部である。

陸上部の練習メニューは日々厳しさを増しており、

大会でぶっ倒れるんじゃないか?と言う噂まである程の厳しさだ。

1時間の内に校舎ランニング10周、トラック10周、障害物ランニング5周をやりこなす。

「今日も疲れたね」

「帰ったらシャワーすぐ浴びるよ」

誠は誰もいなくなった図書室で須藤と前沢に数学を教え続けていた。誠が、ポケットからケータイを取り出して時間を確かめる。

「もう時間だし、今日はここまでで良いか?」

「あつ、うん。十分だよ久瀬君。だよな?前沢」

「うん、凄い分かりますかったあ。藤枝よか何倍も」

そう言っていると前沢はくすりと苦笑いをした。それにつられて須藤も誠も苦笑。

誠は、少しだけ歪んだ表情でカバンを机の上に載せてノートを片付け始める。

すると、前沢がぼそりと呟いた。

「でも、意外だね。久瀬君本当はこんなにもいい人なんだア」

誠はちよつとだけ動作を止める。前沢に指摘されたからだ。

自分が今日の放課後にした行動を思い返してみる。

放課後、須藤に呼び止められてソレがきっかけで誠はさっきまで須藤と前沢に勉強を教えていた。

その行動を思い出した瞬間、誠は今日の昼休みに百合奈が言った単語を小さく言った。

「“社交的”か・・・」

「えっ？なに？？」

「いやっ、なんでもない。じゃあ、また今度な」

誠は、図書室の扉を開けて勢いよく図書室を出て行った。

「・・・」「・・・」

残された須藤・前沢組も片づけを始めた。

前沢の方は、誠が小さく呟いた言葉を自慢の地獄耳で逃すことは無かった。

「“社交的”」

「えっ？なにが？？」

前沢が“社交的”と誰にでも聞き取れる声で発すると須藤が食いつく。

すると、食いついた須藤の姿を見て前沢は声を張り上げて爆笑。大爆笑。

「ハア・・・、お腹痛いッ！」

前沢の目からは涙すら映える。別に悲しいから泣いているのではない。笑い泣きと言っやつだ。

須藤の頭上には、“?????”がただただ浮いていた。

「康博ちゃんさ、ちよつとはそのニブチンぶり治した方がいいよ??」

「だから！なんなんだよ!？」

「あつははは！いつ・・・息・・・無理イイ」

里佳子は、部室で素早く制服に着替えをすると自分のロッカーの下に置いてある紙袋を手にとって

他の部員たちに挨拶を済ませると早足でその場を去っていった。

校門に向かうため校舎の真正面に差し掛かる。里佳子は1人重たい紙袋を手にとって悩んでいた。

「ハア・・・、“コレ”どうしようかなア・・・」

校舎に背を向けて校門に方向転換しようとした時後ろから声が掛けられた。

「沢じゃん?」

里佳子は声の主の方に振り返る。声を掛けて来たのは今朝駅で出会った教室で挨拶をした、

「久瀬君???」

「おお」

声の主は里佳子のクラスメートの誠であった。里佳子は咄嗟に紙袋を背中に隠す。

「どつ?どうしたの??久瀬君。キミ何か部活入ってたっけ?」

「いやっ、須藤に勉強教えてって言われてな」

「ソッ・・・そうなんだ・・・」

里佳子は背中ではいている紙袋をちらりと見る。その不審な行動に、誠は疑問を覚える。

単刀直入に聞く事にした。

「なあ、沢」

「はっ！ハイイ??」

里佳子の声が裏返る。裏返るとなると余計に怪しくなる。

「何か隠してるのか？」

「ふえ！！！？べべ別に！！！？？」

「・・・・・・・・」

ヤバイ・・・・。こりゃ久瀬君にバレて・・・・。

里佳子はギュッと紙袋の持ち手の紙を握り締めて目をつぶった。

すると、誠は、

「・・・・、まあ別にいいか・・・・」と問い詰めるような質問を取り下げた。

「えっ？？？？」

「話したくないなら、別に良いよ」

「エッ？？？エッ？？？」

「また、明日な」

そう言い残して誠は校門を出て行き塚口駅に続く街灯が照らす道を歩いて行った。

里佳子はポツンと寒空の下その場に取り残された。

紙袋が自分の背中にあることを忘れて。

土曜日になった。

誠は進路調査表の提出が遅れていた為、担任の藤枝に呼び出しが掛かっていた。

気だるい誠はわざと制服をゆっくり着替え終わった後の事を考えて厚手の私服をカバンに詰め込んだ。

昨夜まで付いていた暖房は予約が切れていて部屋は少しばかり肌寒かった。

「ふぁー」と大あくびをかいて階段を降りて玄関に向かう。
ちらりと誰もいないリビングを覗き込んだ、テレビが付けっぱなし

になっていた。

どうやら昨日は、テレビを消すのを忘れてそのまま自分の部屋に、こもったらしい。

玄関方向に向いていた体をリビングに向けてテレビの電源ボタンに手を伸ばした。

「今日の、星座占い1位は」

1位を聞く間もなく誠はブチッとテレビの電源ボタンを押してライトが赤色になったのを確認して

再び玄関に向かつて歩き始め座り込んで靴を履き始めた。すると、上の方から声が聞こえてきた。

「お兄ちゃん？」

靴を履き始めていた誠は腰だけをネジって「お兄ちゃん」と言った声の主と会話をする。

「遊里か、どうしたんだよ？」「お兄ちゃん」なんてよ。気持ち悪いぞ」

「えへへ、たまにや」「お兄ちゃん」攻めで落とそうと思ってねえ。どう？効果あった？？」

「毒的な意味で効果絶大だったよ？」

「誠は相変わらずきついなあ……。ちよつとがっくり」

と、誠の妹の遊里は頭を垂れてしょぼんとした体勢を取り始めた。

誠は無視。

遊里はそのまま固まって誠が話しかけるのをずっと待ち続けた。すると、誠の口から出てきたのは予想通り、冷たい言葉だった。

「お前、受験生だろ？いい加減時間の無駄止めるよな？」

「ああっ！誠だったら可愛いかわいい遊里ちゃんを傷つけるんだあ！」

「傷つけているんじゃないよ、警告だよ。遊里」

「??????」

誠は両方の靴を履くと立ち上がって鍵を開けてドアを開けた。

パジャマ姿の遊里にはどぎつい寒さだった。誠は遊里の悲鳴もかえりみず外へ出かけた。

「誠ったら、 “ いつてきます ” ぐらい言えつつの」

学校に行くための電車より何倍も後の電車を彼は選んで乗り込んだ。いままで寒い風が吹くホームから一気に環境の良い暖房の効いた車内になりちよつと鳥肌が立つ。

鳥肌がおさまった所でロングシートに座って電車が塚口駅に連れて行ってくれるのを待つ。

最初にも言ったが誠の家と学校の距離はとても遠い。

誠がそんな遠い場所の学校を選んだ理由は1つだけだった。

頭が悪いからじゃない。好きで行ったわけでもない。友達がいるから選んだわけでもない。

親と一緒にいるのが嫌だったからだ。

『塚口、塚口です』

両開きの自動ドアが開いて、彼は電車から降りてホームに立つ。階段に向かって歩き始めて

今日もまた駅から始まるいつもペースを開始した。

定期券を改札口に通して駅から脱出して学校目指して歩き始めた。

親と一緒にいるのが嫌。

誠にとって両親が一番の天敵だった。

昔から勉強勉強言われ続けて悪い点を取ったら罵倒されて無理矢理入らされた塾を辞めたいと言ったら

『最後までやれ』と言われる始末。

一方、妹の遊里は両親の事が大好きで塾で習ったピアノも中々の腕前だった。

頭の方は、残念ながら誠ほどではなかったがそれでも明るい性格は誰にも負けていなかった。

「・・・」

先日、百合奈に言われた言葉を思い出す。

“ 社交的になろうよ ”。

俺は、遊里と全然違う。遊里と違って友達が誰もいない。遊里と違って性格がひねくれている。

遊里と違って両親の事が大嫌いだ。遊里と違って・・・、遊里と違って・・・。

誠は劣等感を感じていた。実の自分の妹に対してだ。

「俺・・・」

ぼーっと考えているうちに学校の校門に着いていた。校門を通り過ぎて言葉の続きを発した。

「ヤキモチ・・・、妬いてんのかな・・・。遊里に・・・百合奈に・・・」

無意識のうちに、誠は強制的に呼ぶように言われた“ 百合奈 ” と下の名前で呼んでいた。

デカコートと目撃

進路相談室で、藤枝が待ち受けていた。

「まあ、座れ」

「はい・・・」

「それじゃあ、まずだな」

「・・・」

藤枝の長つたらしい進路の話、就職先や進学先のお勧めをされて誠は睡魔に襲われていた。

東大なら自分の成績がどれくらいの順位なのかとか、就職ならどのエリート企業だとか。

そして、それらのチラシを大量に持ち出されてソレを読むようにと宿題を出される始末。

持って来ていたカバンがとんでもなく膨らみ、藤枝の話は終わった。誠はその膨らんだカバンを持って出て行く羽目になった。進路相談室前の廊下を歩き始めて

校門ギリギリのトイレの個室で誠は制服から私服に着替えを始めた。かさばる制服をチラシがたっぷり入ったカバンに無理矢理押し込んで個室から出て行き学校も後にした。

パンパンに膨らんだ異様な姿のカバンを横目を見る通行人は少なからず10人以上はいた。

でも、ソレを指摘する勇氣ある人物は誰もいなかった。

『本屋にでも寄るか』

誠が寄り道のルートを模索していると例によって“アイツ”が登場した。

もう分かると思うが一応説明しておこう。先日、誠の昼食の邪魔をして貴重な昼休みを削った、

「おーや？誠くんではありませんか！??」

「百合奈・・・」

「お！“百合奈”ってためらい無く呼んでくれた！ちと感動！」
「うっさい！」

突如、誠の背中から声を掛けてきた福井ことウザい同級生、百合奈。彼女は後ろから走って近づいてきて横に並んで話しかける。

「ほらっ、見てよッ、私服だぜエ。新鮮でしょ？」

「俺も、シフクデスガ？」

「あっ！本当だあ。新鮮だ・・・」

なぜか、新鮮だろうと言っていた百合奈が誠の私服を凝視してそれを珍しがった。

確かに、彼女の私服姿は初めてだったがそれをどう感じれば良いのかと彼は考えていた。

百合奈の自由な姿を見ていて誠は不思議に思って疑問を投げかける。

「お前、部活はどうした？」

すると、百合奈は二カーツと満面の笑みを浮かべて背の高い誠に向かって答えた。

「ああ、今日は休みなのだよ 鬼の飯島ちゃんが“骨休め”と言う事でね。

さっきまで部活仲間と楽しい楽しい“ティータイム”をエンジョイしていたのさ」

「で????今分かれたのか????」

「うん、そう。今は自由で1人でフリーだったのだがね！。偶然チミを発見してのう」

自分の額に掌を当てて後悔の念に打ちひしがれる。

あああ、どうしてこんなタイミングでこんな奴と出会ってしまったのだろうか。

もっと、学校に居座っておけばよかったのだろうか？

「私たちだけじゃないと思うよ。多分、陸部もサッカーも」

「・・・・・・」

「それで、誠君はどこに向かっているんだい？」

嗚呼、ここまで来たら“一蓮托生”引き返せない。

諦めるしかないよな……。

誠はもう完璧に諦めて百合奈に自分の考えている行き先を告げた。

「本屋のリベラ……」

「ははあ、リベラか。あそこは品揃え抜群だもんね。実は私もなのだよ」

「？何か買うのか？？」

「おう！純愛モノの漫画の最新刊だよ！爽子が最高！なーんてね」
「フーン……、興味ないや」

「ちよっ！待てやこらあ！爽子を馬鹿にすんなよお！」
「興味がないだけだって」

不毛な言い争いはまだまだ一方的に続く。

「そんじゃ！私のお勧めの漫画！」

「お前は、漫画しか脳内にカルチャーがないのか？？」

「何を言うかね！その漫画は“藤村君”が魅力的なんだよ！」
「ほう……」

「私だって、藤村君にちよつと恋とかしているんだから」
「ほう？薄っぺらな紙に印刷されたイケメンにか？？」

「乙女の夢は、壊すもんじゃないぞ！藤村君に謝りたまえ！」
「……」

誠は、少し黙り込み、立ち尽くして言葉を発した。

「じゃあ、その藤村君に伝えといてくれよ。どうせお前は“紙に印刷されたインク”だってさ」

「ナナナナナ！」

なめているのか！貴様！！

ああ、怖い怖い。

「大体だな、藤村君藤村君ってお前の頭には2Dしかないのか？」

「3Dよりは、2Dで起こっている事がときめいてしまうのだよ。誠君」

学校のいつもの通学路、いつも登下校に使っている道。いつも1人で歩いて歩いている・・・はずの道。

自分の真横には、実に鬱陶しい女子の同級生、福井百合奈。

彼女の行き過ぎた行動や言動に誠は頭を悩ませており、実際頭痛がしてくる。

しかし、誠は何で彼女が鬱陶しいか、何で気になるのか、薄々気付いている。

“嫉妬” その二字熟語が百合奈と今の自分の気持ちを結びつけている。

“社交的” その三文字熟語が“嫉妬”の原因。

ペチャペチャと、“藤村君”と言う架空の人物を熱く語る百合奈。

そのほとんどを聞き流して、彼女が話し終えたところで誠は話しかける。

「リアルで恋はしないのか？」

すると、百合奈は黙り込んで1分くらいの沈黙の時間が続く。

沈黙はあまり好きじゃない。だけど、うるさいのも好きじゃない。気まずい空気はもっと好きじゃない。

その“気まずい空気”を打ち消すように百合奈は閉じていた口を開いた。

「まあ、一度はした事あるけど・・・フラれてねえ・・・」

「・・・」今度は誠が黙り込む番になってしまった。

こんな話をされて掛ける言葉が見当たらないのだ。

例えばそれがウザい同級生でも一応は、恋多き悩み多き若い“女子”

なのだから傷付けたくはない。

もしここで、何か喋って下手でも打ったら男として、人間として廃る。

もう、3分くらいが経とうとしている。

一足早い、寒い木枯らしが木や道路の端に集められている赤や黄色の落ち葉を一気に吹き飛ばす。

自分より背の低い真横で歩いている百合奈の頬は寒さでちよつとだけ赤くなっていた。

吐く息は真つ白。マフラーや手袋だけでは寒そうだった。

誠は、たまらず自分の上着として羽織っていたコートの袖から腕を抜き始めて

それを百合奈の肩に優しくかける。

「ほらっ」

その短い言葉を百合奈に掛けると誠は百合奈を追い越して急ぎ足になる。

コートを渡された方の百合奈は何も言えないまま誠から借りたコートの袖に腕を通す。

何も言えないままと言うよりは、言うタイミングを失い、

礼を言おうとした頃には誠がいなかったと言う方が正しい。

「デカツ・・・」渡されたコートの袖口から彼女の腕が完全に通り抜けることは出来なかった。

肌寒くなった誠はクシヤミを何発も出した。

塚口駅の周りの町並みが見えてくると誠は目的のリベラに目を移す。リベラを見つけると、途端に誠は走り出した。早く店内に入りたくて走ったのだ。

自動ドアに認証してもらい自動ドアは両方に開いた。

誠は開いたドアの敷居を跨いで暖房の効いた店に入った。
「あつたかいな・・・」

デカイ誠のブカブカのコートを渡された百合奈は歩きながら物思いにふけていた。

「ほらッ」とコートを渡してくれた誠。一発で自分の事を“百合奈”とファーストネームで呼んだ誠。

楽しそうに自分の楽しみを否定した誠。

「誠君・・・、大分性格が丸くなってきたのかな？」

百合奈は通らない袖から無理矢理腕と掌を出して親指・人差し指を直角にしてあごに当てている。

ちよつと、意識的にポーズを決めているだけだが、考え事にはこれが良いだろうとポーズを決めている。

「むー・・・、でもなんでかなあ・・・？」

「ん??？」

誠が適当に本を探そうとしていると本棚の前で立っている少女が目に入った。

少女は、可愛いキャラクターのカバンを背負っており辺りをキョロキョロ見回している。

その少女に誠は見覚えがあった。少しばかりあどけなさが残っている顔立ちで、誠の同級生。

いつも、百合奈と行動をとみにしているおしとやかな性格の、
『沢？なにしてるんだ？キョロキョロなんかして』

沢 里佳子。

誠の同級生で優等生組の彼女だが今日の彼女の行動は挙動不審とい

っても過言でない。

すると、今度は天井を見渡す、誠は咄嗟に体を本棚の陰に隠して再び彼女の姿を確認する。

里佳子は、背負っているカバンを下ろすと閉じているボタンを外して目の前の本に手を伸ばした。

「・・・・・・・・」

里佳子は、その場から急ぎ足で掛けるとそのままリベラから出て行く。

『ありがとございました』と自動放送が流れる。

「あっ・・・・・・・・」

誠は、急いで里佳子の後を追いつめた。

発覚と自転車泥棒

沢 里佳子は陸上部で鍛えた足でカバンを背負いながら必死に走っていた。

人混みの多い所も走って何人もの人にぶつかりそうになる。

鍛えているはずの足も一気に疲労が溜まり息も切れ始める。

里佳子は、咄嗟に目に入った公衆トイレの女子トイレに駆け込む。

そして、中に駆け込んだ里佳子はカバンを降ろして自分のやった行為に後悔の念を覚える。

「また、やってしまったア・・・」

背中から下ろしたカバンの口の紐を解いて中身を確認する。

「って・・・、無くなる筈無いかア・・・」

里佳子の落胆はピークに達した。

「・・・・・・・・・・」

里佳子は黙り込み、大きくため息をついた。

自分はやらないと決めたはずなのにまたやってしまったと言う呆れも混ざっている。

里佳子は、カバンの紐をギュツと力強く締めて中身が見えないようにして背負う。

彼女は、公衆トイレの出口の端から顔をちよつとだけ出して駅までの位置を確認をはじめた。

端からちよつと顔を出しただけでは駅の位置が確認できない。里佳子は顔を完全に出して駅を探す。

「・・・・・・・・大体、800m位かな・・・」

距離を大まかな位置で確認するとフードを取り出してそれを深く被って駅に向かって歩き始める。

誰にもバレない様にフードがはだけない様に左手ですつとフードを握って押さえる。

時々、通っているクレープ屋とは逆方向の道をそつと忍び足で歩き

塚口駅を目指す。

『ごめんなさい、クレープ屋のおじさん……』

里佳子は泣き出しそうになりながら忍び足から急ぎ足になって逃げ様に公園を通り過ぎた。

「……………」

久瀬 誠は本屋であることを働いた里佳子の行動を偶然見つけて里佳子の後を追いかけていた。

しかし、里佳子が逃げ出した途端、誠は足を止めて彼女について考え始める。

『なんで、アイツがあんなことを……』

再び誠は、里佳子が走り去った道を歩き始める。

誠は、里佳子の姿を見てどうにも彼女の事を見捨てる事が出来なくなつたのだ。

福井 百合奈はダボダボのコートを着たまま本屋『リベラ』の店内に入っていた。

やはり、その大きなコートを着ている百合奈の姿は異様で通り過ぎる人、皆が一瞬百合奈を見る。

一方、百合奈の方は全然周りの目など気にしていなかった。

「おっ、あつたあつた」

百合奈は、お目当ての本を見つけるとその本を持ち上げて嬉しそうに笑顔を浮かべた。

「藤村君……」

里佳子は、塚口駅のトイレで再び出るタイミングを伺っていた。

「今日……何回トイレ入ってんだろ……か……」

つくづく里佳子は自分に呆れ果てていた。自分自分の事を罵倒し始める。

「里佳子のバカバカバカバカ・・・、この阿呆・・・」

小声でまるで呪文の様に言い、彼女はずっと自分を罵倒し続ける。そして、罵倒がひと段落ついた所でトイレから脱出してコインロッカーに向かう。

死角になっっている様な構造のコインロッカーは里佳子以外誰もいない。

里佳子はポケットからコインロッカーの鍵を取り出して鍵穴に突っ込みロックを解除した。

カバンを下ろすと先程締め付けたカバンの口の紐を解こうとする。だが、ギュツと締めたのが仇に出たのか、中々その紐は解け様としない。

必死になって紐を外そうとしていると後ろから聞き覚えのある若い男の声が掛けられた。

「えっ？」

「・・・・・・・・・・」

そこに立っていたのは、里佳子の同級生の誠だった。

コインロッカーの前で立っている誠の姿を見て里佳子は固まっている。

「く・・・・・・・・くくくく・・・・、久瀬君？」

「おう」

「ななななな何でこんな所に！??」

そう里佳子が質問すると、誠は里佳子に近づいて彼女が必死になっ

て解こうとしていた

カバンの紐を勢いよく解いて中身を取り出す。

「これ」

里佳子に“これ”と中から取り出したものを見せ付けて彼女は腰が抜けたようにへたり込む。

「・・・・・・・・・・」

彼女の表情は、いまにも泣き出しそうな顔つきだった。

“これ”を床に置くと次々とカバンから“これ”を取り出し始めた。

「いつからなんだ？」

「・・・・・・・・・・1年くらい・・・・・・・・・・」

「結構な常習犯だったんだな・・・」

その時、誠の後ろから小さな小さな震えた声が聞こえてきた。

「ゴメン・・・な・・・さい・・・」

「えっ？なんて？？？」

「ごめんなさい、ごめんなさいッ！ごめんなしいッ、ごめ・・・なさい・・・」

里佳子は、泣き崩れ始め誠はそれを黙ってみているだけだった。

「ごめんなさい・・・」。

塚口駅のロッカールームで泣きじゃくった里佳子の真っ赤に腫れた目を見た誠は言葉を失った。

クラスメートの沢 里佳子、いつもは物静かでクラスの女子からちよつとした憧れの的で優等生。

部活だって毎日頑張って走って、走って、走り続けている。

弱音など口に出さない彼女が、誠の目の前で大声で目を真っ赤かにして泣いた。

誠は、ようやく泣き止んだ里佳子の手を取り顔を赤くしながらコインロッカーから連れ出すことにした。

誠は無言で急ぎ足で里佳子の手を無理矢理引っ張り塚口駅を出て行った。

その行動に、里佳子は何も言わなかった。何も言えなかった。

「・・・・・・・・・・」

誠が里佳子を連れてきたのは先程里佳子が通り過ぎた公園だった。そこで誠はようやく里佳子の手を離して歩くのを止めた。それを見

た里佳子も足を止める。

「あつ、あつた」

誠は歩行用に整備された道の脇のベンチに里佳子を座らせるとどこかへ姿を消した。

誠に取り残された里佳子は緊張などしていなかった。むしろ開放されたよう表情だった。

だがその反面、“恐怖”と言う二字熟語に彼女の脳は侵食され始めていた。

「・・・」

その時、誠が小走りで帰ってきた。里佳子は一瞬ビクツとベンチから立ち上がる。

「どうしたんだよ？ 沢？」

「あつ・・・、うつん」

里佳子は恥ずかしかったのか、さっき泣いた目よりずっとずっと頬を赤くしてベンチに座る。

ベンチに座ると誠はその隣に座り込んで手に持っていた物を里佳子に渡した。

「ほらっ」

「えっ??」

誠が里佳子に渡したのは焼き立ての温かいクレープだった。周囲に甘い匂いが漂う。

里佳子はそれを受け取ると遠慮がちにクレープを見、誠の顔を窺った。

すると、誠はそれを察したように「食えよ」と言い放って、

自分用に買ってきた熱い缶コーヒーのフタを開けてちよつとずつ飲み始める。

里佳子も、誠がコーヒーを飲み始めた様子を見てクレープのほんの端っこをかじる。

「これ・・・、イチゴクリーム・・・」

「うん？ 嫌いなやつだったか？」

誠は缶コーヒーをベンチの上において不安げな顔を見ると、里佳子はクスツと笑ってクレープを再びかじる。そして、笑顔を浮かべて言う。

「大好きなやつだよ？」

それをきっかけに里佳子はクレープをがつつ勢いよく食べ始めた。その変わりぶりに誠は缶コーヒーをすするだけだった。

「熱ッ」缶コーヒーを少しだけ勢いよく飲んで誠は舌を軽く火傷した。

里佳子は、クレープを食べながら大笑いを始める。

「あははっ、なにそれッ。お腹痛〜い！」

「笑うなよ・・・たくっ。クレープ代倍にして請求するぞ？」

「ぶーははははッ。にやにしよれ・・・！！息が・・・息がア！！」

里佳子は息が出来ないくらいの大爆笑をし始めて、彼女の目には笑い涙すら窺える。

「・・・・・・・・」

誠は、他人のフリをしようとするがどうにもそれには無理がある。

そして、笑いながらもちゃっかりとクレープを完食する里佳子。

笑い声はしばらくの間、止まることはなかった。

里佳子と誠はベンチに座ったまま、夕方になったのを確認した。

夕方の赤い日の光と紫色っぽい元々の空の色。映画で聞いたことがある。

“マジックアワー”と言うらしい。晴れている日はいつも見ることが出来る空の表情だ。

その空の顔色を見ていると隣に座っている里佳子が誠に話しかける。

「今日は、楽しかったよ？久瀬君」

「・・・・・・・・」

誠は里佳子の方に顔を向ける。笑いが止まった里佳子の顔は最高の笑顔を浮かべていた。

そう言々と里佳子はベンチから立ち上がった。

「これから、警察に行く。みんな驚くだろうな……。私が“万引き常習犯”だなんて」

「・・・・・・・・」

「でも、久瀬君のお陰で救われたんだよ？決心させてくれてありがとう。久瀬君」

里佳子は、そう行つてその場から去ろうとした。すると誠は立ち上がつて大声で里佳子を呼んだ。

「待てよ！」

「ん??？」

里佳子は振り返ると誠はまた大声で聞こえるように言った。

「もうちよつとだけ付き合つてくれないか？沢・・・」

誠は里佳子連れまわす形で公園の端っこに足を運ぶ。

「久瀬君？」

そこは自転車が大量に駐輪されている場所だった。自転車にはそれぞれピンク色の紙がわっかになつて

貼られている。

誠はチェーンがついていない自転車を探り当ててそれを引っ張り出して里佳子に見せる。

その自転車にもピンク色の紙が付けられている。その紙は駐輪禁止の紙で近々撤去すると言う紙だった。

誠は、その引っ張り出した自転車をまたいで軽く乗り回す。里佳子は黙って見ている。

軽く自転車を乗り回したところで里佳子の元に戻つて一言。

「俺は、“自転車泥棒”」

すると、里佳子はプツとまた嘔き出して笑いながらも泣き始めた。

「今度は、何だ？沢」

「・・・・・・・・」

うれし泣き。かな？

共有する

「乗れよ」

「えっ???」

里佳子の目の前で盗んだ自転車に乗り回した誠は後ろにある荷台に乗る様に促がした。

里佳子本人は不本意ではあったがそつと荷台に乗る。

「失礼しまーす」と言いながら彼女は自転車の荷台に乗り体勢を変える。

里佳子はしっかりと目の前でサドルに座っている同級生の腹の前で左手、右手を握り締める。

里佳子の体が誠の背中と密着し、誠は少しだけ顔を赤くして自転車のペダルをこぎ出す。

自分の後ろに座っている里佳子の目に映ったのは誠の大きな背中だけだった。

自分より遥かに背の高い、

いつも教室ですれ違うだけだった誠が目の前で自転車盗んでその自転車の荷台に自分が乗っている。

塚口駅とは間反対の方向に向かう自転車。

誠は何も喋ろうとはしない。

彼が喋ろうとしないから里佳子も喋らない。

里佳子も沈黙は好きではない、だからと言って何を話せば良いのか分らない。

咄嗟に頭に浮かんだ事を目の前の同級生に聞こえるようにぶつける。

「ねえ！久瀬君」

「なんだよ」

「これ本当に良いの!？」

「そんなの置いている奴が悪いんだよ、俺たちはただそこにあつた物を“拾った”だけだよ!」

誠の運転する自転車は緩い坂道に突入し里佳子は後ろに引つ張られる。

その瞬間、里佳子は誠の体をギュツと強く掴んで怖いのか目を閉じてまぶたの裏の真つ暗な世界に入る。

誠は、さらに顔を赤くしたが里佳子にはそれが見えない。

「胸当たんだろーがッ!」

「・・・・・・」

誠の後ろの女子はまだ、まぶたの裏の真つ暗な世界に入つたままだつた。

里佳子の耳にガシャツと言う音が入ってきた。自転車のスタンドを立てる音だつた。

さっきまで掴んでいた誠の体の感触はもうなくなっていた。いつの間にか彼女の腕の隙間からすり抜けていたのだ。

どこかに止まつたのだろうか？

里佳子はそつと目を開けると一瞬だけ眩しそうに目を細めてそこがどこか分らないでいた。

瞳孔が細くなつて光に慣れてくると眼前に広がつたのは大きな芝生だつた。

「どこ?」

自転車が立っている芝生のと真ん中に人が寝転んでいる。

「あつ、久瀬君」

芝生のと真ん中に寝転んでいたのは他の誰でもない誠だつた。

彼の姿を確認すると自転車の荷台から降りて芝生に寝転ぶ誠に歩いて近づく。

そして、しゃがんで誠の頬にツンツン指を突く。

「おい??久瀬くん??」

「.....」

誠は寝返りを打って里佳子とは逆の方向に顔を向ける。

すると、彼女も負けじと反対方向に向いた誠の顔にツンツン指をさつきより強く突き始めた。

「.....」

中々起きない誠に頭を悩ました里佳子は誠の横に寝転んで誠の顔を凝視する。

「ジーーーーッ」ご丁寧な擬音を口に発しながら。

「うるさいな.....」

誠がやっと口を開いた。里佳子はそれを聞いてほっとする。

「喋った、喋った」

誠は、目を開けて真横に寝転んでいる里佳子のきれいな顔を凝視する。凝視を終えると空を見上げる。

「眠たいな.....」

「帰りもこいで貰わないと私が困るんだぞ?」

「自転車くらい自分でこげよ」

「だって、道分らないもん」

「それなら俺だって、適当に選んだ道走ったらここに着いたんだ。道なんて分かるかよ」

「そこは何とかしてよ。久瀬君」

里佳子と誠の会話はどこぞのカップルの会話となんら変わりなかった。

「俺たち、“共犯”だな」

「えっ???」

「そうじゃなかったら俺は“犯人隠避”沢は“窃盗”。互いの秘密を知ることになったて事だよ」

「“秘密の共有”かア、なんか楽しいかな。ちよつとスッキリしたよ。“誠”」

里佳子が急に今まで苗字で“久瀬君”と呼んでいた相手を“誠”と

下の名前で呼んだ。

驚きを隠せない誠の表情に里佳子は顔を赤くして誠に顔を近づける。

「私の名前は“里佳子”だよ、誠」

共有する（後書き）

さあ、前半戦が終了しましたぜ！

ついに動いたとといいますか、題名に「〜と」がなくなりましたね。アハ

さあ、次どうしようかな・・・。

それぞれのジレンマ

誠は、ベッドに横になり、今日藤枝から貰った大学の資料を自室の机の上にぶちまけていた。散らかった資料たちは封筒の封だけが空いており肝心の中身は手付かずであつた。

私の名前は里佳子だよ。

誠は考え事をしていて眠ることが出来なかつた。里佳子のあの軟らかい表情や言動。

そして、意外で大胆な行動。

「呼べる訳・・・無いだろうが・・・」

枕に顔を埋めて布団を被つて暗い羽根布団の中は自分の体温で生暖かかつた。

次第に、蒸し暑さと呼吸困難に耐えられなくなって顔を枕から突き出して新鮮な空気を吸う。

それ位、誠の脳みそは混乱していた。

高校に進学してきてから、クラス分けをした時から、教室で出会つた時から、

ちよつと意識していた同級生の女子の沢　里佳子。

おしとやかで、騒音メーカーで鬱陶しい百合奈の友人。

百合奈の存在もあつたが全く声など掛ける勇氣なんか誠にはなかつた。

“奥手”と言う言葉がピッタリだ。口げんかが得意な誠はこう言う分野において全くダメな人間だ。

1年生のときから、教室でちよつと肩がぶつかるとそれだけで高揚感に見舞われたりする事もあつた。

でも、これでは“奥手”よりさらに酷い“ヘタレ野郎”と言う者に

なる。

1年生の半ば里佳子の肩が誠の二の腕とぶつかったことがあった。

「あつ、久瀬君」

「・・・・・・」

自分より背の高い誠を見上げて誠の苗字に君をつけて彼女は謝った。

「ゴメン・・・・ね？」

「・・・・、別に良いよ」

『なにやってんだ、俺は・・・・』

再び布団にうずくまって、自分の甲斐性の無さにただ呆れる。

誠の恥ずかしさとその念に襲われて誠の顔は真っ赤かになっていた。誠自身はそれに気付かない。

「誠ー」

ノックもせず誠の城に妹の遊里が侵入してきた。誠はそつと遊里に顔を向ける。

無断でドアを開けた遊里はミノムシみたいな格好の兄の姿を見ては「つとため息をついて首を横に振る。

「兄ながら見事にだらしがないア」

「うるさいなア・・・・」

「電気も点けてない、いやっ機の電気は点いてるか」

青白くて冷たい光を発している機の蛍光灯だけが誠の部屋を灯していた。

ドア脇の電気のスイッチを付けて年頃の妹はズカズカと兄の部屋に入り機の蛍光灯を消した。

そして、誠の被っている重たい布団を取り払って誠を起こそうとする。

「今日は、可愛い可愛い遊里ちゃんが作った晩御飯だぞー？」

「んゝ、いいって、起きるから」

「今日は、遊里ちゃん自慢の肉じゃがだぞー？家庭的な料理だぞー」

「??」

「あつーもう、うるさい!」

自分の部屋から引きずり出されるような形で晩御飯を食べることになった。

一方、受験生の妹はどこかご機嫌な様子で嬉しそうに食器棚から皿を取り出して

肉じゃがやお茶碗にご飯、お椀に味噌汁を盛り付けはじめる。

「偉く、嬉しそうだな?遊里」

「うーん?だって今日はさあお父さんもお母さんも遅いから兄妹水入らずだからねえ」

「はあ???」

「もう」

誠の薄いリアクションを見て遊里はまた兄に呆れる声を上げて食卓に皿を載せると誠に近づく。

「誠は女の子の気持ちを勉強した方が良いぞあ?」

「受験生なのに、のほほんと勉強しているお前だけにや言われたくない」

「ふんツ、心は誠より十分成長していると言っ自身がありますからー」

「年は十分負けてるけどな」

「もー!」

「ふーん・・・、クラスの女子の気持ちを知りたいとな?誠」

「おう・・・、こう言っの俺苦手で」

遊里の作った肉じゃがに箸を付けながら誠は社交的な妹・遊里に今日の出来事をあらまし説明した。

もちろん、里佳子が万引きの常習犯と言っ話は伏せて話した。

自分の目の前で相談にのっている遊里は端をくるくるペン回しの要領でまぶたを閉じて考え事を始める。

そして、パチツと目を大きく開けて誠の目をギョツと見る。誠は少しその大きな目で驚く。

まるで、ロボットの様な遊里の姿を見て誠は黙り込んでしまった。

わざと黙ったわけではない。

言葉が出ないだけ。

「誠さん、それはさあ乙女心という奴ですね」

「乙女・・・心??」

誠の思考回路では全く考えたことのない言葉を聞いて首をひねる。すると、遊里はまたため息。

「この、鈍チン兄貴」

「・・・ンッ」

鼻をつんと遊里の指で押さえられて誠の思考回路は余計に狂った。誠が実の妹の遊里にはにかんでいると遊里は自分の皿を片付け始めて流しに方向転換した。

「勉強し直しだね。さあて洗い物、洗い物つと」

「おいっ、待てよ!」

「誠、食器片付けてっ」

誠は、里佳子に一瞬だけ顔を向けるたびに視線を逸らしたり用もないのに須藤に話しかけて自分の平静を保とうとしたがむしろそういう行動がクラスの連中の噂的になったりする。

もしかしてだけど、久瀬君って里佳子の事好きなのかな?

でも、確かにそういう素振り最近見せてるよね。

今見てみれば、久瀬君って結構かっこいいと思わない?

「でさあ、どうなの？里佳子？？」

「久瀬君の事どう思っているの！？」

「えっ、香奈？絵梨？？」

里佳子の席を取り囲むような形で里佳子の友人の香奈と絵梨が誠をどう思っているか質問攻めにした。

興味津々で犬みたいな耳と尻尾を突き立てている友人の変わり果てた姿に里佳子の顔は固い。

「ほらほら、さつさと吐きなよ」

里佳子はこの時思った。

『いくら友達でもこの時だけは異常に鬱陶しい』と。

里佳子の目から見ると香奈と絵梨の尻尾はフリフリと振っている様に見える。

「エッと・・・、とりあえず問題定義からしていいかな？」

「もちろんいいよ、どうせ言ってくれるし」

香奈、絵梨の目の前で里佳子は牛乳パック付属のストローの先端をブツ刺して、

チューツと中身の牛乳を飲み始める。

半透明のストローは牛乳の色で白くなり里佳子は牛乳を飲み干すとプハッとため息をついて一言。

「でっ、何の話だっけ？」

「話を逸らすな！！！」

「里佳子、こういうのは得意なんだから！！！」

「こういうのってどういうのかな？？」

須藤と誠は屋上の端っこで肩を並べて食堂の購買のパンを食べていた。

数学の勉強を教えて以来須藤との関係はかなり良好になっていた。

だから、須藤には素直に物事を相談できる。

「なあ、須藤」

「どうしたよ？久瀬君」

「“恋”ってどういう気分なんだ??」

「ブツーーーーー、なななな!??」

牛乳を嘔きこぼした須藤は咳き込んでしばらく言葉を話すことは無かった。

「うわっ、汚えー」

「誰のせいだ!誰の!」

俺は肉は好きだが、草食動物だ

俺は、恋なんて別にどうとも思っていないからさ、相談相手間違えていると思うけど。

前沢は、違うのか???

まっ、前沢はあくまで牛乳の飲み仲間で!!

恋仲じゃないのか??

違うって!!!

放課後になった。夕日の光差し込む教室で日番の里佳子が黒板消しで黒板を消していた。

誠は、STが終わった後も教室の後片付けをしている里佳子の姿を見ていた。

「・・・・・・・・」

2人は黙ったままだ時間だけが過ぎ去っていく。

この日の里佳子の休み時間モとい、気軽に話せる体育の休憩時間は質問攻めで味方は全くないかった。

一方、誠の方はこれはこれ、不良と勘違いされているので噂はされているが

あまりの怖さに誰も声を掛ける勇氣ある人間はいなかった。

「ねえ。ちよつと・・・」

里佳子が黒板を消しながら体を捻って誠の顔を見て苦しそうな表情を見せた。

本当の理由は分からなかったが誠の予想は体を捻って体勢的に苦しんでいるのだと感ずる。

その苦しいに体制に耐えかねたのか体を元の体勢に戻して黒板消しを置いて誠の近づく。

「座っているんなら、せめて手伝ってよねえ」

「・・・・・・、なあ」

「ん??？」

「“里佳子”俺とお前がさどんな噂されているのか知ってるんか？」
確信を突く質問で里佳子を問いただす。目の前で自分に話しかけてきた里佳子はちよつと後ずさり

黒板に顔を向けて誠とは目を合わせない。

誠は苛つきを覚えて里佳子はさつき置いた黒板消しを手にとってキレイすぎる黒板をまた拭き出した。

チョークの粉が夕日に反射して黒い影が誠の目に入る。

「おいっ！」

返事のない里佳子の後姿に怒りを爆発させて誠は彼女の急ぎ足で近づいて黒板消しを持っている

手首を掴んで彼女の目を見つめる。

「あっ・・・・」

掴んでいた手首を離して誠の顔は赤くなる。里佳子の方も顔が赤くなって気まずい沈黙が始まった。

一体、この2人の間に気まずい沈黙は何回あっただろうか。

「知ってるよ・・・・」

「??????」

「そりゃさ、噂くらいすぐ耳に入るよ」

「なら、」

「無駄だよ」

誠が『ならさ、なんで否定しないんだよ』と言いかけると里佳子はその言葉を途切れさせて邪魔をした。

何が、無駄なのか誠には理解できなかった。里佳子は続ける。

「噂なんて一種の病気だよ。感染する。止める事なんて出来ないよ」「カッー。なんで、そんな否定的なのかな！」

誠が久しぶりに頭をかきむしり髪の毛が何本か指の間に引っ掛かって抜け落ちた。

「その癖さ、なんとかしたら？」

「はあ???」

「頭かく癖。イライラする時、誠絶対それやるもん。百合奈のときも」

「なんで、今アイツの話なんだよ?」

「誠、本当は百合奈の事あながち嫌ってなんでしょ??」

「なっ、何の話だよ?」

「誠、優しいもん。大体分かるよ。このクラスの皆誰も嫌ってないって」

「うるさいッ。もう帰る」

そう言い残して誠は里佳子を1人にして教室を出て行った。

長い長い廊下の端にある階段を降りようと誠が歩いていると後ろの方から足音が聞こえてくる。

駆け足の足音でまるで自分を追いかけているようであった。

足音の方にそっと目線を向けると誠のいやな予感は的中した。

「いつ!」

と、奇妙な声を上げると彼は階段を一気に下り始めて間違えればこけそうな速さで階段を下る。

階段を下っても下っても足音はどんどん近づいてきている・・・、気がした。

誠の心理状態は現在、子連れのチーターの母親に追いかけている群れから取り残されたシマウマの心理状態と同じと言っても過言じゃない。

前世は「シマウマ」じゃないか?と言うどうでもいい事も頭を横切り彼は走る。

一方その弱弱いシマウマを追い掛け回している捕食動物のチーターは全く脚力は落ちなかった。

さすがにトラックで鍛えているだけの事はある。

だが、チーターだって長距離を走れる訳じゃないことくらい一般常

識、

あるいはどこかの猫好きか動物オタクの中で走られている事実である。

だから、当然のごとくもうすぐチーターの足は失速してゆき、

「ハア……！」

バテて止まってしまう。

残念ながらチーターはシマウマを捕食することが出来ず階段の踊り場で、

息切れと足の筋肉の疲労で止まった。

「ああ、もう……」

里佳子の頬は赤と言うよりはピンク色に近いと言った方がいい。汗をかいて蒸せていたのだ。

誠の姿はもう見えない。階段の間からギリギリまで身を乗り出しても見えなかった。

里佳子はまた疲労の溜まった足でまた階段を降り始めてトムソンヤードをまた追いかける。

シマウマは、捕食動物のチーターに追い掛け回されて息切れはピークに達していた。

捕食動物の気持ちがよく分かった瞬間だった。

誠は野菜と肉だったらどちらかと言えば肉の方が好き、

むしろ大好きだったがこの時だけは野菜が食べたい気分になで陥っていた。

『帰ったら……、 “野菜100%” を10本飲み干してやる……』

□

そうシマウマは心に誓って校門を出て行こうとしたらまた肉食動物が現れた。

「誠！」

「……………」

肉食のチーターに自分のファーストネームを呼ばれシマウマの口は尖がった。

口を尖がらせている彼を見て一瞬だけ肉食動物は後ずさったがそれはそれ“一瞬”なので

最後の力を振り絞って里佳子は誠に近づいて誠の顔を見上げる。

「へっへっ」

「……………」

いつも1人だけで歩いている筈の長い通学路。横には誰もいない筈、
なのだが、

「お前は、ストーカーか??」

「何を言うのかね!」

なぜか隣には異常なテンションの里佳子がいる。いつもならおしとやかで物静かだった里佳子が

今現在では異様にテンションが上がり生き生きした笑顔で自分に話し掛けている。

「まあ、さ……………」

「ムッ」

「……………“里佳子”……………」

「ん?何かな???」

女と言うのは実に不思議な生き物だとさつきまで捕食される側だった誠は微妙な疑問が浮かぶ。

誠の妹の遊里にせよ、同級生の百合奈にせよ、今日の前にしている里佳子にせよ

何故まともに自分の話を取り合ってくれないのだろうか?男で恋愛経験ゼロの誠には理解できなかった。

「なんで、そんなにキャラが違うんだ?」

「む???きゃら???」

「俺のイメージでは、お前は物静かでおしとやかで優等生で」

「・・・・・・」

一体、百合奈や里佳子と出会ってから沈黙は何回経験しただろうか。もう沈黙なんてうんざりだが、沈黙を破る言葉など見つかるわけも無い。

「みんな、私の事分かってないんだよ。百合奈も須藤君も他の女友達もクラスの間みんなも」

「みんな？」

「でも誠は違うよ？本当の私を知っている。秘密を知っている。違う？？」

「いや。もちろん知っている」

「でも、誠は私の事知っていても、私は誠の事知らないけどこれだけは知っているよ、誠」

「??????」

「誠は優しい人。とっても優しい人。それ以外にも多分・・・」

「多分????」

「もっと、教えてよ。誠の事さ。私の事もっと教えるから」

「なんで????」

「だって、私たち秘密を共有しているんだから」

「むっーーーー」

福井百合奈は考え事をしていた。恋愛の話ではない、家族の問題でもない、同級生の誠の事だった。

百合奈の視線から彼を見るとこのところの誠は非常に社交的になっているような気がしていたからだ。

彼女の目標は“誠を社交的にする事”なのだがもしそれが達成したら一体これからどうすればいいのか

と言うことを考えていた。別に恋愛感情があるからそういうのを考

えているのではない。

“寂しい”と言うことがぴったりだ。

今の今まで話しかけていた同級生と突然話さない仲になったらと考えると、

彼女はどうにもこうにもやるせない思いを心に抱えてしまう。

小学生のときは仲が良かったが中学生、高校生と進級していくつれに段々話さなくなる事くらい

誰にも経験があると思う。今の状況とは微妙に違うとは思うが百合奈の脳内ではそれがうごめいていた。

要するに百合奈の心情は、“誠ともっと仲良くしたい”と言うちょっとした我がままだった。

考え事に踏ん切りをつけると百合奈はケータイを手にとってデータに残されている写真を見つめる。

そこに写っているのは百合奈本人とそれからもう一人百合奈と同一年で背が遥かに高い男子。

「なんで、これ消さないんだろー・・・」

考え事に踏ん切りはついてても、過去の過ちや未練に踏ん切りがつけられない事は誰にだってある事。

事実、今百合奈が見つめている写真も“未練”の塊である。

写真をずっと見つめていると百合奈のケータイに電話のバイブと音が鳴る。音楽ですぐに分かった。

電話の主は百合奈の親友の里佳子だった。

里佳子からの電話にすぐに百合奈は出て里佳子と会話を始める。

「もしもし？どうしたんだい、里佳子」

「すっー・・・」

「里佳子？何？今息を整えるような音が聞こえたけど」

『実は、百合奈。相談にのって欲しいんだけど』
「えっ？いいけど？？」

「誠？どうしたの？ま・こ・と！」

誠の妹の遊里はリビングのソファで兄のげっそりとした表情に何かを感じ取り事情を聞きだそうとしたが

兄・誠は何も話そうとはしなかった。遊里の足元には野菜ジュースがゴロゴロ転がっている。

「俺・・・、なにやってんだか・・・」

「誠??？」

「ハア・・・」

「だから、何があつたの!？」

「ふーん、そんな事があつたのか」

『うん、“誠”の秘密教えてって言ったら誠“個人情報なんて教えてられるか!”って怒鳴って』

ズカズカ行っちゃったんだよ』

「誠君、なにやってんだか・・・。てかもうファーストネームで呼び合う仲になつたんだ。」

里佳子も中々やるじゃん」

『そつ、そんなんじゃないよオ』

「でもまあ、ソリヤただの照れ隠しだと思うよ。誠君の性格上それ程鬼畜じゃないし」

『鬼畜つて・・・』

「表現だつて、表・現。誠君の事さ里佳子は一応は知ってるんでしょ？」

『・・・、うん“一応”』

「プッ!!!」

『笑うなあああ』

翌日。誠は誰にも相談できないまま学校に向かっていた。いつもと同じ通学路。

隣に誰かいる訳でもなく愛しているはずの“孤独”を味わっている。だが、なぜかこの所“孤独”と言うものに彼は最近違和感を感じ始めていた。

1人が空虚なことだと言うことに気付き始めているのだがそれを感じたくない。

いままで、やってのけていた筈の1人がとてつもなく寂しくなってきた。

いつもと何かが違っていた。

里佳子がキレた、そうあのピンクのウサギのように。そうそのウサギには傷が

学校の教室に着くとそこにはすでに何人か教室にいた。

彼は黙り込んだ。なぜなら彼の生活リズムがちよつとずつ乱れ始めていたからだ。

今までは、クラスで一番乗りで教室に入室していたのにここ最近が一番乗りの座を奪われていた。

「おはよ」

「里佳子、おつはよ！」

里佳子と出会ってからと言うもの、それ以前以上に彼女のことが気になり始めていた。

彼女の事は以前から多少の意識はしていたがそれを表ざたにすることもなかった訳だが、

これまた周囲の変化と言うやつであちこちで噂が絶えなかった。

まあ、さすがにそれを誠の前で取り沙汰する勇氣ある人物が現れることはなかったが・・・。

そのはけ口は全てが里佳子に向けられたが、彼女は彼女なりに大人な対応をしてやってのけた。

話を逸らすや元から相手の話を聞こうとしない完全無視など方法は多種多様だったが、

とにかく相手の話は基本スルーを敢行した。

しかし、相手も引き下がるわけがなく75日以上経ってもしつこくしつこく聞いてくる。

里佳子が折れるのを手ぐすね引いて待っているのだ。

鉄壁の口の堅さがもろくも崩れ去るその日を待ち続ける。“根競べ”と言うことがピッタリ。

誠の方にそれが及ばないのはまだクラスメイトから“不良”と言う
レッテルが剥がれていないからだ。

須藤と前沢を除いて。

「久瀬君、なんでそう社交的になれんのかね」

「うるせえ、つてか勝手に俺の席溜まり場にするなよッ。須藤と前
沢！」

「だってさ数学教えてくれたんだから自然と喋りたくなるが人間の
性でしょうが。ねえ康博ちゃん」

「おうよっ」

何でこんな事になったのだろうか？誠の席はなぜかクラスの仲良し
牛乳コンビ須藤・前沢ペアの

休み時間の溜まり場と化してしまったのである。もちろん2人の片
手には牛乳パックがある。

「お前ら！！！」

「んっ！このミートボール美味しい さっすが私」

前沢のキャラクターの強さをこの時彼は初めて思い知らされる。

これは・・・、

百合奈以上のキャラクターの強さと鬱陶しさ。須藤はこの女子に何
故惚れているのだろうか？

全く意味がわからない。人の好みを考慮しても、どうしても理解で
きなかった。

須藤自身は否定しているが100%奴は前沢 詩と言う女子に惚れ
ている。

「久瀬君は、里佳子に惚れてんですかあ？」

「前沢、何聞いてんだよ？」

「康博ちゃんも気になってんでしょ？」

「・・・、まず質問が理解できないんだがよ」

「そりゃさ、みんなが噂してますし、里佳子が毎日質問攻めだよ」

と、前沢は里佳子の座っている方向に指をさして誠もその方向に目を向けると前沢の指摘どおり

里佳子が質問攻めにされていた。

「ほらっ、言ったとーりでしょ？」

「で????？」

「里佳子が可哀相だなアって思ったことないの？」

「そりゃ、ちよつとはあるかもしれんが・・・」

「そんならさあ、いつそ“白馬の王子様”になったらどう？里佳子の」

なぜだろう？

誠の目に映る前沢の背中には悪魔みたいな羽が生え頭からは犬みたいな耳が生えている様に見える。

要するに彼の目には前沢が何ともアンバランスな人物に見えているのだ。

「私が“キューピット”になろうか？久瀬君」

すると、須藤が話しに割り込んで一言。

「お前だと、ただの“小悪魔”だよっ」

「あっ確かに“小悪魔”もいいかもなあ。そんな格好してみたいかも」

「前沢・・・、お前そんな趣味あったのか??」

「「おい、久瀬くん」」

「？」

誠の苗字に君をつけて呼んだのは里佳子の取り巻きの女子・時田陽菜と志賀唯の2人である。

陽菜と唯の目の前には里佳子の姿がある。なんだか頭を垂れている。なんだろう？

立ち上がるとポケットに手をつ突っ込んで呼び出された机に素直に向かう。

「何の用だよ？」

不機嫌そうな目を見せると一瞬呼び出した側の女子2人は一瞬だけ

怯んだが片方（唯）は里佳子の目を見

もう片方の女子（陽菜）が今まで全く話した事の無い相手（誠）に
問い詰める。

「久瀬君はさ、里佳子の事好きなの？」

「ハアアアア！？まずどんな話がそこまで派生したんだよ！？」

「これは、久瀬君が詩と楽しそうに喋っていた時だったから5・6
分くらい前かな？」

里佳子は久瀬君の事好きなんでしょ？はっきりにいなよ。

別に？私と“誠”は別にそんな関係じゃ・・・、あつ。

“誠”????

「と、ボロを出したのさ」

途端に里佳子の頬が真っ赤かに染まる。別に寒さから来ている赤さ
ではない。恥から来ているのだ。

誠も誠の方で顔を赤くし里香子の方を睨み付ける。怒りからではな
い。救いを求めているのだ。

この状況からどうやって脱出しようと誠・里佳子で思案しあってい
る。アイコンタクトだけで。

だが、そんな事で救いの道が見出せるなら苦労はしない。当然のご
とく答えが出る筈もなく、

ただ呆然と立ち尽くすだけだ。言葉すら浮かんでこない

“茫然自失”と言う四字熟語があるが正にこの事を指す。

「俺は・・・」

「俺はア??」

余計に彼の顔は赤くなり始め頭のでっぺんから蒸気の塊が纏まって
出そうな・・・。

「もつといい加減にしてよ！」

里佳子が突然キレた。パンツと掌で机を叩いて予想だにしない彼女の行動に陽菜・唯ペアだけでなく誠自身も怖気づいた。いつもなら・・・いやっ。怒ることのなかった彼女が怒っている。

教室中の視線が里佳子に向けられた。

前沢・須藤ペアは牛乳パックの牛乳を飲みながらこちらを見ていた。どうやら、あの2人は牛乳だけは手放せないようだ。

「こんなの、虐めと同じだよ！分かってる！？」

「おいっ、里佳・・・」

「あぁん？何か用かな？“久瀬君”」

「いつ、いや。何でも・・・」

“里佳子”と呼ばうとしたら里佳子のキラキラ光る眼差しに圧倒されて誠は再び怖気づく。

こんな里佳子（普段はおしとやかな筈）見た事がない。

「ただいまー」

「いつ！！」

誠がいかにビックリした様な目で教室に対して“ただいま”と言った人物を凝視する。

タイミングがあまりに悪すぎる。百合奈が生徒会から帰ってきたのだ。

「ありゃ？里佳・・・子??」

「どうも、百合奈・・・」

「どうも、里佳子・・・さん」

里佳子の親友の百合奈でさえも“ブラック里佳子”に圧倒されていた。

片手を挙げたまま笑った口元が全く動かなくなっていた。

「里佳子さん、今とってもブラックな気分だよ・・・」

「ああ、そうなんだ・・・、ブラ里佳さん久しぶり・・・かな??」

「うん、小学4年以来・・・」

「あっはははは、そっぴやあの時の男子たちは完璧チキンだったよ

ね・・・」

「まあ、あの時はチキンだったけど、今回は“たたき”にしてやるうかなつと」

「いやっ、たたきって」

ギロツと里佳子の目が陽菜と唯を見つめて怨念に満ち満ちた台詞を吐く。

「今日は、勘弁するけど次は本気で“たたき”か“ミンチ”にするから。OK？」

「うんうんうん！！しないからア！」

すると、ブラックオーラを放つ彼女は教室の扉をバタンツと大きな音を立てながら開けて

ドンツと大きな音を立ててドアを閉めた。

あまりにショッキンキングな光景を目の当たりにして誠や百合奈を含めて教室にいた全員が黙り込んでいた。

いやっ、黙り込んでいたわけじゃない。言葉が出なかったただけだった。

ああん？何か用かな？“久瀬君”

アイツがあんな行動を取ったのはきつと俺の為だと誠は感じた。

そして、彼女自身のためでもあると。

「誠君、ちよつといい??」

「百合奈？」

鈍感男

昼休みが後7分ほどで終わるくらい。普通ならこの貴重な7分を大切にしたい所だが

その貴重な7分を黙って過ごそうとしてクラスが1つだけあった。そのクラスは2分か3分前に起こった事件の衝撃度があまりも大きすぎて喋れないからだった。

事件の犯人、沢 里佳子はどこかに消えてしまいもう一人の事件の元凶である久瀬 誠は

実にうるさくて鬱陶しい同級生、福井百合奈に連れられて階段を上っていた。

連れられて来たのは時たま須藤と昼飯を楽しんでいた屋上だった。

コンクリートの殺風景な野原が誠の目の前に広がった。コンクリートの目地の他には柵しか見えない。

誠の前を歩く百合奈のショートヘアは風に吹かれてシャンプーの甘い香りが彼の花を突く。

「いやっ、ビツクリしたな」

百合奈に突然話しかけ誠は答えを見出せられないでいた。（先程の事件もあつたが）

彼女は話を続ける。勝手に彼女の話が一人歩きしない様に見守る事にする。

「里佳子のガチギレは」

「ハア？」

屋上に来て（半ば強引に連れて来られて）誠の第一声は疑問符込みの計3文字。

しかも、何ともやる気のない言葉。ちよつと百合奈は肩を落とした。もうちよつとロマンある言葉を期待したのか、一瞬だけ百合奈の言葉は止まったが、

これでは昼休みがもつたにないと思ったせいかまた話が再開する。

「まさか、あそこまでキレるなんて百合奈さんは全く予想できなかったよ」

「でその百合奈さんはこの俺、久瀬 誠君に何か様でもあるのか？」

「別に、ただ話がしたかっただけさ、同級生君」

「ハア？」

百合奈の肩がさつき以上にガクツと落ちた。実に内容のない疑問符込み3文字。

相手が女の子だと言うこと百合奈さんの同級生、久瀬 誠君は一体どれだけ理解しているのだろうか？

鈍いと言えば鈍い。目つきとか顔つきとかのレベルの話じゃない、性質の問題でのレベルの鈍さ。

百合奈は額に掌をあてて頭の上からチリチリの渦巻きを上げる。悩み事ではなく考え事。

何故に男と言う生物（特に恋愛漫画の主人公とか）はここまで鈍いのだろう、と。

百合奈は気を取り直して自分の話したい相手、つまり誠に目を向ける。

「とりあえず、話をさせてもらおうよ！誠君」

「おつ、おう・・・」

「単刀直入に言いますと“里佳子を泣かせないで欲しい”と言うことさ」

「ハア？」

今日、このコンクリート製の屋上の上で3回は言われた“ハア？”。百合奈の頭がちよっと憂鬱になりかける。

「里佳子の心は繊細で緻密なお人形さんみたいでその精細な物を一つ傷つける様な事があったら

あの子は今日みたいにブチギレて誰も信用できなくなる、そんな子なんだよ？分かるかい？」

「いやっ、それでも一応わきまえているつもりではあるが・・・、繊細には見えなかったぞ。あのキレ方」

（里佳子が万引き常習犯だと言うことも含めて）

「繊細を一步越えたらああなるのが里佳子と言う生物なんだよ」

その途端に昼休みの終わりを告げる最初の予鈴が鳴る。

「あつ、あれ??」

「誠君、遅刻だぞ?」

「てめえ!!! 待てコラ!!!」

百合奈はいつの間にやら階段を急ぎ足で駆け下り始めていた。説教じみた百合奈の話。

そして、唯一（多分）知っている里佳子の秘密。

「“繊細”ねエ・・・」

あの日、あの本屋で目撃してしまった大胆すぎる里佳子の手馴れた万引きテクニク。

アレで繊細と言うのもどうかと思うが親友の百合奈が言うから確かと言えば確かなの・・・、だろうか？

誠が教室にたどり着くとすでに百合奈は自分の席に着席していた。さつきキレた里佳子も。

里佳子の眉間にさすがにシワまではよっていないものの危険なオラを教室中を包んでいた。

里佳子の前後左右の席の生徒の体はガクガクブルブルを通り越して冷え切っていた。

緊張しすぎて体が冷えてしまったのだ。遅れて教室に入ってきた誠は頬に汗を垂らして呆れ顔を決める。

教室はまだ沈黙を破ろうとはしなかった。間違えれば里佳子の血管の切れる音が聞こえそうな位静かに。

「授ぎよ」

授業を始めようと教室に入ってきた教師もその恐ろしい静けさに圧倒され“授業始めるぞ”と言いかけた言葉を一ついつい詰まらせてしまう。

「じつ、号令」

起立！気をつけ！礼！

誠の口は半開きのままで授業はそのまま進んでいった。

珍しいことに、この授業の時の誠のノートは真つ白だった。里佳子もペンを動かそうとはしなかった。

もう分かっているとは思うが六時間目もこんな感じで進んでいった。

里佳子の帰りを誠は運動場のトラックのよく見える2階で待ち伏せていた。彼女の走る姿は美しかった、

さらさら流れる黒くて長い髪の毛。長い腕と足。西日に照らされる端正な顔立ち。

さすが、自分を追い掛け回したチーターなだけはある。

走り終わると寒いのに、関わらず彼女は自分の水筒に手を伸ばして美味しそうに中身の水を飲む。

もう一体、ここで彼女を待ち続けているだろう。少なからず生徒が学校に残るような時間ではなかった。

「ありがとうございました」

テスト前だからか、陸上部は予想の何番も早く終わるのを誠は確認した。そして、行動開始。

立ち上がり生徒がいつも出入りして校門へ向かう。

「あつ」

部活が終わり家へと帰ろうと里佳子はカバン片手に校門を出ようとした。

あつ、と声を上げたのはその校門に予想だにしない人物が立っていた。

たからだった。同級生・久瀬 誠。

白い息を口から吐き出して寒そうにマフラーを弄っている。

「あっ」

こちらの“あっ”は誠の方。里佳子の存在に気がついて声を出したのだ。

彼女は黙り込み誠がそつと近づく。

「ちょっと、いいか？」

半分こ

陸上部の練習を終えて里佳子は校門を出ようとしたら同級生の男子に捕まり今は2人並んで歩いている。

寒くて乾いた冬の空気の風が吹き、里佳子は白い息を吐き出し寒そうにする。

その姿を見た同級生の男子は自分の首に巻いているマフラーを外して手に取って里佳子に差し出す。

「いらない」と彼女は断った（百合奈とやったマフラー半分こ絞殺未遂事件がトラウマなので）

男子にとっては断られた理由が分からずにそれを再び自分の首に巻き始める。

何も言わない男子にイラつきを少しだけ覚えて里佳子は昼休みほどではないが大分刺々しい声で

同級生の男子の真意を問いただそうとする。

「何か用？用があるなら言いなよ、久瀬君」

そう、その同級生とはある意味で昼休みブチギレの乱の元凶である久瀬 誠であった。

「いやっ、その呼び方が気に入らないからよ」

「あーっ、気にしないでいいですよ？」と急に敬語になり左手は左右に振れる。

ところが、気にしなくていいと言われて気にしない人間はそうはいない。誠だってその1人だ。

「気にするよ」

「ええ？それはドウシテカナ？」

里佳子の顔が大きく歪んでどこか皮肉がこもった笑顔と声が漏れる。一瞬だけ横を並ぶ彼はその変化の大きさに目を細めたがそれは事実。これも優等生里佳子と同じ里佳子。

「呼び方の変わり方といい、昼休みのブチギレといい・・・」

「・・・・・・・・、みんな驚いていたね。私のプチギレ」

「そりゃ、驚くだろ」

「でもね、アレが本当の私なんだよ？久瀬君」

「えっ??？」

「皆知らないだけなんだよ、本当の私。腹黒くて嫉妬深くてクドイ
本当の私の事をさ。本当は優等生じゃないんだよ、ただの“偽善者”
なんだよ」

「おいっ、何言って・・・・」

それ以上言葉は出て来なかった、あまりにも気まずい空気に変わり
果ててしまったからだった。

一体どこでこんな空気になったのだろう？この時だけは周りの寒い
風も忘れて緊張感で体が熱くなる。

誠の嫌いな沈黙も、気まずい空気もこの時だけはどうにもならな
った。

そんな沈黙を破ったのはその張本人、里佳子だった。

「見たでしょ？私の万引きテク。今まで見つからなかったんだけど
な。久瀬君が初めてだよ」

「・・・・・・・・、見つけて悪かったな」

「うつん、むしろ感謝している」

“感謝”

予想だにしない言葉が飛びしてきて誠は戸惑い黙り込む。

里佳子の発言を見守ることしか出来ない。

あの日、あの本屋で目撃してしまった里佳子の万引きする姿。

信じ難い光景だったが悲しいことにこれもまた事実。また過去の話
だから変えることは出来ない。

「偽善者の私が本当の私を止めようとするけど中々止められないん
だよ。」

盗ったら盗ったで偽善者の私が出てきて自分のやった事に後悔する、いつもこうだったんだよ。

それを君は止めてくれたんだよ？分かる？久瀬君」

「まあ、分かん事はないが・・・」

「調子に乗って“誠”なんて呼んじゃってバカだよ、里佳子さんは・・・」

里佳子の息は真っ白だった、そう憂鬱になりそうな空気の中で邪魔するようにつめたい風が吹き付ける。

里佳子は立ち止まり、両手を胸の前で組んでその場駆け足を始める。

「寒ッ！！！！！！！！」

冷たい風のせいで彼女は涙目になり頬は真っ赤。足元はもっと寒そうだった。

すると、里佳子の目の前にマフラーを持った手が伸びてきて手の主に顔を上げる。

「やっぱ、寒いんだろ？」

「寒くないって！いいって！マフラーはもう・・・ヒャッ」

ヒャッは驚いた里佳子の可愛い声。誠の手のひらが里佳子のプニプニの頬に引っ付いたのだ。

余計に里佳子の顔が赤くなる。数十秒経った後に誠の手のひらが里佳子の頬から離れる。

「冷たいじゃないか」

片手に持っているマフラーを誠は里佳子に優しく首に巻き始める。

巻かれている側の里佳子は何も言えずにただ誠にマフラーを巻かれるだけ。

全てを巻き終わると誠は早歩きで里佳子の前を歩き始める。里佳子はその姿を見て必死に追い始める。

「えっ、ちよっと待ってよ」

「待たない」

と言いつつ誠の足は止まり里佳子がやっと追いついた。

「お前の悩みは俺の悩みだ、お前が笑うなら俺だって一生懸命笑ってやる、前にお前が言っただろ？」

“秘密の共有”って。本当をお前を俺は知ってるんだよ。だからお前を困らせるような奴が出たら

俺が決着つけてやる。腕に自信は無いが俺がお前を守ってやる。そうだろ？」

“里佳子”

ちよつとだけ彼女は黙って誠から巻かれたマフラーを弄り始める。

「何小恥ずかしい事言ってるんだ・・・、俺・・・」小声で呟くが里佳子には届いていない。

「うん・・・、そうだね・・・。ねエ誠」

「??????」

誠から巻かれたマフラーの端っこを手を取った、

「半分こ、しない??」

半分こ（後書き）

さあ、関係修復に成功いたしました！

事件発生。ただし限定的な事件だ

その事件が発生したのはテスト初日の12月1日のSTの時の事だった。

いやっ、その事件は別にクラス全体を巻き込む程の事件（昼休みプチギレの乱）程ではなかったが。

その事件の内容は誠と里佳子、2人だけの間で発生した事件と心の葛藤であった。

「ハア・・・、終わった、いろんな意味で終わった・・・」

福井百合奈はテストに対して恐ろしい後悔の念に襲われていた。手のひらに額をのせて考え込むポーズ。

テストを回収された里佳子が百合奈に近づいて「テストどうだった？」と聞こうとしたのだが、

「百合奈??？」

聞く気が失せるほどに百合奈は真っ白な灰に燃え尽きていた。

いやっ、真っ黒な炭。

不完全燃焼。

「チキシヨ・・・、やっちまった・・・、チキシヨ・・・」

涙目になっている百合奈に里佳子は全く声を掛けることが出来ずにいた。

声が掛けられないから里佳子の顔は何とも言えない表情を醸し出していた。口元がピクピク動いている。

ところが、いつまでも凹まないのが、生徒会書記並びにハンドボー部実質部長の百合奈の特徴。

むくつと起き上がると里佳子をロックオンし、キラーンと目をギラ

キラ光らせる。

「こんにやろー、この優等生エエエ」

「うにゃああ、止めてよオオオ」

と、どこかの5歳児の仕出かしたイタズラを叱りその上その5歳児のこめかみをグリグリする母親のごとく

百合奈は両拳をグーで握り締め、里佳子のこめかみをグリグリする。里佳子の目は涙目。

「いい加減にしろ」

誠が止めに入る。するとこめかみグリグリの刑が執行されている里佳子の表情はパーツと明るくなって

大声で叫びながら誠の大きな胸に飛び込む、

「父ちゃん！」

「誰が、父ちゃんだ」

“父ちゃん”の胸に飛びついた、自称5歳児兼娘の頭にチョップが決まった。

綺麗に決まった。さつきまでこめかみをグリグリしていた百合奈の左手が顎の前に止まった。

驚きのポーズ。

すると、さつきまで自分を痛めつけていた百合奈に里佳子が抱きつく。

「酷いよー、父ちゃん」

「あなた！里佳子を泣かせて」

「お前らまとめて叱りたいのか??？」

楽しい楽しい夫婦漫才（自称5歳児の子ども付き）が展開されている席の周りで須藤・前沢ペアは入れず

席に座ったままその様子を見守る。

「仲イイね、康博ちゃん？」

「いいなあ・・・。ああいう空気」

須藤の発言をはっきり聞き取った前沢は須藤の顔を見上げてちよつと目が点になる。

目を点にした後、前沢は視線を下ろして3人の方に目を向ける。
「・・・・・・・・」自然に彼女の口先が鳥のくちばしみたいに尖がる。

そして、座っていた席から立ち上がって3人組の方に歩き始める。
近づいてきた彼女の姿に最初に気がついたのはコントに巻き込まれた誠。

「前沢？」

「久瀬くん、この前のテスト勉強かったよ 今日の数学科結構出来たんだよね。今までの私じゃ信じられない位の会心の出来だったよ」

「ああ、そうか??？」

「そうだよっ、それでさあ、また教えてくれないかな??明日の現国とえーつとなんだっけ??」

百合奈が話し割り込んできた。

「明日は確か物理じゃね??」

「そうそう！物理ガチ難しくて教えてよ。久瀬君・お願いッ！」

と、誠の目の前で前沢は手を合わせて必死に“お願いポーズ”。終いにはウィンク。

「・・・・・・・・」

「ねッ??」

「・・・・・・・・分かったけど・・・」

「よっしや！」

前沢は“お願いポーズ”からガッツポーズ、両手で拳を握り締めて激しく嬉しさを表現。

途端に誠の後ろからモヤモヤとしたブラックな空気が2つほど感じられた。

しかし、前沢はそんなこと気にせずに須藤の方に顔を向けて出し抜いたような不敵な笑みをこぼした。

「誠君、私もいいかな？」

「おう・・・、別に構わな」

「私もいいかな？」

「里佳子も????？」

前沢は、ははーんと小声で軽く呟くと全く頼りがいのない言葉を発する。

「うわぁ、久瀬君つてモテモテだねえ」

そう前沢が言った瞬間に須藤が動いた。

「俺も混ぜてくれ!!!!」

「おやっ、男の子にも」

更に事態がゴタゴタになった頃に誠たちの担任、藤枝が教室に入ってきた。

「はい、みんな座れ。テストで疲れているかもしれないが10分くらいで終わることだから聞いてくれ」

と手元に持っていた大きな茶封筒から白い紙を取り出す。

「アンケートでな、“全国万引き撲滅委員会”からだ」

その言葉を聞いた瞬間、誠と里佳子が顔が固まった。

アンケートには正確に

シャーペンを握ってアンケート用紙を里佳子とほぼ同じタイミングで開いてみる。

彼女と目配せを交わしたがどうにも言うことができない。実に気まぐずい。百合奈、須藤はさつさとアンケートに答えている。前沢に到っては高速でペン回しをして暇そうにしている。ため息もしてるし。最初の質問にシャーペンの先端を置く。

万引きについてどう思いますか？

- (1) 絶対にしてはいけない。
- (2) してはいけないと思うが大した問題はない。
- (3) しても問題はない。
- (4) 普段しているから問題はない。
- (5) どちらとも言えない。

当然ながら、(1)に をして次の質問に進む。誠の気になる相手も次々と質問に答えていく。

誠とは無縁の世界・・・、とも言いづらい切っても切れない“万引き”と言つ三文字。

「終わったら一緒に配った封筒に入れてフィルムはがして封をしるよ」

「はい」

次々と万引きアンケートを終わらせた同級生たちが男女関係なしに次々を提出して帰宅あるいは、部活の準備で教室を出て行く。前沢も提出を終えて急かす。

「久瀬くん、まだ???」と自分でやったネイルを見つめながらことさらに急かす。

時間に余裕がありますよ的に彼女はさっきまで見つめていたネイルに息を吹きかける。

急かされている気持ちにもなってみる、と心の中で前沢に対して愚痴を漏らす。須藤も立ち上がり提出。

ついで、百合奈も提出し誠たちの提出を待つ。これがどれだけのプレッシャーか想像しきれない。

里佳子の方を向くとすでに半分以上は終わっているように見える。こうなったらヤケになるしかない。

さっきまで遅かったシャーペンを素早く動かしてさっさと終わらせる。

「裏は・・・、いいか・・・」

アンケートの裏の意見には答えない。答える必要がない・・・、と思う。

アンケートのページを閉じて茶封筒にスツとそれを入れて封をして教卓に提出し残るは里佳子込みの数人だけとなった。「ふあああ」と前沢が情けない欠伸をするくらい誠たちは里佳子の提出を待った。それは、15分くらいにもなった。

「ねえ、久瀬君。私めっちゃ暇なんですけど?」

「すっ・・・すまん」

「何で誤る必要がある訳??あつ、もしや里佳子の事、気に掛けるんじゃないの??」

「おいっ、前沢」

途端に前沢の長くて細い足が組まれてニヤツと不敵な笑みを浮かべる。確実に挑発している。

この前の“昼休みブチギレの乱”のことを忘れているのだろうか?それとも、

「終わったよ?詩」

里佳子が立ち上がったってアンケートを彼女の眼前で茶封筒に入れて教

卓に提出する。

「さっ、お昼食べて勉強でもしよ」

「おっ」

里佳子と誠がさきさき教室を出て行き“待つてよ、二人とも”と百合奈も教室を出て行く。

取り残された須藤・前沢の牛乳コンビも追いかけながらゆっくり並んで歩いていく。

「おいっ、さっきのはなんだよ？」須藤が前沢は聞いただす。

「ハア？何の話かな？前沢さん分らないや」

「沢にケンカ売ったろ。さっき。その事だよ」

「別にケンカは売った覚えないんだけどなア、康博君はどうしてこ
うも鈍いのかしら？？」

「にっ、鈍いつておい」

それきり彼女は須藤に何を言われようと喋ろうとはしなかった。口を尖らせて須藤の言葉を無視する。

食堂に到着すると先に行った三人がテーブル席を確保してくれていた。

「遅いぞお、お二人さん」そう言ったのは、自分の弁当を広げている百合奈。

「ゴメーン、康博ちゃんがちょっとややこい質問攻めしちゃうから
つい」

「おっ、俺のせいかな？？」

前沢は須藤の見えないところで軽く舌を出してすぐに引つ込める。
それを見たのは里佳子だけ。

彼女はさっきまで軽く舌を出した前沢を凝視する。

「あらあら？どうしちゃったのかな？里佳子？？」

この空気はマズイ。

そう察したのは、里佳子、前沢以外の三人（誠、百合奈、須藤）。

「さあさあ！早くご飯食べて勉強しようよオ、里佳子？詩？？」

一瞬だけ里佳子に再び不敵な笑みを覗かせると彼女は、

「うん、食べようか」とキヤラを変えてイスに座り込む。が、前沢と須藤にとつては

大事な物が抜けていることに気付き、前沢はイスから立ち上がる。

「牛乳買ってくる」

「あつ、俺の分も」

「分かっているって。お金は後でいいから」

「おう」

『みんな、バカばっか』

テスト勉強を教え終えて誠は両親のいないリビングで遊里に今日の
前沢の行動を洗いざらい話した。

遊里に相談した方が前沢の真意が掴めると思ったからだった。

「へえ、そんなことあつたんだ？」

「たく、前沢は何を考えているんだか^{アイツ}」

すると、誠の目の前で人差し指を立てて遊里は「チツチツチ」と言
う言葉を発してその指を揺らす。

「敢えて核心は言わないけど、私思うにその前沢さんが一番まとも
だと思う」

「ハアア？？？アイツが？？？まとも？？？」

「その理由は、自分で考えな。誠」

そう言つて、誠の妹・遊里は自分の部屋に向かって歩き始め誠はそ
の後を追う。

「おいっ、待てよ」

「少しは、頭良くなりなあ」

・
・
・
・
・
・、
無茶苦茶だ。

アンケートには正確に（後書き）

評価してくださった人ありがとうね。
作者は嬉しいですよ。

前沢だつて女の子

前沢 詩は自分の部屋で桜色のヘアゴムを口で啣えながら足の爪きりをしている。

ある程度爪を切り落とすとそれをゴミ箱にまとめて捨てて啣えていたヘアゴムを口から取り手首に通して

長い後ろ髪をまとめて桜色のヘアゴムを留める。

髪の毛をまとめると彼女は自分のベッドに寝転び、今日の同級生たちの行動とかを分析し始める。

今日の争点は同級生の女子、沢 里佳子とその彼氏みたいな男子、

久瀬 誠。

考えに考えている途中で前沢のケータイがバイブとともに鳴り始める。

「おやつ？ 康博ちゃんから電話つて珍しいな」

その相手は、前沢と常に行動をとみにしている牛乳飲み仲間の須藤であった。電話の向こうの彼の声は

どこかいつも調子が違っていたがまあざわはその違った調子に合わせる。

「いやつ、ちょっと聞きたいことがあって・・・な？」

「ん〜ん?? 別に聞かれるようなことはした覚え、ありませんが?」

「沢を挑発してたじゃんか。なんだよ、おかしかったぞ? 久瀬君もお前の言動止めてたしよ

言い過ぎだったぞ」

「ふーん、康博ちゃんからそう見えた訳ねエ？」

ちよつとだけ前髪を弄り始める。当然のごとく電話越しの須藤は前沢が何しているかは分からない。

「ホント・・・、バカばかり・・・」

「バカつておいッ」

「おやおや？聞こえちまったか」

『どういう意味だよ？おかしいぞ？マジで』

「ハア・・・・・・・・・・・・・・・・」

前沢は額に手のひらを当てて須藤の言動に呆れ長いため息をつく。

誠と言い、里佳子と言い、百合奈と言い、須藤と言い・・・・・・・・。

「鈍ツ・・・・・・・・」

『なっ、なんて言った？』

「別に??」

話を誤魔化す。これ以上話をしても無駄だと思ったからだろう。

「用ないなら、もう切っちゃうよ？」

『あっ、なあ前沢・・・・・・・・』

電話の向こうの須藤の恥ずかしそうな声に前沢は彼のちよつとだけ期待する。

「何かな??？」

しかし、ここは前沢の力量。何かに期待したとしても平然としていられる。

『明日だけど・・・・、また久瀬君呼んで勉強会しようかと』

「ふーん・・・・・・・・。別にいいけどさあ」

『おう、もう久瀬君にはメールしてるから明日の午後1時から』

「えっ？もうメールするような仲な訳なんだ」

『まあな・・・・、切るぞ』

一方的にケータイを切られると前沢はケータイを軽く投げてベッドに完全に寝転んで部屋を照らす

青白い光りを発する蛍光灯を見つめる。すると、またケータイが鳴り始めバイブが大きく揺れる。

「・・・・・・・・」

前沢は後ろ髪を指で搔き、ベッドから立ち上がりケータイを手にとって電話に出る。

「もしもし？私眠いんですけど」と大きい欠伸をして相手の返

答を待つ。

『あつ、詩？里佳子だけど』

前沢はにやりと口元が緩んだ。これはちょっとだけ面白い展開になったなと思ったからだ。

「何だ里佳子さんかあ。どうしたのかな？」

『今日の詩、一体どうしちゃったの？なんか変だったよ？』

「・・・・・・ニブチン」

『なっ！???ニ・・・ニブ・・・！』

「“ニブチン”言ったの、分かる??ニ・ブ・チ・ン」

『今日の詩はなんか私に対して何か挑戦的で・・・ちよつといらつと来た』

「それさあ・・・私は里佳子の為にやったつもりですけど??」

ケータイを横顔と方の間に挟み込み自分で作ったネイルを見つめる。今日だけで何回も見ている。

そして、息をそつと吹きかける。

『意味が・・・分からないんだけど』

「分からないならいいんだけど」

『どういう意味だよ、詩のイジワル』

「自分で分かる様になるまで私は何も言わないけどさあ、強いて言えばさ」

『うんうん』

「もつと客観的に、かな??」

『ハアアアア』

「切るよ?」

『あつ、ちよつ』

と、前沢は里佳子からの電話を一方的に切り、電源も切り電気も消さずに眠り込んだ。

前沢（詩たん）の真意

12月7日、テスト最終日。

最後のテストが終了してクラスのみんなが安心して背伸びなどをしている。

「ハア・・・・」頼杖について大きくてどこか脱力した感じのため息をついたのは前沢 詩である。

その大きいため息にクラスの女子や男子が振り向く。だがため息に反応して動いた人物は、ごく一部だった。誠、須藤、百合奈の3人だった。里佳子は自分の席からは離れようとはしなかった。

あのテスト最初の日の放課後に起こったあの勉強会以来里佳子と前沢の関係はギクシャクしていたから

だ。今日も担任の藤枝の到着は遅い。毎度の事ではあったがやっぱり遅い。

「ハア、いつそ死にたい・・・」

3人の前で愚痴を漏らす前沢は机に顎をつけて実に憂鬱そうにしている。その表情を見た百合奈が同情の意を表し優しく言葉を掛ける。

「詩・・・・、出来なかったんだね・・・」

里佳子は、全く絡む気配はなかった。その姿を見た前沢はフーンと声を上げてそれきり言おうとはしなかったがそれを察した百合奈が里佳子に話しかける。

「里佳子、もう許してやったら？」

「別に？私は怒ってませんよあだ」と里佳子はさらりと話を流したが彼女の目は怒りに満ちている感じだった。一方前沢の目は冷たい目をしていたがその奥では楽しんでいるようにも見えた。

もちろん、これはどちらも誠の主観で見たものであって実際はどうか分からないが多分そうだと思う。

すると、前沢が里佳子にケンカを売るような発言を姿勢を低くし彼女の目を見ながらした。

「あらあら？どうしちゃったの？里佳子」

「別にいい？？」

「もしかして、心の内側で怒っているんじゃないの？？」

里佳子の目を凝視していた前沢は姿勢をきれいにしつつも彼女の目は見たまま。

すると里佳子も姿勢をピシツとして前沢の瞳を見つめ返した。

「詩。アンタ何企んでるの？？」

「ハア？？何の事か、詩ちゃんサッパリ」

と前沢は両手の手のひらを天井に向けていかにも分かりませんよポーズ。

2人の口ゲンカを見守るクラスメートと前沢の周りにたかっている3人。このまま、またブチギレの乱が、予想された時突然前沢に話しかける人物が現れた。

「いい加減にしろよ、前沢」

「ん？？それはどういう意味かな？？久瀬君」

「そのままの意味だよ」

誠だった。

前沢と里佳子の口ゲンカに口を挟んだのは。前沢は視線を誠に移して今度は誠と会話し始めた。

「ここんどこ、お前言いすぎだぞ。里佳子に対して」

「ええ？？別に私自覚なんてなかったけどなア」

「そついうお前の言動がム力つくんだよッ！」

この空気は、里佳子以上にヤバイ。

「里佳子をこれ以上困らすじゃねえよ」

「ん？？それはどうしてかな？？どうして里佳子困らせたらなんで

久瀬君が怒るのかな??」

すると、誠はちよつとばかり理性は保つものの、もう感情に身を任せる感じで前沢にそれをぶつけた。

「そういう約束だからだよ。里佳子と俺は約束をしているんだよ。互いを傷つけないって約束を」

「“約束”? フーン・・・そう・・・約束ね??」

「そうだよ、例えお前が俺のダチでも里佳子傷つけたら許さないからな」

「フーン・・・、そうなんだあ」

と、一瞬だけ誠から視線を外して里佳子の瞳を凝視してニヤツとにやける。

「約束なんだ?? 里佳子お??」

「!」

途端に「あーあ、止めた、止めた」と前沢はイスの上で背伸びをしながら放つとカバンを

肩にかけて教室の後ろ側のドアに向かって歩き始めた。急に歩き始めた前沢を須藤が追う。

「おい待てよ、どこ行くんだ?」

「帰る」

「STは?」

「休む」

実に短い会話を終わると前沢はそそくさと教室を出て行きその後を誠が追いかけようとする。

前沢が出て行ったドアに手を当てて廊下を左右見渡すがもう彼女の姿はなかった。

「アイツ・・・」

イラつきを隠せない誠の肩を誰かがポンツと叩いた、振り向くとそこに立っていたのは里佳子だった。

「里佳子」

「もういいよ、誠」

「でもよ」

「良いんだってば！」

里佳子が大声を張った、そこまで大声で言われたら誠も言い返すことが出来ない。

「私がさ、バカだったんだよ。それ詩が正しかったの」

「意味が分からないんだが」

「むしろ、感謝しなきゃ・・・」

「?????」

「ST始めるぞ」

藤枝が教室に到着してSTを始めた。STのせいで2人の会話は途切れたのだがSTが終わった後も里佳子は何も話そうとはしなかった。

一足早く学校を出て行った前沢はアスファルトの道路の上を歩いていたが誠が言った一言が彼女の中で引っ掛かっていた。

「そうだよ、例えば前が俺のダチでも里佳子傷つけたら許さないからなッ」

“ダチ”

首に巻きつけているマフラーを弄る。

・・・ダチだったんだ、私。

家庭訪問

テスト休みは、10日間ある。

10日間のテスト休みを終えると待っているのはテスト返却と修学旅行の説明。

1年生は、球技大会、3年生は、就職戦争あるいは受験戦争。

今日はそのテスト休みの3日目。

市橋駅。誠の通う高校の最寄り駅塚口駅から一駅隣。

その駅から通っている生徒の中に里佳子がいる。彼女に呼び出された誠は、ちよつと憂鬱になりかけていた。わざわざ里佳子に呼び出されてしまったのである。駅の改札口を出るとそこで彼女は待っていた。

「誠、こっちこっち」

手を大きく振りキラキラとした笑顔を放っている。眩しいと同時にどこか鬱陶しい。

「やめろよ」

「来てくれたんだ、ちよつと嬉しい」

「お前が無理矢理呼び出したんだろっが」

別に里佳子とのデートとかそういう理由で誠はここにいる訳ではない。

「じゃあ、行こうか、私の家」

別に里佳子の家に、上がりこんであれやこれやする訳でない。誠にしか相談できない事があつて里佳子は彼を家に呼び出したのである。その理由は後でよく分かる。

駅からしばらく歩くと住宅街に差し掛かりそこを抜けると今度はマンション群に景色が変わった。

そして、一つのマンションの前で里佳子が立ち止まりそれに応じて

誠も止まる。

「ここだよ」

「ここは…」

そこで建てられていたマンションは明らかに新築マンションであった。築は3年らしい。

セキュリティは万全、早速マンションの中に潜入。

「凄いよな、ここ」

「でしょ？」

と、里佳子の顔からは自信ありげな笑顔が浮かばれる。

「じゃあ、私の部屋行くよ？エレベーターへGO！」

「おう」

里佳子のテンションが異様に高い、教室と言うか学校では見かけない明るさであった。

エレベーターに乗り込むと彼女は迷いなく6階のボタンを押して高速エレベーターは6階にたどり着く。

「こつちだよ、早く早く」

「おいっ」

里佳子の足は速い、さすがチーター。誠はすぐに置いてけぼりになる。

彼女の走っていった廊下を歩いていると里佳子がすでにドアの前で待っていた。

「遅いよお???」

「お前が速過ぎんだよ」

「プッ、なにそれ???」

苦笑する里佳子、ちなみに彼女の顔を見て誠の顔が赤くなったのはここだけの秘密である。

里佳子の苦笑した顔は結局はしばらくは直らずに黙って彼女は扉を開く。

「お邪魔しまーす」

不意に誠が言い放った言葉、日本人なら必ず一回は言ってしまう言

葉だ。

例えそこに家の主がいようがいなかるうが。

「いらつしゃーい」

里佳子が誠の「お邪魔しまーす」に反応し「いらつしゃい」を言い放つとまた里佳子が苦笑する。

「なんか、他人行儀」

「実質他人だろが。俺とお前は」

キレイに整理整頓されているリビングまで続く廊下とリビングルーム。

しかし、そこには誰もいない。

「家族は？」

「2人とも留守。本当におバカな両親だね。年頃の可愛い可愛い娘を1人置いてけぼりなんて」

「親は、仕事かなんか？」

「うん、なんかIT企業の会合かなんかでお父さんが幹部で、お母さんも幹部の1人って」

「エリート中のエリートじゃないか…」

全く想像できない次元の話。IT企業の幹部ってどんだけ金持ちでどんだけエリートなのだろうか？

「で、今はアメリカ…、嫌今はインドだったかな」

「どんだけだよ。そんなの漫画とかで十分じゃねえか」

「ホント、嘘みたいな家族構成。それでその嘘みたいな両親の子どもは“非行少女”なんだよね。

嘘みたいな事実の上に更に“嘘みたいな事”を重ねている」

「……………」

「そろそろ、本題に移ろうか？」

「ああ」

盗品たち

「オオ……」

この声は誠の声だ。そしてその意味は感嘆の意味。どうして感嘆しているかと言えば今までちよつとだけ

気になっていた女の子の部屋に自分が堂々と上がり込んでいるから。

いやっ、ちよつと間違い。

そりゃ、凄い抵抗があつた。凄い葛藤があつた。里佳子に入つてと言われても激しく体が抵抗するのだ。

男として言うより女子そのものに免疫がなかった（遊里はもちろん除く）誠にとつて、

女子の家に上がりこむだけ飽き足らず更に奥に入り込み個人の部屋に入るなど言語道断。

だから、手持ちのミネラルウォーターのペットボトルはスツカラカン。トイレだつて何回も借りている。

ペットボトルとトイレは来た瞬間からの話だが。

結局、彼女の部屋に入るまで20分は要した究極の時間の浪費。里佳子もちよつと呆れている。

「純情君だつたんだ。誠つて」

「うっさい!!」

「可愛い」

「……………」

里佳子にそう言われると誠の顔は一気に赤くなつたものの満更でもないと思つた瞬間でもあつた。

しばらく、里佳子のからかいを受け流していたがその後。つまりからかいを終えた後の彼女の顔は

実に爽やかな笑顔を浮かべて黙り込んでいた。

「ホント…、誠といると退屈しないよ」

「?????」

「さてと、問題のやつは…」

と、爽やかな笑顔を消すと立ち上がり彼女の部屋の隅にあるクロ―ゼットに距離を縮める。

里佳子の歩いていった方向を目線で追いかける。

「よつと」

クロ―ゼットを勢いよく開けると中から“なにか”が雪崩れた。

雪崩れた“それ”を誠は一つ手にとって言葉を失う。ビニールに包まれたままの漫画本。

そう、里佳子の万引きのキャリアの一つである大量の漫画本。ビニールは全て売られている当時のまま。

要するに全ての物に手は付けていないということだ。

「にしても凄い量だな。漫画だけでどれだけあるんだよ」

「ざつと…、60冊ほどは」

「まあ、中には内容が被っているやつも多いみたいだけど」

と同じ漫画本の第1巻を見せ付けてその場に置く。

そう。誠がテスト休暇を利用して里佳子の家に来たのは里佳子がこれまで盗んできた品物をどうするかと言う相談だったのだ。これでは犯罪者そのものではないかと後悔の念はあるものの仕方がない。

里佳子との約束。そして教室で皆に盛大に宣言してしまった以上もはや後戻りは出来ない。

「あつ！」

「誠????」

『前沢の野郎う。これが目的であんな挑発を。俺を試しやがったんだ』

俺が里佳子にとってふさわしい奴か…。

「どうかしたの？何か約束事とか？」

「いやっ、なんでもない。さっ。早く片付けようか」

「うんっ」

集計結果。

小説本、12冊

漫画本、64冊（そのうち被りは8冊）

お菓子類、14個。（そのうち賞味期限切れ3個）

鉛筆などの筆記用具、9つ。

合計、90

「いやっ、こりゃ尋常じゃないぞ？あっコイツにいたっては賞味期限7ヶ月前だ」

「うええええ！？マジ！？？」

「ほれっ」

と里佳子にそれを投げて渡して里佳子もその日付を見て「うお！？？」と声を上げて

それをゴミ箱へポイッ。よっぼどショックだったのだろう。自分の部屋に腐ったお菓子が…。

常人なら誰しも嫌うその状況。当然誠もその1人。

「さて。菓子は食って誤魔化せるとして問題はやっぱ本だよな」

「うん…」

「中古本として売ったとしても被りを売ったとしたら怪しまれるだろうし」

「うん…」

「しかも、こんなキレイなやつ。イヤッそれは扱い次第ってやつか。大手だと一回限りだろうし」

「……」

里佳子の表情が徐々に思わしくなってきた。とてつもなく落ち込んでいるのだ。

「なあ、里佳子」

「??????」

「菓子。食おうぜ???」

と、誠が手にしたのは里佳子が盗んだお菓子であった。すると、彼女の表情は柔らかくなり

「うんっ」と大きく返事を返した。

予約の力

同時刻。

前沢詩はリベラの前で左手首に巻いている小さい腕時計を落ち着きなく見ている。

そして、腕時計から目を離すと辺りをキョロキョロ見渡す。

今日の前沢の服装はどこか勝負服っぽくそれでも防寒対策はバツチリと言っ完璧な服装。

「あつ。おい」

「……………」

大声を張り上げて手を振る前沢。彼女の目の前に現れたのは彼女の牛乳飲み仲間の須藤康博。

須藤の表情は寒さで強張っている。いやっ、半分はちよつとした憂鬱。

「時間通り。でも普通は男の子が先に来ているんじゃないの??」

「お前なあ。朝2時に電話しておいて何を言いやがる」

「デヘッ」

「デヘッ、じゃねえ！こちとら寝不足なんだぞ！」

「まあ、ソリヤさておいて……」

確信を突かれる須藤の発言に一瞬だけ顔を固める物のそこは彼女の力量。すぐに話を逸らす。

「さて置くな！」

リベラの前で夫婦漫才をやっている2人の姿を見てほっこり顔を緩ませるギャラリーも少なくなかった。

周りの視線を気にする女子（妻）前沢と周りに目が行っていない男子（夫）須藤。

前沢の方は視線が痛くてちよつと冷や汗をかいている。

「ちよつと、視線気にしようよ……。康博ちゃん」

「エツ???」

と須藤が我に帰り、辺りを見渡すとギャラリーは20人くらいは軽く越えていた。

すると、途端に須藤の顔は赤く染め上がり前沢の方は軽く呆れている。

「はっ…、入ろうか??」

「うん」

「結構恥ずかしいもんだな」

「うん」

自動ドアが開き注目を浴びた2人の仲良し夫婦は店の中へ姿を消していった。

店の中は同じ学校の制服を着た生徒が何人かいたが私服姿の2人に気付く人間は全くいない。

クラスが違う、年が違うなどの理由もあるのだが。

「でっ。なんで俺が付き合わないかいけないんだよ」

「別にイイじゃん?せっかく可愛い前沢さんが相手にしてくれるんだから」

「可愛いねえ???」

須藤の言葉は皮肉がこめられている。前沢もその皮肉った声は聞こえたが完全にスルー。

店の奥の方に行くと新刊コーナーにはすでに人だかりが出来ており須藤は啞然。

前沢の方もちよつとだけ啞然。「あはは」と言う声が出るだけだ。

「さすが、話題の本…」

「おいっ、まさかとは思うが、アレ狙いか??」

「うん?そうだけど?」

「あんな人だかりの中かつ!??」

「ふふん。前沢さんを侮ってもらっては困るなア」

すると、インフォメーションに前沢は歩み寄って店員に話しかける。店員が奥に入ると本を持って出て来て前沢に確認を取り指でOKマ

ークを示す。

彼女は代金を払い、代わりに本を受け取る。

「ありがとうございます」

「はい」

袋に入った本を片手に前沢は上機嫌になり連れの須藤の方に駆け寄る。

「ほれ。予約とインターネットの力は素晴らしいね」

「そうだな…っておい!!」

「!???」

「始めから俺来る必要性ゼロじゃねえか!!」

「康博ちゃん…、この服見ても分からんとは…」

「おいっ、聞いているのか?」

「聞いてますよ。鈍感さん」

そう言い放つと店の出口の方へ歩き始める。ちよつと不機嫌気味に前沢の口は自然に尖る。

その後を須藤は早歩きで追いかける。

「鈍感っておい。どう意味で?」

「別にイ?意味ないですけどオ??」

「お前の発言はなぜか皮肉がこもっている様に聞こえて仕方がないのだが」

「そうかな???」

なんだかんだ言っただけ仲がいいのがこの2人の魅力だ。(クラスメート出席番号21番・談)

「どこ行こうかな?」

そう言いつつ彼女は近くのコーヒーストップに目星をつけてそこに距離を縮める。

その後をストーカーみたいに須藤が追いかける。言葉を掛ける余裕がないくらい寒いらしい。

2人の吐く息は真っ白で乾ききっている。前沢の方は自分のカバンからリップを取り出して塗る。

そして、リップを塗り終わるとそれを須藤に見せて「いる？」と冗談半分に聞く。

「バカ野郎！そんなもん…、間…接」

「間接ウ??」

「なんでもねえよ」

「可愛い」

途端に須藤の顔がまた赤く染まる。その姿を見て前沢は大笑い。

彼女に大笑いをされたのは誠に勉強を教えてもらった放課後以来の出来事。

「息……、無理イイイ!」

「お前。何がそんなに面白い??」

「その…!鈍感さと…!可愛さ……!!!」

その顔…、惚れておりますな！??

コーヒーショップにたどり着き（前沢の笑いも止み）2人が中に入るとそこには見覚えのある人物が窓際のカウンター席に座っていた。それを見て2人の表情がちよつとだけ強張った。

「あつ」

「「あつ」」

その人物と視線が合いお互い“あつ”と言う言葉が飛びあつた。前沢の方は憂鬱気味に額に手を当てていかにも“だめだあ”のポーズを見せて必然的にその人物とコーヒーを飲む羽目になる。

窓際のカウンターからはクリスマススの電飾等で飾り付けられている街路樹や建物が見えボーッと眺める。

黄色や緑色、青色、赤色に光るきれいな電飾たち。前沢の目はちよつとした絶望感に満ちていた。

自分の左隣には朝から自分が連れ回しに連れ回した同級生の須藤康博。その更に左隣には…、

「しかし、偶然だね！須藤君と詩と出会えるなんて」

「百合奈…。アンタ部活は??」

「今日はお休みなのだ。気楽でいいぜエ」

そう。2人のクラスメートでちよつと（大分）騒音メーカーな福井百合奈。

彼女のうるささはクラスメートのうちでは有名でこの前ブチギレた里佳子の大親友。

「そんで。今日はここでバイトしててさっきシフト終えたのださ」

「ヘエ、ソウナノカ」

前沢の言葉に血は通っていない。やる気がない訳ではない。せつかくの気分がなし崩しになったからだ。

そのせいで前沢の気分は最高に低迷し、さっきか購入した本ももうどうでもいい状態になっていた。

床にポツンと袋ごと置いてある。カバンは肩にかけたままで。

片方はとてなく明るい女子に、もう片方はとてつもなく暗い女子に挟まれた須藤の方は気まずい空気に苛まれていた。どう話しかければいいのかと考えていた。

「なあ、いい加減注文しようぜ？前沢？？」

「ホットのしう。あとイチゴのドーナツ。ナッツ付きイ」

「ああ…、これぐらいはおごってやるから？なあ？？」

「サンキュー」

前沢の言葉は生き生きしていない。前沢の要求を聞き須藤は席を立つ。あまりにも気まずい空気に耐えられなくなつたのだらう。注文と言つてもものの1分くらいで済ませられるのに暫くカウンターに戻ろつとはしない。遠くから見ても気まずい空気は感じ取れる。

「なんでアンタが都合よくここにいる訳？」

「ん？別に？偶然でしょ？？実際知らなかったんでしょ？ここでバイトやってるの」

「ソリヤ…、そうだけどさ……」

前沢の声に元気が無くなり、彼女の顔は珍しくほんのり赤く染まっていた。その表情を見た百合奈が不敵な笑みをこぼし前沢にその顔を見せ付ける。

「ははあん？顔が赤いぜよ？前沢さあん？？」

「ナツ！??」

「その顔…、惚れておりますな！??」

「ウツグググ」

「誰とは言わないけどオ」

とカウンター席に設置されている椅子の背もたれに左腕のひじを乗せて体を捻る形で須藤を見つめる。

視線に気付いた須藤に百合奈は物凄く馴れ馴れしく手を振る。手を振られたので須藤も手を振る。

その姿をととても悔しそうに前沢が凝視する。

「なあるほど〜ね？」

「わっ、悪かったわね」

2人の気まずい空気がピークに達したときに須藤がコーヒー類を持って帰ってきて、前沢に言われた通り

コーヒーのLサイズとイチゴナッツドーナツを彼女の目の前に置き前沢はそれらにがつつく。

須藤の方は自分のコーヒー片手に中身をちよつとずつ飲む。わずか2分ほどでドーナツを食いつくし、

コーヒーを飲み干した前沢はさつきとは打って変わって落ち着いた表情を見せる。

「ねえ。どう思う？」

「何が??？」前沢の質問に答えたのは、コーヒーをやつとこさ飲んだ須藤であつた。

百合奈も前沢の方に視線を移した。

「里佳子と久瀬君だよ。あの2人できていると思う？」

「そりゃ…、つまりい。カップル成立つてやつか？」

コクツと首を縦に動かす前沢の顔を見て須藤が噴出しそうになる。

「バカ言えよ！久瀬君と沢だぜ??釣り合う訳ないだろ??？」

「…………ツ。ホント鈍いつ」

「なつに!??？」

“何!??”と言うはずが“な”と“に”の間に“っ”が入り聞いた事のない単語が生まれた。

「詩さあ。まさかこの前のアレってそれが目的??？」

「さあ。どうだろうねえ」

「おいっ。意地悪しないでくれよ。前沢に福井」

「どうしようかなあ？ねえ？百合奈ア」

「ねえ？詩ア」

「グググググううう」

窓際のカウンター席で1人だけ悶えた須藤であつた…。

「よしつ。これでいいだろう」

「ちよつと、夕ご飯食べれるかな」

「食う必要性があるのか？」

そう誠に聞かれ彼は指をさし、指された先に里佳子の顔が動いた。そこにあつたのは菓子の数々。

里佳子と証拠隠滅という形で盗品の菓子を全て食い尽くしたのだ。

「まア…、いいか…」

「当たり前だろ？コイツはどうしようかな??」

やはり、処分に困るのは小説と漫画の本たちだった。しかも中には内容が被る物まである。

「どうするよ？里佳子」

「……………、ハアア」

答える代わりに里佳子は大きいため息をこぼした。彼女の行動に口が動かない。

「本当に、私は何をやっているんだか……………」

そう言い放つと自分のベッドに腰を下ろして膝を曲げて体育座りをする。

「里佳子？」

「私。これ始めたの親に反発したかったのが原因なんだ」

「反発？いい所のお嬢なのになア」

「……………」

恋愛の達人

「私ね、親の事万引き始めた頃は嫌いだったんだよ。いつも私を1人ぼっちにする両親を」

「……………」

「それで、親に気付いて欲しくて始めたんだよ。万引きを。それと私付き合っていたんだよ。男と」

「マジかよ!？」

驚きに誠が声を上げる。その顔を見て里佳子は微笑を見せ、話を続ける。

「それで、とうとう体までソイツにあげちゃって」

「……………」

「それでいいと思っていたの。万引きだってする、男とだって何でもやる。それで良かったと思っていたの。それでその事親に連絡しようとして何回も何回も受話器を握ったの。でもその度に言い辛くなるんだよ……」

お父さん。

あつ、里佳子か。どうしたんだ？お前から電話なんて珍しいな。

嬉しいよ。母さんに代わってやるよ

あつ、ちよつと。

「嬉しそつに喜ぶ両親の声を聞く度にッ」

その途端に里佳子は大泣きを始める。顔をぐしゃぐしゃにして体育座りのまま泣き続ける里佳子。

その姿を見て誠は里佳子の左隣に座り込む。

でも、何も話しかけようとはしなかった。

「……………」

前沢と須藤は横に並んでアーケード街を歩き、前沢の顔は不機嫌そうにしている。

なぜなら前沢の左隣にはコーヒーショップで出会ったあの人物が歩幅をあわせて歩いていたからだ。

「でっ」

「ナニカナ????」

「なんでアンタがついてきている訳え??」

背の高い前沢がその人物の顔まで目線を落とし相手の方も前沢の方に視線を合わせるために見上げる。

先程、偶然出会ったクラスメートの女子の福井百合奈である。

「しかし、背高いね。脚も長いし」

「どこに話し逸らしているの!？」

「……………」

須藤の方は黙り込んでいた。

この2人の口ゲンカに巻き込まれるのは嫌なものと、もう一つはただ単に気まずいのが理由だった。

「うおっ、寒ッ」

寒い風がアーケードの端から端まで通り抜け、シャッターの揺れる無機質な金属音が響き、寒がる通行人もいたが前沢と百合奈は議論に熱くなり全く気付いていない。

「あつ康博ちゃん、ちよつと待った」

「??????」

前沢に言われるがままに須藤は立ち止まり、須藤と前沢・百合奈ペ

アとの距離はどんどん離れていく。

不安になった須藤が小走りに近づこうとすると「来ちゃダメ」と言われる始末。

「康博ちゃん、今から半径5メートル進入禁止」

「ハアアア!??」

「分かった!？」怒鳴り気味に前沢に大声で言い付けられて須藤の歩幅は自然と小さくなっていく。

その様子を体を捻りながら確かめた前沢は姿勢を元に戻して百合奈を一瞥する。

「どうしたんだい？詩」

「さあ??これで邪魔者いなくなつてでしょ??」

「フエツ??」

「惚けないですよ?どうせアンタの事だから私と康博ちゃん無理矢理くっつけ様とかつて考えてるんでしょ?違う??」

「ありや、バレていたかあ」

前沢の顔が少々呆れ気味になる。開いた口が塞がらないということわざがある様に前沢の口は、

半開きで笑っているようにも見える。

「さすがは詩だねエ」

「だてに他人の恋愛相談乗ってないわよ」

「その割にやあ、自分の恋愛には臆病なのね」

「!??…中々言ってくれるじゃないの??福井さん?」

普段は“百合奈”と下の名前で呼んでいるのに今の状況では“福井さん”と呼んだ前沢。

そう呼ばれた百合奈のほうはニマーツと不敵な笑みをわざと彼女に見せ付ける。

「まア任せなさい。この恋愛のプロの福井さんが前沢詩ちゃんの恋愛を成就させてあげるウ」

「へっ?恋愛のプロって…アンタ彼氏いるの!??」

前沢が突然大声を張ってその声はアーケード中に響く。後ろを歩い

ていた須藤でさえ反響した声に
驚いてちよつとだけ立ち止まる。

「声大きい！」

「あつ、ゴ…ゴメン…」

「……まあ、フラれたけどね」

「えっ？マジ؟؟？」

百合奈は何も言わずに頷く。そのアクションを見た前沢が「ブツ！
？」と噴出しそうになる。

噴出しそうになった彼女は口を片手で押さえて必死に腹のそこから
こみ上げる笑いを止めようとする。

しかし、笑いをこらえようとすると、今度は前沢の両目に涙が浮か
び上がる。

そして、ついに片手がオープンに前沢の大きな大きな笑い声はアー
ケード中に響きまた須藤は驚く。

「ハハハハ！？なななな！？？ナニソレ！？？ダッサ！！！！
！」

「だ、ダッサって言うな！！」

「人に臆病って言いながら！！！！！！自分は何！？？？フラれてい
るじゃん！！！！！」

「それでも、詩よりは恋愛経験豊富だと自負しているつもり、なの
じゃが？」

「じゃが！？？？？？あつー！？？息出来ない！！康博ちゃんより
面白いよ！！アンタ！！」

「なんだと！？この野郎！！！」

すると、前沢は途端に走り出して百合奈にあっかんべえをすると逃
走。その後を百合奈が追跡。

「待てえええ」

「鬼さんこちら。屁のなる方へえ！！はははは」

「誰が鬼さんだ！！！！！」

前沢と百合奈にすっかり置いてけぼりにされた須藤は2人の行動を

見てすぐに追いかけ始める。

「おいっ」

それしか声を掛けられない須藤と百合奈・前沢組の距離はどんどん離れていく。

一応、5メートルは守っているよな？

そう考えながら須藤は2人の後を追いかける。ところがいつの間
やら2人の姿は見えなくなっていた。

燃え尽きる

テスト返却日。

先程、現代国語のテストを返却されて前沢と須藤の2人は酷くうな垂れている。

その他にも何人かうな垂れているクラスメートは他にも何人もいたがこの2人は一線を越えている。

心配し、里佳子と百合奈が近づく。誠の方は自分のテストの点数でこれくらいかと採点間違いがないかチェックしている。ちなみに誠の点数は93点。漢字間違いで7点を落とした。遠くで百合奈の声が耳に入ってくる。

「どうしたんだい？詩」

「はあああ、これじゃあ親にまた怒られるウ。慣れっただけど」

と、百合奈と里佳子に自分の取った点数を見せ付ける。さあ、笑えとばかりに前沢の顔はゲッソリしている。誠の通う高校のテストの欠点は30点なのだが前沢の点数は34点。欠点ギリギリ。

「まあ、欠点じゃない分マシじゃん？ねえ？里佳子？？」

「う、うん。そうだよ、ファイトだよ。詩」

「それ。励ましのつもりですかア??」

採点確認を終えて誠は立ち上がり、誰にかまって貰っていない須藤の方に近づく。

かまって貰えていない理由は、あまりにも暗いせいで全然声を掛けられない状況を彼が作っているから。

間違いない。

須藤は欠点を取ったに違いない。それが外れならば欠点ギリギリの点数を取ったのだ。

せつかく教えてやったのにと呆れながら須藤に声を掛ける。

「おいっ、須藤」

「……………」

「おい？？」

何も語ろうとしない須藤は自分のテストを誠にさつと渡すとさらうな垂れる。

渡されたテストを見た誠は自分の目を疑う。欠点以前の問題。0点。しかも、その0点は何も書いていない。白紙解答というやつだ。誠は全く体験したことのない領域。

さすが、須藤。赤点マスターと言う名前は伊達ではない。

「お前、一体どうしたら白紙で出せるんだよ？」

「すまん…、せつかく教えてもらったのに関わらず…」

「しかも、先公も先公で紙にデカデカと×一文字」

「ウツ……………」

「補習、もちろん行くよな？行かないやマズいぞ？」

「分かっているよ。今日は牛乳5リットルガブ飲みしてやるウ」

牛乳がぶ飲み宣言。それを聞いた誠は呆れた表情を浮かべて自分の席に戻る。

それを見計らって須藤といつも行動をともしている須藤と同じく赤点マスターの檜山聰と戸川精一の2人が須藤に近づき話しかける。内容はもちろん誠の話。

「須藤…、お前いつから久瀬と仲良くするようになったんだ？？」

「そうそう…、不良だろ？？」

2人の声はとてつもなく小さい。そして怯えまくっている。

「檜山と戸川よあ。言っておくが久瀬君不良じゃねえぞ…。むしろ優しい性格」

「「嘘だろ！???」」

ハモった。見事に檜山と戸川の声がキレイにハモった。檜山と戸川の声は教室中に響き皆そちらに視線を送る。近くにいた里佳子と百合奈と前沢。話の中心である誠もそっちに視線を向ける。

須藤・檜山・戸川の間には無駄な緊張感が漂い始める。緊張感がピクに達しようとした所に担任の

藤枝（数学担当）がテストを持ってやって来た。

「テスト返すぞ。自分の席に座れ」

「たっ、助かった…」

黒板に書かれた平均点。

クラス平均56点。全体平均61点。

要するに誠の所属するクラスは全体的な平均点よりちょっとだけ低いと言ふことだ。

「久瀬え」

「はいっ」

藤枝に呼ばれて誠は教卓に向かう。テストを片手に持った藤枝からテストを貰うとすぐに自分の席に座る。それから里佳子、須藤、百合奈、前沢の順番でテストが返されていく。

最後に配れるテストだけあって皆関数電卓やケータイの電卓を取り出して計算を始める。

最初からテストの点数を合計していた誠は数学の点数を足すと再び自分の席から立ち上がって

里佳子たちのところへ向かう。

「どうだった？」

「あつ、誠。やったよお。100点さ！」

そう自慢げに100点を宣言したのは里佳子。その周りで強く拳を握り締めているのは百合奈と前沢。

重苦しい空気が流れている百合奈と前沢。そして遠くで座っている須藤。

「そつだ、前沢はどうしたんだ？せっかく教えてやったんだし」

「えっ？ああ。うん。ほれ」

前沢のテストを受け取り点数を確認する。65点。まあまあ普通の点数。

「前のテストに比べれば凄いマシだけど」

「おう。ありがとう…。百合奈の方…」

「フンッ！…！」

“は”と言い掛けた所で百合奈は自分のテストを誠に渡す。56点。

「ああ、平均点ね…」

「今回のテスト。ほとんど平均点と同じなのだよ…誠君」

「そりゃ、ドンマイ…だな…」

「誠君は？？人に聞いているんだから教えるのが筋でしょ？」

「言っていいものか…」

「いいよ！ぶちのめしてくれよ！里佳子ですでにボロボロなのだから！」

「98点だが…」

百合奈は真っ白に燃え尽きた。

「それじゃあ、修学旅行の説明するぞ」

就職が、そんなにおかしいんですか!?(前書き)

先に百合奈が陰になっているような?

就職が、そんなにおかしいんですか！？

修学旅行の行き先：北海道の留寿都。

日程：1月13日から1月16日の3泊4日。代休：修学旅行後2日間。

2日間スキー学校。初日は札幌市の観光、4日目は函館市の観光。

「それで、部屋割りの方なんだが自由に選んで欲しいんだが宿泊先の関係で2つだけ5人部屋になる。

部屋割りを始めてくれ。修学旅行委員」

「はいっ」

藤枝に促がされる様に修学旅行委員の武井木葉と八島義也の2人が教卓に向かつて歩き始め黒板の前に立つ。武井の方は教卓の前で手を置き、八島は黒板にホテルの部屋の紙を貼り付ける。

「それじゃ！部屋割り始め！！」

武井の盛大な声を上げると途端に皆が席を立ち上がりあちらこちらで「一緒に泊まろう」やら「ゲームとかやろうな」と各々勝手に話している。誠は誰とも話してはいない。部屋割りなどどうでもいいと考えている。欠伸を見せしていると突然お声が掛かった。声の主はもちろん須藤。

「なあ久瀬君。部屋一緒になろうぜ？」

「ああ…、別にいいけど」

「久瀬君、俺以外男子で仲良い奴いないと思ってな」

図星。確かに誠に仲の良い男子は須藤くらいしかない。逆に女子の方は3人ほどいるのだが、

女子と男子とでは一緒に部屋に入ることとは出来ない。

「そいじゃ。武井に伝えてくるわ」

そう誠に言い残すと須藤はさっさと武井に部屋割りの班の名前と班長の名前を伝える。

班長は須藤。副班長が誠である。他の班員に戸川と檜山がいる。教

卓から戻ると須藤の席の周りには、戸川と檜山が待機していた。誠と話していたところを見て不安になったからだ。

「なあ、須藤。久瀬と同じ部屋なのか？」

「そうだった。今さっき」

「マジかよ…」

戸川と檜山の声は震えている。不良としての誠に怯えているのだ。ところが須藤は微笑を見せて

2人の誤解を解こうとする。前にも誤解だと言ったもののやはりピンと来ていないらしい。

「彼と接していれば分かる話さ」

「そりゃ、接しているお前だから分かる話だろ？俺等にはわからん」

一方の里佳子の班の方は百合奈と前沢と後は昼休みブチギレの乱の火付け役の陽菜と唯であつた。

ヤケに陽菜と唯は怯えている。昼休みブチギレの乱がまだ忘れられないからだと思う。

「陽菜と唯、聞いてるの？」百合奈が2人に問いかける。

「えっ！??」

「だっ、大丈夫大丈夫…でもないか…」

「？ホエ？班長決めんだけど里佳子で良いかの採決。副班は私だけ」

「…おっ！里佳子で決まり決まり!!」

陽菜と唯の適當過ぎる反応。それを見て面白がる前沢と里佳子。百合奈の方は疑問符がいっぱい浮かんでいる。怯えている側の2人は冷や汗をかいている。

「そいじゃ、里佳子が班長と…それじゃ木葉にその旨伝えてくるぜ！」

意気揚々と武井の方に班員と班長を伝えに言った百合奈。その間に前沢が怯えに怯えまくっている

2人の元に近付き、耳元にそつと囁く。

「そんなに怯えなさんな、怯えた顔は女の子にはマイナスなのだよ？」

それだけ言つと前沢は自分のイスに座り陽菜と唯を一瞥し前の黒板をボーッと見つめる。

「班が決まつたらもう解散してくれ」

後ろに置いてあるイスに座つたまま担任が適当な発言をする。適当発言に乗じたクラスメートの何人かは

すぐに立ち上がり教室を出て行き始める。誠もそれに便乗して出て行こうとする。

「おいつ、久瀬」

呼び止めたのは藤枝であつた。立ち上がった藤枝は自分の手を誠の肩に置いて職員室まで来るように指示する。恐らく、進路調査の事なのだろう。

「お前、就職希望なんだよな？」

廊下を歩きながら藤枝が尋ねる。子の前出した進路調査票に誠は“就職”にをしたのだ。

「はいっ。大学は行く気なんてありません」

「お前は、頭が良い。大学に行った方が」

「だから、行く気はありません。頭が良くて選ぶのは自由じゃないですか」

「そりゃそうだがな。入れ」

職員室に着くなり誠は職員室に招き入れられ藤枝の席に連れてこられ作業机のイスを借りて誠は座らせられる。藤枝がそれを確認すると誠が提出した進路調査票を彼に渡す。

「経済的な理由とかじゃなくてか？」

「確かに、経済事情は人並みよりちよつと下ですけど…」

「じゃあ、奨学金とか借りても大学に入つたらどうだ？頭が言い分援助される可能性だつて」

「就職が、そんなにおかしいんですか!？」

藤枝に怒鳴る。何度も何度も同じ話をする藤枝に痺れを切らしたからだ。

「おかしくはないが、お前みたいな人材減多にいないし世間が見逃す訳が無いだろう」

そこを良く考えておけ。

誠が帰途に着くと百合奈、須藤と前沢が待ち伏せをしていた。そして、強制的に連行。

無理矢理連れてこられたのはあのコーヒーショップ。

「ふう、温まるねえ。誠君」

「おいつ、なんで俺はここでコーヒーを啜っているんだ？」

「そりゃよ、俺達もう“友達”だろうからその交流会的な？そうメアド交換！」

「まあ、里佳子は陸上部忙しいからパスって言われたけどね。里佳子のアドくらい教えられるし」

強制的にメアド交換実施。

「これで、逃げられなくなっただぞ？久瀬君??」

「……………」

メアドを無理矢理交換された誠は何も言わないままコーヒーを飲み干した。

コンプレックス

コーヒーシヨップからやつと開放されてケータイを開くとすでに何通か未読メールが届いていた。

その相手は先程メアド交換をしたメンツである3人。

“確認メール 前沢詩”

“ちゃんと届いた！？ 百合奈”

“確認だよ 須藤康博”

「ん？？」

その中に普段は連絡をしない筈の誠の父親から1通のメールと簡易留守メモ2通。

学校にいる間にあつたらしく誠はそれ気付かずいつも通り学校生活を過ごしたのだ。

「なんだよ、今頃」

ちなみに誠は父親の事を“クソ親父”、母親は“ばばあ”と登録している。遊里は普通に“遊里”。

クソ親父と表示されているメールと簡易留守メモ。中身を見ようとせず削除する。

“誰があんな親なんかに指図されなきゃ……”

白い息はため息と多少の憤怒。親のことを考えると無性に腹が立つ。憤りすら感じる。

それ比べて遊里は両親の事が大好きだ。たまに誘われる家族旅行だつて遊里は欠かしたことがない。

もちろん、兄の誠は行った事すらない。正確に言えばそりゃ昔は親との折合いだつて良かった。

すれ違いが起こり始めたのは中学受験を強制させられた時から。塾

だつてエリートコース。

それまで普通に接していた友達との絆もほころびが現れ拳句の果てに中学受験は失敗。

そしたら親には責められ友達とだつて話すことすらなくなった。彼は親を憎んでいた。

ここまで、誠の性格が皮肉れたのもこれが一番の原因であつた。

何度だつて、親と仲直りしたいと思つたことがあつた。

何度だつて、友達ともう一度他愛の無い話をしたいと思つたことがあつた。

何度だつて、素直になろうと思つたことがあつた。

でもその度に、あの中学受験を思い出し足がすくんでしまう。立ち止まつて後ろに方向転換して逃げた。

普通に、中学に進学して新しい友達作つて高校受験を受けて新しい友達古い友達を交えて弁当広げて、

楽しくうるさくふざけたいと思つたことが何回だつて何回だつて思つたさ。

でも、俺にそれは無理に等しい話だ。俺は遊里とかとは違う。アイツは人との接し方が上手い。

いくら手を伸ばしたつて届かない。あいつはそういう奴だからだ。

「ただい、あつ……」

家の玄関を開けてそつと足元を見る。そこには見覚えのある大きい靴と小さい靴。黙り込む。

誠にとつて一番嫌いな人間。“クソ親父”と“ばばあ”がいつもより早く帰宅していたのだ。

「あつ、誠お帰り」

誠を第一に出迎えたのは妹の遊里だった。遊里の顔はどこかほくそ笑んでいる。

そりゃ、嬉しいだろう。自分が慕っている両親と食事が楽しめるのだから。

「ただいま」

それだけ遊里に伝えると靴を脱ぎ捨てて2階にある自分の部屋に早々に向かおうとする。

「誠帰ったのか？」

リビングのドアの窓ガラスから少しだけ見えた父親の姿。耳に入る父親の渋い声。

「ああ……」

「ちゃんとただいまは言えよな」

「分かったよ……」

顔は見えていない。ドア越しの短い父と子の会話。母は調理台に立っているらしく声は掛けてこない。

それだけを注意されると階段を上る。その姿を遊里はそつと見送る。

「誠？」

両親が大好きな遊里は誠の行動など到底理解できる物ではなかった。

「遊里、手伝ってえ？」

「はい、お母さん」

俺はこれで良いのか？このまま親と水を深く掘り下げたまま高校卒業して大人になって

仕事見つけて、働いて、一生のパートナーを見つけて、家族作って子ども作って……

『そのままでもいいのか？』

そう声を掛けるのは、もう1人の俺。それを無視してドアノブに手をかけて部屋に入る。

「あれ？出かけるの？」

「コンビニ」

「その格好じゃ薄いんじゃない？」

「分かってるよ、頭冷やすんだ……」

遊里との会話を終わらせると玄関から出て行く。寒空の暗い夜道を1人で歩いていく。

とりあえず、コンビニを目指してただ歩いていく。

「遊里、誠どうした？」

「コンビニだって。もうすぐ晩御飯だって言うのに」

「そうか……」

誠の父はちよつとだけ悲しげな目を見せる。

「お父さん??」

「いやつ。誠抜きで飯にしようか」

「えっ?でも」

「……、大丈夫。誠だってもう子どもじゃないんだ」

「いらつしやいませ」

コンビニには青白く光る蛍光灯。そしてその光りの下で売れるのを待っている商品たち。

とりあえず、雑誌でも立ち読みをするか。とホンのコーナーに足を運ぼうとする。すると、

「あれ？」

聞き覚えのある声と見覚えのある顔。今日、コーヒーショップでメ

アドを交換した仲間の1人。

「前沢？」

「久瀬君？」

どっちが早く…。

「ほれっ」

「あつ、ありがとう」

偶然、近所のコンビニでクラスメートの女子である前沢詩に出会った。出会って間もなく、

誠はコンビニの外のベンチに彼女を連れ出して座らせ熱い缶コーヒーを彼女に渡した。

隣で誠もベンチに座り缶コーヒーをすする。缶コーヒーで手を温める前沢の姿をチラリと見る。

「で、私連れ出してきてどういふつもり？愛の告白かなんか？」

「いやっ、前沢とちよつとだけ話したくて」

「私と？」

軽く頷くと再び缶コーヒーに口をつける。缶コーヒーを飲む姿を見て前沢も釣られて缶コーヒーを飲む。

外の気温は低く空気も乾燥状態。だが彼らにとってその空気は清しい空気だった。

「家、近くだったのか？」

「まあ、このコンビニは近いね」

「でも、電車は一緒じゃないよな」

「そりゃあ、私は基本遅いですから。行動が」

そう言うつと前沢は小さい顔の中にある口を緩ます。間近で見ると前沢もかなりの美人だ。

小さい顔に反して体つきはスリムで脚も長い。しかもその長さを強調するようなファッションセンス。

「私に話ってそれだけ？」

「あつ。いや」

再び缶コーヒーに口をつけた。しかし、
「あれっ？」

もう中身は完全に無くなっていた。その姿を見た前沢が微笑を浮かべて彼女も缶コーヒ―を手にとって飲み干す。飲み干すと近くのゴミ箱へ投げ入れて誠の空き缶も受け取りゴミ箱へポイ。

前沢が全てを終え、その姿を見た誠は口を開いた。

「今日、藤枝に進路の事で呼び出されてな」

「進路？何それ？まだ決めてないの？」

「前沢は、進路とかって？」

「私は、メイキャップアーティスト目指してるの。私のお母さんそれなりにその世界では有名人だしお母さんに弟子入りして自立して店とか作りたいなあ……って。おかしい？」

「……………。いやっ。俺より十分良い夢だよ」

「久瀬君??」

真っ黒な寒空。今にも雪が振り出して積もりそうなくらいの凍てつく寒さ。星とかは見えない。

ベンチの前の舗装したばかりアスファルトの道路の上を車が幾台か通り過ぎるもののそれ以外はなにもない。通行人はほとんどなく街灯だってそう褒めたような物ではない。

けど、2人だけの空間を作り出すだけには十分すぎる環境だった。

「俺、親が嫌いで嫌いで反抗して勧められている大学だって行く気しないんだ。就職して親から離れたいっていつもそう思っていた」

「いた？」

「今は微妙なんだよ。里佳子とかお前とか百合奈とか須藤とかと話していると凄く楽しくて。友達なんて一生作らないって決意していたのに簡単に崩されて。大人になったら俺達どうなるのかな？」

誠の悩み。このまま高校卒業して就職して皆とも離れていつしか心すら離れていくと考えるとなぜか恐怖を覚える。怖くて怖くて堪らない。大学に行ったらまた誰かに再会できるかもしれない。

里佳子か、百合奈か、前沢か、須藤か。誰でもいい。まだ仲良くしたい。

卒業してからもずっと、ずっと…。

「久瀬君って、里佳子の事どう思っているの？」

「えっ???」

「正直に答えてみて？里佳子の事どう思っているのか」

「俺は…、里佳子は俺にとって大切な人だと思う」

「それはどういう意味で大切なわけ？クラスメート？友人？それとも恋人…として？」

「それは…」

前沢の質問を前に黙り込んでしまう。考えてみれば俺にとって里佳子って一体何なんだ？

ただクラスメート？女友達？それとも。

「まあ、それは宿題ね。私だって人の事言えないし」

「……、須藤の事か？」

途端に前沢の顔が赤くなり彼女の肌は直接は見えないが鳥肌が立ったのだと思う。

そして、目を大きく見開く。見開いた後は体育座りをして顔を埋める。

『そういえば、里佳子も同じポーズをしていたよな…』

「やっぱり…か」

「いつから、気付いていたの？」

「そりゃ、露骨なんだよ。須藤の行動が。それにお前も須藤に対してだけはやけに声が高揚するし」

「休みの3日目に偶然百合奈にあって確信突かれたんだ。“自分の恋に臆病”。ホントその通り…」

「前沢？」

体育座りを止めて元の体勢に戻すと彼女は立ち上がって誠の家とか逆の方向へ向かおうとする。

その後を誠は少し追いかけようとする。

すると、彼女は立ち止まり誠の方に方向転換して顔を上げる。誠は一定距離を保つ。

「ねえ、久瀬君。いっちょ勝負とかしてみる？」

「勝負??」

「うん。どっちが早く……」

「早く??」

聞き返すと「やっぱりいいや」と言うと前沢は再び180度を回転させて誠との距離を離す。

誠もその後姿を見て何かを察したのか、自分の家の方向に向かって歩き始めた。

ねえ、久瀬君。いっちょ勝負しない？

勝負？

うん。どっちが早く……。

「どっちが早く、恋を实らせるか……」

ハンカチ

終業式は12月24日のクリスマスイヴにある。終業式まではまた何日か休みがある。

テスト返却と修学旅行の説明があつた12月17日から6日が経つた12月23日。

もう、クリスマスムード一色の街。それはどこかしこも同じなのだろう。

「いいえーい、次は私の十八番中の十八番だぜー！」

「ガンバ！百合奈！」

そして、なぜか誠はいつもの面々と共にカラオケボックスと言う狭い閉鎖空間にいた。

百合奈の言う十八番の歌と言うのは前に彼女が好きだと言っていたアニメのオープニングで使用された曲…らしい。

誠が知っている筈がない。

百合奈が歌を歌いだす前に「これは神だから」。

それだけを言つて歌を歌いだして早20分。さつきから同じ曲をループしている…気がする。

あまりにも馬鹿馬鹿しすぎて彼女の歌を聴く事に意識は入っていない。

「なんで俺が…」

事の発端は、前沢と別れて直後に来た百合奈からの一通のメールから始まつた。

23日にカラオケ行こうぜ！

百合奈

「断る」

百合奈のそのメールを見てすぐさま拒否の意思を表示して返事をせずに無視をしたのだが…。

「あっー！うるさい！！！」

一晩中鳴り続ける着信音とバイブの連続。その犯人は当然のごとく百合奈。

これではストーカーの域を軽く超えている。そしてその攻撃に誠は撃沈されたのだ。

「78点…。うん…。いまいちだなあ。もつと歌いたい。でも喉ガラガラ。という訳で次、里佳子！」

「歌唱力には自信あるんだよ。百合奈なんて軽く越えちゃうかもオ」

「なんによー！？？」

「行け！沢」

「須藤君がバックについているしねえ」

「このクソガキがア」

阿呆らしい。そう思って誠はトイレに立つフリをして自分のいるボックスから脱出する。

その姿を確認した里佳子はマイクを持って臨戦態勢で彼に声を掛けようとしたが残念な事に曲が始まる。

「よし！行け！里佳子！」

「あっ！…うん！」

異様にテンションが高い須藤と百合奈。テンションが微妙な里佳子。前沢はノル気もなく、ジューズをストローで飲んでいる。

『ふん…』

トイレに行く気はなかった。でも誠は本当に用を足してしまい嘘ではなくなった。

小便器の水を流して汚い手を洗い手を拭かないままトイレを抜け出る。

「ん？」

誠の視界を何かが遮る。遮っているのは小さい布のような物でその布は誰かの指に挟まれている。

その指の主は…。

「ハンカチ」

「前沢か…」

最近やたらと前沢と遭遇する機会が多い気がする。彼女からそれを受け取ると丁寧ハンカチで、

濡れた手を拭き始める。その姿を見た前沢がなぜか突然笑みを浮かべ軽く声を出して笑う。

「どうかしたのか？」

「ううん…なんでも。でもさなんか最近私達よく合うよね」

「ああ…。ハンカチ明日で良いか？ちゃんとアイロン掛けだってするし」

「ねえ久瀬君…」

“するし”と言いかけた彼の言葉を前沢が壁に寄り掛かりながら遮る。寄り掛かって立っていたのだが、

その場に座り込む。手を拭き終わるとポケットにハンカチを仕舞い込む。

「この前の事…、まだ覚えてる？」

「ああ…。どっちが早くで、と言う所で途切れたアレだろ？」

「うん。私アレから頑張ろうって何回も思ったんだよ？何回康博ちゃんに告ろうとしたか」

「前から気になっていたんだが」

「何？」

「どうして、須藤の事“ちゃん”付けなんだ？世の言う幼馴染か？」「バカな！」

それを真っ先に彼女は否定する。手まで振っている。彼女は笑って

見せかけるが誠の目にはそうは映らない。どこか悲しげに映る。どこか思い出に浸っているような感じであった。

「じゃあ、一体…」

「それは内緒。それは私の大切な思い出だから…さあて。そろそろ戻ろつか？時間的にも後10分位だし」

「おう…」

本当に、私って臆病なんだな…。人にああやこうや言っている割に自分のほさっぱり。

どこが空回っているかな？全然分らないや…。

「おおぅ！？なんだいなんだい！？詩と誠君がダブルでご帰還とは

！！」

「うるち」

約束

カラオケボックスを時間ギリギリまで歌い（前沢と誠は歌わず）5人はすっかり日の落ちた街を歩いてた。日が落ちてもクリスマス
の電飾の光は落ちてはいなく辺りはまだ明るかった。

喉をガラガラにした百合奈と須藤が並びその後を里佳子、その更に後ろを前沢と誠が並んでいた。

前沢と誠の間に会話は無い。話すことが無いのではなく話しくかつたのだ。話のきつかけを頭に巡らせるが中々頭に浮かばない。寒い空気が頬に突き刺さり多少の痛みがある。

ちなみに彼らが今向かっているのは、例のコーヒショップ。喉の渴きを潤すためだ。

「いやあ！歌った歌った、明日は終業式で冬休みかあ。なんかあつと言う間だね…、ゲフオ…喉ギヤ」

「福井は歌い過ぎだ。俺も人の事言えんが…」

須藤と百合奈は完全に喉を潰しその2人の様子を軽く歌った里佳子がちよつと呆れた表情で見つめる。

里佳子の呆れ顔も彼女の秘密を知るまでは全く見ることはなかった。自然と誠の顔がにやける。

隣を歩いていた前沢の目に誠のにやけ顔が映りその視線の先の里佳子を見つけて「ハハーン」と小さい声を上げたが前沢は別にその事を誠に伝えようとはしない。

視線を変えるとそこに立っていたのは友人の百合奈と楽しそうに話しながら歩いている須藤の姿。

須藤の笑顔は、前沢の目の前ではあまり見せたことは無い笑顔だった。軽いため息を吐く。

「前沢？どうしたんだよ？ため息なんてついてよ…」

「関係ないでしょー？アンタにはさ」

そう言う彼女が誠の前を急ぎ足で歩き距離を離していく。その足

は須藤達をも追い抜いた。

「私、用事思い出したから先帰るね」

「あっ、うん」

百合奈が応対すると彼女の姿は暗闇の中に消えていった。話しかけるタイミングを失ってしまった誠の顔を見た里佳子が足を止めて誠と肩を並べて彼の顔を見上げる。

「なっ、何だよ……」

「詩と何かあったの？」

「なっ……何でもねえよ……」

「フーン……？本当？」

ちよつとだけ里佳子はその艶やかな唇を尖らせて疑問形で誠を軽く問いただそうとする。

前沢と……何も無かったと言えば嘘にもなるが何かあったと言えばただ相談だけだ。それ以上は何もない。そう、別にやましい事は何もしていない。

「別にいいや。今度ゆっくり話してもらってからそのつもりで」

「おいっ。結局話すのかよ」

「なんなら、メール攻撃しようか？」

「それだけは勘弁してくれ」

きつぱりと、メール攻撃だけは拒否の申請をする。例のトラウマがあるからだ。

「分かった……！今度ゆっくり話すから。メールだけは勘弁してくれ！」

「約束？だよ？」

「約束するからッ！マジで」

誠は逃げられなくなる状況に立たされてしまった。見事に追い込まれた。さすが肉食動物。

“約束”の単語を聞くと彼女の表情はスッキリしてちよつとだけはしゃぎ回る。どこか子どもっぽい。

「百合奈。私も今日は早く帰らないといけないから」

「おう。分かったぜ。気をつけて帰れよ」

「うん。じゃあね」

前沢に引き続き里佳子もグループから外れて自宅に向かう為に駅に一直線に走り出した。

置いていかれた3人はコーヒESHOPに向かって尚歩き続ける。

「しかし、寒いな」

「なあに、ここで寒い言っていたら北海道はどうなのだよ」

「言うじゃねえか福井。お前はスキー出来るから羨ましいぜ」

「多少の経験者じゃき。言うほどではないのだけ？」

楽しそうに会話をする百合奈と須藤。その様子を後ろから黙って見守る誠。鼻からは白い息。

『関係ないでしょー？アンタにはさ』

…。

『私、用事思い出したから先帰るね』

……。

目の前には百合奈と楽しげに話している須藤の姿。

……。

「誠君？どうしたんだい？考え事かな？」

「おう！??？」

目の前を歩いていた筈の百合奈がいつの間にも誠の隣を歩いていた。「おう！??」は誠の驚きの声。

「お前、急に登場するなよ！」

「ありゃあ！逆ギレかい！？大人気ない」
「正當なキレだ」

いつか、里佳子取られるかもだよ？？

「いやぁ！生き返るウ！」

「暖房ガンガン効いてりゃソリヤ誰だって生き返るだろうが」

「まあ、久瀬君。そこは突っ込んだらアウトだぜ？」

ホットコーヒーを勢いよく飲み干した百合奈とその横でゆっくりとコーヒーをすする須藤と誠。

暖房の効いた温かいコーヒーショップの脚はまばら。閉店時間が近いからだと思う。

誠の隣で座っている百合奈は「暑い」と言いつと着ていた上着を脱いで後ろの背もたれに引っ掛ける。

つられる様に須藤も着ていたコートを脱ぎ被っていたニット帽を外して机の上に置く。

「冬休み…、2人は予定なんかあるの？」

「俺は昼寝」

「俺は、色々…」

「帰宅部は羨ましいねエ…。のんびり出来て。私ゃあハンド部忙しいちゅうのにイ」

暇人で帰宅部の2人の言動を見て呆れながら皮肉を込めて自分の部活の状況を言い背伸びをする。

欠伸をすると須藤が首を突っ込む。

「それは違うぞ…、福井。帰宅部こそ最高に忙しい部活だ」

「ほう…？」

「帰宅部は、家に帰るための部活だ。帰宅の途につく為歩き帰ったらPCやゲームをやる。一つの部活で二つの部活動内容を楽しめるのだよ」

須藤の自信満々の帰宅部理論。百合奈の目がどこか死んでいる。呆れにさらに呆れが上乘せされたのだ。

背伸びを止めると自分の持っていたコーヒーのカップをゴミ箱に捨

てて須藤のとの会話を止めにして誠と話を切り替えた。須藤は無視されたことにショックを覚えたらしくそのまま黙り込んだ。

「誠君は、冬休み。具体的な御用は？」

「特になし。その日次第」

「つまらんのう。今日みたくカラオケに…」

「それは勘弁」

そう言い放つと百合奈が笑い始めて「コーヒー無くて正解！」と時々言葉を織り交ぜて笑いを止めない。

須藤と誠には混ぜ彼女が笑っているかは分からないらしい。それらしい表情を浮かべている。

やつと笑いを止めた百合奈の目にはうつすら涙が見える。

「ああ…、めっちゃおかしいイ」

「そ…、そうかよ。悪かったな…」

百合奈と誠の間に妙な緊張感（みたいな物）が漂い始める。一緒に座っている須藤にもそれが飛び火し、皆が皆黙り込んで余計に緊張感（みたいな物）に拍車が掛かる。

「俺…、トイレ行くツ！」

ついに須藤が緊張感に耐えられなくなつてトイレへ急ぎ足で逃げようとした。

「おいつ、須藤ッ！」

誠が止めようと入るも彼の言葉が須藤の耳に届くことは無く彼はトイレに消えていった。

残された百合奈と誠の間に会話は全く無い。

「あの野郎…」

「ねえ誠君。ちょっと聞きたいんだけど？」

不意に話しかけてきた百合奈に視線を移すと彼女の顔はどこかブルーに見えた。

「何だよ」

「君は、里佳子の事どう思っているの？」

「えっ？」

前沢と全く同じ質問だ。アイツも俺に全く同じ質問をしてきたじゃないか。

そして、曖昧な答えを前沢に答えた。だが、目の前にいるのは里佳子の親友。

俺は、本当は里佳子のことをどう思っているんだ？この気持ちは一体何なんだ？

アイツの事を考えると何でここまでアイツの事が気になるんだ？どうしてなんだ？

もしかして…俺はアイツの事が？いやっ、分からない。俺には全然分からない。

「ただいまあ…」

気まずそうに須藤が百合奈と誠の元に戻ってくる。すると百合奈はさっきの見る影を落とし明るく振舞う。頬を膨らませて「プー」と言う可愛らしいが意味の分からない声を出す。

「もう、須藤君は臆病なんだから！そんなんじゃ詩に嫌われるぞ！」

「なっ！？何を言うんだ！福井！俺と前沢は別にそんなんじゃ！」

「ホントー？？？詩可愛いしスタイルいいしもっというイケメン君に持って行かれるかもねえ」

「又ワッ！？？」

「おいっ、2人とも大概に…」

「誠君も」

誠は自分の家に向かって歩いていった。コーヒーストップから飛び出

して早30分ほど。

百合奈に言われた言葉が彼の胸に突き刺さる。

“いつか、里佳子取られるかもだよ？？”

……。

「ただいま」

いつか、里佳子取られるかもだよ？（後書き）

ここだけの裏話。

？当初、里佳子がコインロッカーに預けていたのは赤ん坊の予定でした。

しかし、赤ん坊より今の方が面白いかな？と思って万引きの商品と言う設定にし直しました。

？須藤と前沢は元々別の話で主人公にする予定でした。

しかし、その別の話と「ロッカールーム」の内容が被るのでその話は没にしました。それで、こちらを書いていく際作ったキャラクタ―使いたいなあと思って

登場させました。

前沢「で、私がヒロインになる可能性はあるの？作者さん」

ワタナベ「ウツ、そりゃあですね…」

前沢「詩ちゃん、こんなに可愛いんだし存在感だってあるし」

ワタナベ「…、次回お楽しみに！サラバ！」

前沢「あつ、こら待て！」

終業式

自分のベッドの上で誠は物思いにふけ百合奈に言われた言葉が心に引つ掛かり里佳子の事を考えていた。

時間は既に12時45分。

里佳子を取られる…、か。そんなこと今まで一度も考えたことなんて無かった。

考えてみればあいつと出会ってまだ1ヶ月くらいしか経ってなかったんだよね…。でも一度だって忘れた事なんてない。それ位、俺の中であいつの存在感は強いのだろうか？

“私の名前は里佳子だよ？誠”

勝手に下の名前で呼ばれ（しかも呼び捨て）俺もその空気に圧倒され一度は破断になり掛けたもののちゃんと修復した。それは何故だろうか？俺の元から彼女が離れるのが嫌だったから？

「む？メールか？」

真っ暗な彼の部屋で1つ、発光しながら音を鳴らすケータイ。手に取って差出人を確認する。

そこに表示されていた名前は“沢 里佳子”。里佳子からのメールだった。

夜分遅くにごめんなさい。起こしたらゴメンなさい。

「うう丁寧…」

ごく丁寧なことにその一文からメールは始まっていた。そして寝てい

たらと言う想定の記事まで。

これぞ、里佳子クオリティ。前沢や百合奈や須藤なんかでは出来ないことだ。さて下を読んでみるか。

明日から冬休みだね。クリスマスだって近いしどこか一緒にデートとかしませんか？

「デート…」

それが夜遅くにメールを送る内容にそぐう内容なのだろうか？疑問を浮かべつつ更に下にスクロールを続ける。前の文章に呆れても尚、スクロールを続けるのは彼女の事が気になるからなのか？

もしよかったら終業式に日にでも誠のお家に遊びに行ってもいいですか？

「ナツ…」

勝手かも知れませんが何卒ご協力の程を…。

沢 里佳子

「あの野郎…、しかも明日の話…いやっ、今日の話か」

デジタル時計が示す時間は1時17分。今日行われる終業式の開始時刻は確か午前9時。今から約8時間後。

その後はお約束の通知簿の返却と宿題の説明。後は冬休みの過ごし方。小学生じゃあるまいに。

それらを終えた後に里佳子は俺の家を訪問していいかと尋ねている…、喜ぶべきことなのか？

多分喜ぶべき事なのだろうと思う。取られるなら先に取ってやろうじゃないか。

何でこんなにむきになる？何で里佳子に対して俺はこんなに躍起になるんだ？

別に構わないけど…、男の家だつて言うこと忘れるなよな。

久瀬 誠

うん。

沢 里佳子

「それじゃ、通知簿の返却をする。出席番号順に取りに来い」

そう言われるとクラスメート達が次々と教卓の前で担任の藤枝から通知簿を貰っては唸ったりしている。

誠も通知簿を受け取るとすぐに席に戻って成績を確認する。クラス順位2位。案の定1位はアイツだろう。

「やっぱ、里佳子が1位か。敵わないな。だつて2年順位だつて1位だもん」

前に里佳子にキレられた陽菜と唯が里佳子の通知簿の成績を見て彼女の事を褒めちぎっている。

「そんなア。褒めすぎだよ」

「逆に褒めるしかできないよ。あつそういえば里佳子って大学？就職？」

「……、うん決めかねている所……」

里佳子？どうしたんだ？そんなに悲しそうな顔を浮かべて……。大学か就職か悩んでいるのか？

「うひゃあああ！お袋に叱られるぜ！！！！」

「うわああ…、康博ちゃん赤点3つもあるよ？どーすんの？」

須藤、お前は徹底的に数学を叩きなおす必要があるな。よし今度しつかり教えてやる。足し算から。

百合奈の方は…。心配無さそうだな。

「それじゃ、冬休み。風邪やインフルエンザなんかにならない様に号令！」

「起立、気をつけ、礼。ありがとうございました」

「やつほう、やつと解放される！」

「なあ、帰りにカラオケ行かね？」

「バア力。まずゲーセンだよ。新台投入されたいしな」

「マジか。ならそっちが最優先だな」

あちこちでこれからの行動を立てて帰っていくクラスメート達。誠の予定は当然…。

「行こか？誠」

「おう…」

今年のサントは…。

「……………」

誠は黙り込んでいた。彼は基本的に沈黙とかは苦手な人間なのだが、この場合黙り込む以外することが彼には出来ない。しかも電車の中と言う状況も相まってその光景を誰も不思議には思っていなかった。ここまで学校が遠くなると同じ学校の連中は誰もいない。自分と…、もう1人を除いては…。

「……………」

実に不思議な光景が展開されている。いつもならいつもなら1人で座っている筈の各駅停車の電車のロングシートの隣に自分の女友達の沢里佳子がぎゅうぎゅうに詰めて座っているのだ。別に満員ではない。

むしろ、スペースは空かすかで言い過ぎるとロングシートでゴロンと寝る事だって出来る位空いていたのだ。人が言う程いないのは平日の午後しかも真昼だからだろう。

大人たちはそれぞれの職場に働きに出るか家でゴロゴロ寝転がっていたりしているのだろう。

「ねえ…、何か喋ろうよ？ね？」

「おう…」

こここの所、誠の顔が赤くなるのが日常茶飯事になっている。今までそんなことはこれっぽちも無かった。

これは里佳子とよく会話をする様になったのが一番の原因だ。

彼女と関わるようになってから彼には自然とクラスメートと溶け込める能力が身についた。

もちろん、まだ一度も話したことの無いクラスメートだって何人もいるが少なからず須藤や前沢。果ては百合奈とまでもいつの間にか仲良くなっていた。それまでは鬱陶しいと思っていた百合奈が今では結構良い仲になって来ているのだ。

「ヘックションっ」

「アレ？風邪ですか？福井先輩」

「誰か、私の噂でもしてるのかねえ？」

「何か、誠の家に行くんだって思うと私ドキドキしちゃうなあ」

「そっ、そうか？」

「うん。ねえ誠も同じ感じだった？」

「えっ？」

突然質問を振られて一瞬だけ戸惑う。同じ感じだった？瞬間的にはその意味は分からなかったがすぐに質問の意味を理解する。ドキドキしたか、だ。里佳子の家に行った時に…。

「そりゃあ…まあするだろ」

「やっぱり？」

「当たり前だろッ。女子の家に行く事すら初めてだったって言うのに…」

「“って言うのに”？どういう意味かな？それは？」

「えっ？」

「私に何か特別な意味でも持っているの？」

「アッ…、カアア…」

誠1人でその場で悶える。意識せずに言っただけなのに食べ付けられて質問されている。困っている。

どう答えればいいのか困っている。どれが正しい答えなのか困っている。兎に角困っているのだ。

「ホラッ…、もうすぐ着くぞ…駅に」

そう言うすぐに立ち上がった扉の前でピタッと止まって扉が両方に開くとそそくさと出て行く。

その後を里佳子が「ちょっと待ってよ」と言いながら必死に追い

かける。誠はそれを見視。

改札口を出ると里佳子も買っておいた切符を通し誠を捕まえる。

「ハア……息切れたア……」

「お前のせいだろ？自業自得」

「何を言うのかね！？気になることを聞いて何が」

「行くぞ。昼飯が食えなくなる。食う気力が無くなる」

「だから、待つててばあゝ」

そんなことがあつて里佳子はその質問をせずに別の話で1人だけで盛り上がった。

自分達の陸上部の顧問の愚痴、大会の苦勞、友達、家族……その他色々話をしては盛り上がった。

彼女の笑顔は非常に輝いていた。彼女と関わり合うまで見たことのなかった眩しい笑顔。

ちょっとした役得だ。

里佳子から周りの景色に目を移すともう家の近くまで近付いていた。所々生えている木はすっかり枯れて

冬支度を済ませている気がほとんどだ。中には枯れ葉が残っている木もあったが長くは持たない。

住宅街に入りたまにサンタクロースの電飾を飾っている家もあった。考えてみればもうすぐクリスマスだ。クリスマスのサンタクロースの存在をいつまで信じていたっけ？

今年は、どんなプレゼントだろうって期待したっけ？来年も来るかなっていつまで信じていただろう？

「ねえ、後どれくらいで誠の家につくの？」

「……………」

今年のサンタは……。

もうすぐだよ。

今年のサンタは…。(後書き)

投稿が遅くなってすみません…。

女の泣いた顔なんて見たか無いから…（前書き）

近頃、更新が遅れてすみません。何せ学校が忙しいもので・・・。

女の泣いた顔なんて見たか無いから…

「へえー…、結構大きい家なんだね」

「なあに、親が無理して建てた家だよ。理想が高いんだから。俺の親」

「親…、親ねえ…」

里佳子がそう小さく呟くとちょっと寂しげに俯く。その様子を見て何か話しかけなければいけないのか？と色々と試行錯誤する。

「なあ…」

「ん？何？？」

必死に考え抜いた言葉の先頭の“なあ”を彼女に話し掛けた時ふつと顔を上げて明るそうに里佳子は振舞う。その顔を見た途端に話し辛くなつた。そんなに明るい顔を見せられたら話し辛いじゃないか。

「な…、なんでもねえ」

「そう？？話した気だけど？」

「もういいだろ」

それだけを言うとう自分の住み慣れた家の玄関に近付いてポケットに仕舞っていた鍵を取り出して次々鍵を開ける。

『そつえば今日は遊里も終業式だったよな…』

鍵を開けると玄関扉を開けて里佳子を招き入れる。ほらつとばかりに手で招く。

「私は、犬じゃないよつだ」

歩きながらばやいた声は聞かなかった事にしよう。学校であれほど追いかけて置いてなにか“犬じゃないよ”だ。犬は凄くマシだ。犬なんぞチーター（学校での里佳子）にすぐ食い殺されるぞ。

「ただいま」

そう言つたはいい物のそれを返してくれる家族は誰もいない。両親はいつもの様に仕事。遊里は多分…、部活（ソフトテニス部）か友だちと何処かで油でも売っているのだろう。まあ都合がいい。あい

つに見つかつたらどう責められるか溜まったもんじゃない。絶対こ
う言つと思つ。

“誠が彼女を連れ込んだ!”。100%そう言われる。そういう性
格だから。

「お邪魔しまーす」

遠慮がちに玄関からひよつことウサギみたいに顔を出す里佳子。ど
うも家に入る勇気が無いみたいだ。

「入れよ、厄介な家族はいないから」

「あつ、はい」

いつもならタメ口な彼女も今回ばかりは他人の家の敷居を跨ぐ事あ
つて丁寧語になっている。

実に礼儀が良い。百合奈や前沢だつたら多分ズカズカ入ってくる…

…。

いやっ前沢はまだ礼儀があるから省こうとしよう。彼女の牛乳飲み
仲間の須藤の方がズカズカ入ってくるだろう。実質人の領域に勝手
に入ってくる奴だし。

「へつくしょん!」

「ありや、康博ちゃん。鼻風邪?」

「誰か、俺の噂でもしてんじゃねえの?」

「うわあ、リビング結構キレイ。インテリアも好みだなあ」

見慣れない光景だ。絶対見慣れない光景だ。同級生の女子が見慣れ
たはずのリビングでインテリアを褒めているのだ。実にミスマッチ。
誠はいままで学校の同級生を家に誘ったことなんか一度も無い。

ましてや相手は女子だ。しかも、高校入学当時からちよつと気にな

つていたから余計にだ。

「このインテリアって、誰がやっているの？お父さんとか？」

「いやっ、俺の妹の遊里だよ。遊里の奴やけにセンスあるから両親が公認しているんだ」

「へえ兄妹いるんだ、羨ましいな。私一人っ子だから」

「兄貴つてのも中々の苦労人だぞ？いろんな期待背負い込まなきゃいけないからな」

「フーン…、そういうもの？」

「そういうもんだよ。世界中の長男、長女の苦労は凄まじいのさ」
「私も一応長女んだけど…ね？」

そう言くと里佳子がちよっぴり笑う。それにつられて誠もホンのちよつとではあるが口元が緩む。

すると、また里佳子が笑う。大声を張り上げて。

「ど、どうしたんだ？」

「らっ、らっれ、誠の笑う顔初めて見て…可笑しくてエ…、あゝ…
…息できにゃーいッ」

「お前…、なあ？」

「えっ？なにかな？」

ポケットからそつとハンカチを取り出して里佳子にそつと手渡してそれをぎゅつと握らせる。

「涙拭け。そのっ…、女の泣いた顔なんか見たか無いから…」

「ブッ！……！」

さつき、涙目になりながら笑っていた里佳子が今度は大きく嘖き出した。そして更に泣き笑い。

「な…、なんだ？」

「台詞…、小恥ずかしいすぎ！」

チキショー。揚げ足を取られてしまった。チキショー。

「……、あの……」

そう声を掛けたのは誠でも里佳子でもない。そのどちらでもない人物は実に気まずそうな表情を浮かべながら頬をポリポリ指でかいて
いる。肩からテニスラケットの入ったバッグを提げて…。

「あっ」

おかえり、遊里…。

ただいま…。

ブラコン？

現在の久瀬家のリビングは以下の説明の様な状況になっている。

リビングに設置されているソファに誠と里佳子が隣同士で座りその向かい合わせに私服姿（着替えた）の遊里が座っている。遊里は腕と足を組んでなにやらイラついた様な表情を浮かべている。

そんな彼女に、この状況の発端となった誠も里佳子も話しかけることなど出来ない。

「で、どうして誠は女の子家に連れ込んでいるのかな？誠から」

「イヤッ…、こいつ（里佳子）が家に上がらせてくれって言つから」「本当？」

嘘はついていないぞ？むしろありのままを端的に分かり易く話したつもりだぞ？いやっ違う。

それ位しか伝えられることなんかあるはずが無い。家に上がらせてくれとしか言われてないのだから。

誠がそう所々どうでもいい事を織り交ぜながら思考していると、遊里の次の質問に答えるのは里佳子の番になっていた。相変わらず遊里の目は笑っていない。里佳子も何処かオドオドしている。

もし、この場にブラックリ佳子が現れてくれるのなら何人でも来て欲しい。

「で、そのクラスメートの人。名前は？」

「沢 里佳子ですけど…」

「里佳子、落ち着け。相手はまず年下だ」

「誠は黙って。てか自分の部屋入ったら？私は里佳子さんと話しているんだから」

「おっ、おう」

負けた。実の妹に空気…、つまりは威圧感に負けた。いつもなら負けるはずのない遊里との口喧嘩に負けたのだ。里佳子の方に目をや

ると“行かないで”と言わんばかりの上目遣いをしている。止めてくれ。

上目遣いだけは反則技だから。あっー！上目遣い＋涙目と来ている。これはもう…、耐えられない。

「んじゃー、言われた通り自室にこもる！」

「ああ、誠お…」

そう言ったのは里佳子。しかし誠の耳に彼女の声など全然聞こえていない。里佳子としては助け舟を出して近くにいて欲しかったのだろぅが誠にとってはそれはこの状況から逃げ出す為に起爆剤になったのだ。

なってしまったのだ。

階段を一気に駆け上がる音を里佳子と遊里はリビングで聞いていた。次第に里佳子の頬が膨れる。

「誠のバカ…」

「プツ…。やっぱり里佳子さんもそう思う？」

遊里が突然笑い出す。さっきの威圧的な態度から一変して彼女は満面の笑みで笑っている。

「えっ？えっ？？」

その変化しすぎた状況に里佳子もついて来ていない。ついて来れていない。

「えつと？あれ？」

「誠がいるとさ、話せないでしょ？色んな事さ」

「えつと…、えつ…？？？」

「まずは…、最近誠ね、よく笑う様になっただんですよ。そしてよく話すわけですよ。良いダチが出来たって…。しかも凄い自慢げに言うから」

「へっー、でもそれって私以外にもいるんじゃない？」

「それがそれが…、どうもその背後には女の香りがする訳ですよ？」

「はい???」

里佳子はこの時自分が目にしている友達の妹の驚異的な嗅覚(?)に驚いている。

いやっ、嗅覚は間違いでもその考察力は目を見張るものがある。

「誠の話を聞いている限りどうも男友達とは考えにくい…、だって友達の家に上がって『ドキドキした』何て言っていたから」

「はっ、はああ…」

「そして、今のこの状況から察するにあなたがその“友達”ではないのかな?と踏んだわけです」

「えっと??」

「ぶっちゃけた話、里佳子さんって誠の…、その…」

遊里の顔が次第に赤くなり次第に声も小さくなっていく。

彼女さん…、なの?

「えっ!???」

遊里の恥ずかしくなるような質問に里佳子も便乗するかのように顔を真っ赤かにする。青森りんご並に。

そして里佳子は平静を取り戻して冷静に考え始める。

『誠が…、私の彼氏って…、全然考えたこと無かったけど今改めて考えてみると私は誠の事をどう考えているのかな?あっ!今考えると私結構色々と告白的なこと誠の前で言ったりやったりしているじゃない!』

再び、里佳子の顔が赤くなるとそれを見計らってか遊里が里佳子に優しげに話し始める。

「まあ、兄である久瀬 誠は結構純情でその…、なんつーか子ども

っぽい訳よ。だからさそんな子どもの“保護者”が妹である私の役目だったんだけど…」

するとポンツと里佳子の肩に手を乗せる。その姿を見て里佳子はちよつとだけ身構える。

「譲ります。譲ってみますね。里佳子さん」

「えっ??」

「誠の保護者になって下さい。里佳子さん」

「エツ…、うん…」

里佳子の肩から遊里が手を離すとソファから立ち上がって大きく背伸びをして欠伸もする。

「はぁ、スッキリしたツと」

「エツと…」

「遊里ですよ？私の名前」

「うん…、遊里ちゃん。妹の君から聞きたいことがあるんだけど」

「うん??」

「もしかして…、ブラコン??」

「なっ!????」

階段の陰に隠れて2人の会話を盗み聞いていた誠は軽く一安心する。

『仲良くなって良かったなあ…それで…』

ブラコンだったのか？遊里のやつ。

土下座と合掌

遊里のお説教（？）を終えたかと思うと里佳子は頬を膨らませながら誠の“城”に侵入してきた。

もちろん、ノックはしてから入ってきたが遊里以外で誠の部屋に入った人間はいないので侵入には違いなかった。身内である両親も入ることを許されていない誠の部屋に赤の他人の里佳子がズカズカ上がりこんできたのだ。何故頬を膨らませているのかは分かっていると思う。あの遊里との修羅場に誠に置いてけぼりにされたからだ。プクツと河豚の腹みたいに膨れた里佳子の頬を突いてみたいと言うどうでもいい事を考えていると彼女は急にベッドに座り込んで足を組む。相変わらず頬は膨れている。

さすがにこの沈黙は気まずい。何か話そう。

「えっと……、里佳子？」

「“さん”をつけるよ、デコ助野郎」

これは世の言う、ボケと言うやつなのだろうか？それともあの有名なアニメ映画の台詞を引用したのだろうか？どっち道ボケに間違いはないだろうが一言言わせて貰おう。

「俺は、ハゲてない」

「ふーんだ」

すると、今度は足を組んだままプイツと漫画のヤキモチ妬きの女の子みたくに顔を背ける。

彼女の行動で更に凹み、自然と誠の体勢は土下座の形に自然となっていく。そう意識しないままに。

尻に敷かれるタイプである事が里佳子の眼前で明白になった誠だったが今はそんなことを考えている余地など彼には残されていないかったのだ。

「申し訳ありませんでした！」

「……プツ」

土下座しながら謝っている姿を見て微笑した。声をちよつとだけ出して笑うと足を組むのを止めてベッドから立ち上がって土下座を続けているこの部屋の主に顔をそつと近づける。

「むっ？」

むつと声を出したのはこの部屋の主。では何故むつと声を出したのかと言えば里佳子に頭を撫でられたのだ。しかも優しく頭を現在進行形で撫でられているのだ。それこそペットの犬や猫みたいに。そして、自分の頭の頭頂部を撫でているクラスメートの女子から止めの一言が下る。

「可愛いなあ。誠は」

「！??？」

その途端に全身の筋力が抜けて骨抜きにされるがごとく床にへたり込む。その様子を見た里佳子の口元がまた緩む。「ふふっ」と笑っているのかよく分からない声が耳に届く。

「ほらっ、起きたらどうだね？久瀬誠君」

「フツ…、何を言うかな？同級生の沢里佳子」

へなへな立ち上がる誠の背中に頼りになるものなど微塵も無い。それ位打ちのめされていたのだ。

「男の子の癖に、何か頼りないなあ」

「誰のせいだと思っっている！」

別に怒っている訳ではない。イライラしているわけでもない（ちよつとはあるが）。諭しているのだ。

誰のせいで自分の精神がどれだけズタボロにされたのか？と。

「ムッ…」

「……………」

「自分で自分を傷つけた？」

「テメエわざとボケてやがるな!？」

すると、誠の目の前で里佳子は合掌し頭を下げ、自慢のサラサラの

長い髪は下に全て垂れる。垂れたかと思うと急に顔を上げて誠と視線を合わせる。

「ジョーダンだよ？ねっ？」

でた。可愛い女の子の秘密兵器“上目遣い”。おまけに合掌と来ている。

「…………怒る気になり辛くなったじゃないか……………」

「うんっ」

「でっ、何で急に俺の家に上がらせてくれって言い出したんだ？」

「えっ？」

「だって、一応俺達年頃な訳だし……」

すると、そっと俯き黙りこくる。一体里佳子と出会ってから沈黙はどれくらい体験しただろう？

少なからず50回くらいは体験したのではないのだろうか？実質さっきのだって沈黙だった訳だし。

短い沈黙が過ぎるとむくつと俯いていた顔を上げて急に話し始める。

「えーっとな？」

何か照れくさそうに指で頬をポリポリ搔いていると意を決したのか「話すよ」と誠の前で宣言する。

「私ね、親との生活した記憶があまり無いんだ。出張ばかりで。ずーっと独りぼっちだったんだ」

「ああ、前に言っていたな」

「うん。それで親に反発したくて万引き始めたのも話したでしょ？何も言わずに軽く頷く。

「それで、同い年の男の子と付き合い始めたの。傍に誰かいてくれればそれで良いって。でもソイツがとんでもない奴で。私と付き合いうために付き合っていた女の子振ったんだよ？信じられる？」

「んにゃ」

「で、またこれが信じられない展開になっちゃって……。恥ずかし

い話…。私妊娠してたの…」

「ハアアア！？お前それマジかよ！？？？」

「シッーーーー！声大きい…！」

人差し指を口元で立てて静かにするようにアピール。つられる様に
誠も自分の指を口の前に付き立てて静かにするとアピールした。

里佳子の話し声は徐々に小さくなっていった。

大晦日

ソイツとは？

赤ちゃんできたって言ったら何処かへ行っちゃったんだ…。

体操座りを作る里佳子の目尻から涙の粒らしいものが見えたが彼女の顔がうずくまり里佳子の顔が見えなくなる。それ以上深読みしてはいけないんじゃないか？と思いつながらにも誠は質問を止めない。

なぜか、その時の彼はどこか熱心だった。滅多な事では熱くならない誠がだ。

それで、その赤ん坊はどうしたんだ？

下ろした。どうしようもなかったんだ…。親にも相談できないから…。

「……………」

「ごめんね。暗い話題で。なんか帰りたくなっちゃった。駅まで送ってくれるかな？」

「おう…」

大晦日。

『里佳子…』

リビングルームのソファの上で寝転がっていると突然エプロン姿の遊里が誠の顔を覗き込む。

顔を近づけられると誠は寝転がるのを止めて改めてソファに座る。

「どしたの？誠」

「んにゃ、考え事さ」

「フーン…、里佳子さんかね？」

「他に誰がいるんだよ？」

「ありや、否定しないの？珍しいねえ。前だったら顔真っ赤にして否定してたのに」

「いいだろ！別に……」

このままでは遊里の誘導尋問に耐えられなくなってしまう。話題を逸らそう。それでもしない限り何を言われるか分からない。でも何がある？この家にいるのは誠以外は遊里しかない。2人だけ？

「……そういや、今年は年越し親父達はとうすんだよ？」

逸らす話題がその場で思い浮かんだ。中々上出来ではないか。この時ばかりは家を留守にしている両親に感謝する。両親に感謝しているとおもむろに両親の事情を遊里が話し始める。

「お父さん達は相変わらずって感じで仕事だって。お母さんは友だちと旅行だって」

「普通子ども置いて年越し迎えるかよ？親が」

「いいじゃん別に。兄妹水入らずって言うじゃん？」

「そう言うか知らんが……、そうだ。そば食ったらお参りでも行くか？」

「おつ、いいねいいねつ。リング飴とか食べよッ」

「おいおい、お参りだぞ？リング飴とかでお参りの金使い切るのがオチだぞ？」

「はいはい。さあそば食べるから早く食べちゃお」

「おうつ。あつショウガは用意してくれてるか？」

「もちろんですう」

そばを食べ終わると防寒対策をバッチリして家を出て鍵を閉めると遊里に促がされるように歩きが早くなる。行くのは近くの神社だ。それなりに大きいのだが普段はあまり人はいないがやっぱり年末年始は人が多くすし詰め状態と言言葉がぴったりだ。

「凄い人」

「そりゃ、年末だもんな。手離すなよ」

「分かつてるよ」

次々と人が入れ替わりに出て行ったり入ったりと冬だと言うのに実に暑苦しい。遊里が誠の腕をがっちり掴んで全然離そうとはしない。実際離れたら絶対迷子にはなるのだが。

「誠。後どれ位で着くの？」

「あと、1分も掛からないよ。ほら見えたる？」

「あつ、本当だ」

賽銭箱がすぐ目の前に登場し鈴と繋がっているしめ縄が垂れている。兄妹が横に並んだところで誠と遊里同時に小銭を賽銭箱に放り投げて鈴を鳴らす。そして合掌してお願い事をするポーズ。

それを終えるまで30秒も掛からないがその30秒がこの時ばかりは長く感じる。お願い事を考えるからだ。そして、一度思いつくと次から次へとお願い事が思いつくのだ。

「ねえ、誠は何をお願いしたの？」

「教えるかよ」

「フーン…」

「あつ」

あつと行つたのは誠ではない。誠の存在に気付いた誰かが声を上げたのだ。声の主の方に顔を向けるとそこには見覚えのある顔が立っていた。

「おう、前沢か」

「本当に私たちつてよく合うよね。何かの縁？」

「……………」

誠の腕にぎゅっと締め付けられる感覚が襲う。遊里が強く締め付けたからだ。

「あらつ、もしかして“彼女”とデート中だった？」

「違うよ。妹の遊里」

「…、こっこんばんわ…」

「はぁーん…。なーるほど」

「遊里。コイツは俺のクラスメートの前沢」

誠に紹介されると前沢は遊里と視線を合わせて自己紹介を始める。

「こんばんわ、久瀬君のクラスメートの前沢詩よ。よろしくね」

「よっ、よろしく…」

「むっ…。中々可愛い妹さんじゃないの？久瀬君」

「そうか？」

「そーだよ？なんか小動物みたいで…。あっ兄妹水入らず邪魔しちゃってゴメンね。私行くから」

「おう…」

そう言い残すと背の高い目のクラスメートの女子は人ごみの中へ姿を消した。

「誠…」

「おう」

「リンゴ飴…、おごってよね？」

「分かってるからよ…」

初詣

正月一日。

昨日（正確には今日）の夜に妹の遊里とお参りに行ったことが災いしたのか。今朝は酷く寝不足だ。

朝日が窓のカーテンの間をすり抜けて誠の顔に直接刺さる。眩しくまぶたを強く閉じても明るい。

試しに目をこすって見る。目やにが取れる感触はあったもののそれで眩しさがどうなった訳ではない。

仕方無しに起き上がってカーテンを勢いよく開放しきる。窓には結露で出来た水玉が出来ており一部は

凍っていた。正月早々この寒さは厳しい。室内の結露が凍るほどの寒さは想像したくもないし出来ない。こういう日には一日中家にこもるのが一番だが遊里にどやされる可能性が高いのでこもるのは止めよう。なら、どうしようか？ここはベターに初詣でしやれ込むべきだろうか？

しかし、一人で初詣は寂しい気もする。誰かを誘うか？それとも、やはりここは以前みたいに一人で行くか実に悩み所だ。1年生の時だったら構わず1人で行くことを選択しただろうが今では1人で行く事に疑問を持つと言う変わり様に彼自身は気付いていない。

「里佳子…、ちょっと気まずいか…」

色々と試行錯誤をしていると誠のケータイのバイブが細かく振動する。メールではなく電話の様だ。

相手は一体誰だろうか？着信相手の表示を確認する。

“福井百合奈”

「あいつかよ…」

仕方ないここは一つ電話に出てやろう。出ないとまたカラオケの二の舞になることは見え見えだ。
決定キーを押して応対する。

「もしもし？」

……。

……。

「でっ!？」

「なになな？」

「誰が悲しゅうてお前なんかと初詣をしなきゃならんのだ？」

「いいじゃん。誠君と最近話してなかったし」

「カラオケ以来か？」

「うん。私の自慢の声、聞いてもらえたかね？」

「ああ、あの低周波騒音」

「せめて、高周波といって欲しかった…」

「悪い…、半分冗談だ」

「半分本気!??」

現在の状況、鬱陶しい同級生且つ騒音メーカーの福井百合奈と初詣に赴いている。それ以外の友人はいない。彼女の話によると里佳子は親子水入らず（帰国したらしい）、須藤は補習の宿題、前沢は正月旅行で不幸にも誠だけがフリーだったと言っわけだ。

そして、現在百合奈と屋台が並ぶ道を通り抜けて人が群れている神社の境内にいますと言っことだ。

遊里とお参りに行ったことを思い出す。

「デジャヴ」

「何か言った？」

「別に？さあ、賽銭箱だ。願い事願い事」

鈴をからから鳴らす音が耳に入り昨日と同じ容量で合掌する。隣で合掌している百合奈の顔は…真剣だ。

賽銭箱を横から抜けるとおみくじを売っている巫女さんを百合奈がロックオンする。間違いなく…。

「200円になります」

「はい」

誠は基本占いなどは信じない人間だったので買いはしなかったが百合奈は予想通り購入した。

購入するなりその中身を間髪いれず確認する。

「どうだ？」

「す…、末吉…」

「おお、それはまた微妙なやつを取ったもんだ」

「あううう」

萎えている。百合奈の顔が物凄く萎えている。目が細目になり今にも泣き出しそうな顔付きをしている。黙読を終えると彼女の顔は余計に萎える。

「リアル萎えてる顔は初めて見た」

「それ…、褒め言葉でいいの？」

「自由だろ？安心しろ。何か奢ってやるから」

「…、本当？」

「今日は気分がいい」

「じゃあ…」

そう言つとさっきの巫女さんの方向に目を向ける。

「もう一回…」

「それ以外だ。おみくじは一回だろうが…」

小吉・ヤキモチ・大凶！

「むむむむむむうう」

「…、どうだった？」

小吉さね…。

「だから、言わんこつちゃねえんだ。おみくじなんて1日1回がベストなんだよ」

『まあ、俺が買ったやつだから実質俺が“小吉”なんだが…、黙っておこう…』

「あううう…、ねえ…」

「さて、おみくじなんかよりイカ焼きでも食うとするか」

「あつー！ー！読まれた！」

百合奈はちゃんと神社の境内におみくじをしっかり結び付けると誠の後を追いかける。

ギリギリ見えるか見えない位の距離感を保ち、人ごみを抜けるとすぐに誠の腕にしがみついた。

「あつー、圧縮されると思った…」

「そりゃこんな人混みじゃあな」

高校生にとって初詣と言うのは短いものでは30分も満たない短さで終わるのがオチと言うものだ。この後の高校生の起こす行動の大半はカラオケか、ゲームセンターで時間をもてあそぶ。

暇な人間は、色々な神社をお参りしては屋台めぐりをする者もいる。誠は…。

「ねえ！カラオケしよーよ」

「1人でやってろ」

その暇人間の部類に属する。そもそも人とのコミュニケーションが苦手な彼にとって無機物である建物を見るのが自然と好きになっていたのだ。建築に興味を持つている訳ではないが有機物である人間に比べれば何倍も楽でいい。相手のご機嫌を取る必要も無い。そもそも話しかけても来ないし話さなくてよい。

「聞いてるー？」

「いいや？全く」

「本当に失礼な…。いいかい誠君。女の子相手に話す時は“聞いてなかった”はNG！なのだよ？分かる…訳も無いか…」

「今、物凄く失礼な感じがした」

「それで、お父さん今度はいつ出るの？」

「今年は、6日までこっちにいれるぞ？里佳子」

「本当？だっていつも“今年は7日”って言うっておきながら“悪い。3日までだあ”なんて…、笑えないよ…」

「いや。いつも独りぼっちにして悪いと思っているよ…。誕生日も祝ってやれないしな…」

「…………、ところでお母さんは？」

「ああ、なんでも友だちと食事だそうだぞ？」

「たく。可愛い娘と久しぶりの再会を」

呆れた口調で話すとテーブルから席を立ち自分の部屋に入る。

そして、お馴染み（？）の体育座りを決めると自分の顔を埋める。これは昔からの里佳子の癖で寂しいときや構って欲しいときはよくこうしていた。ただ、人前では誠くらいしかやったことが無い。

『今頃、誠どうしてるかな？何か寂しいな…』

「よしっ、こっという時は電話だ…」

と、卓上型の充電器からケータイを外すとメールを打ち始める。相手を“久瀬誠”と選択し本文の内容を打つ事にした。メールの内容は…。

「……、どうすればいいんだろ…？今は家にお父さんいるし…、多分百合奈と初詣とか行っているんだろ…？ってあれ？」

なんかモヤモヤする…。なぜかは分からないけど百合奈と並んで歩いている誠を想像するとモヤモヤ…、まさか…、これって？

「ヤキモチ？？百合奈に？？」

電源ボタンを押してメールを打つのを止めて充電器の上に置くとそのままベッドで寝転がる。

「ハア…」

深くため息をついてケータイの方をチラッと一瞥する。その後は天井を見続ける。

「何やってんだろ？私…」

そのまま眠気に襲われていき、いつしか彼女は眠っていた。

その頃。

「うわぁ！？大凶出た！？？」

「神社変えても結果は同じって事か…」

始業式

冬休みと言うのは実にあつけない。僅か二週間ほどの休暇はあつという間に過ぎて今日は始業式だ。2年生は始業式を終えると修学旅行用の旅行バックを学校に預けて家に帰る予定となっていた。

「じゃあ、旅行バックは南門前で預けて解散しろ」

「はい」

誠やクラスメート全員が新年早々学校に大きな旅行カバンを肩にかけたりして教室を出て行く。

友達とスキーの話やご当地の食事の話題など話す内容は三者三様。誠も自前の青いカバンを肩にかけて教室を出ようとする。里佳子は…、どうやら先に行っただけらしい。須藤は戸川と檜山とで話している。

スキー滑れるか不安だよ。

案外滑れるものだと思うよ？ほらっ小学校のときスキー合宿あったでしょ？

北海道ついたらラーメンだよな！

まあ、トンコツとかしょーゆラーメンがベターかなあ？

その辺はその日に決めるとするか…。

結局話す相手などいない。元々人を寄せ付けにくい性格だったものがあるがそういう生活に慣れて何時しか違和感を感じなくなっていた。でもこの感覚は以前とは少しだけ違う。“寂しい”んだ。里佳子や百合奈、前沢、須藤と言った連中と絡む様になってから自然と笑うようになり1人だけとなる自然と寂しくなる様になっていた。

「里佳子…」

そういえば、今日一日里佳子と話した覚えが無い。冬休み中に会ったのは里佳子が家に訪れた時だけだったよな？どうしたんだろうか？考えてみればあの日以来メール一通も無かったよな…。

「誠？」

不意に耳元で声を掛けられた。噂をすればいうやつか…。学校内で自分の事を“誠”と君も付けずにそう呼んで来るのは一人しかないない。

「里佳子？」

「どうかしたの？何か考え事？」

「イヤッ…。それよりお前先に言っただんじやないのか？」

「ちよつと、藤枝先生に進路の事を相談しに行っていてね？」

「進路？お前確か“就職”にするとか言っていなかったか？」

「うん……………」

「里佳子？」

「ううん？なんでも無いよ？」

ちよつとだけ、里佳子の目が赤くなっていた様な気がした。

「はい。荷物はこちらに預けてくださいね」

「ねえ康博ちゃん」

「ん？何だ前沢か？どうしたんだ？？」

「最後の日の散策って確か班じゃなくて個人行動じゃなかったけ？」

「ああ。一応はな？でもどうして」

「一緒に回らない？」

「そいつはつまり？デートってか？」

「……………、やっぱ止め」

そう言い残すとさつさと南門から早歩きで学校を後にする。
「なんだよ。アイツ……」

「そういえば誠は？」

「俺も一応は“就職”のつもりなんだけどな……」
「いちおー??」

「正直悩んでいる。進学か就職で」

「フーン……。そっかそっか。ほらっ早く預けに行こつよ」

「里佳子？何だその不敵な笑みは」

「ベーーーーっに??????」

「康博ちゃん……。なんであー言う時は変に鋭くなる訳なのさ？鈍感の癖に……」

……………。

「コーヒー飲みに行こつと……」

始業式（後書き）

テストで更新が遅れてしまいました……

修学旅行

新千歳空港、

「うわぁ、本当に真つ白だ」

「滑走路が凍り付いているなあ」

「ねえねえ、写真撮ろーよ」

それぞれテンションをあげているクラスメートや他の組の同級生達。誠は須藤と横に並んで歩いていった。ちなみに誠の荷物は移動が楽な大きなポーチで須藤はリュックだ。

「それでよく来れたもんだよね…。久瀬君」

「そう大きな荷物なんて持つてくる必要ないだろ？持つて来るとしてもゲームとかトランプ位だし」

「へえ。久瀬君はゲームとかやるのか？」

「ああ、基本的にはしないけど面白そうなら奴は買う位だけ」

「ほほう。意外な一面だ」

里佳子たちは自分達のすぐ前を百合奈と前沢の3人トリオで何か楽しそうに話しながら歩いている。百合奈は時々手持ちのカメラで空港の様子とかを写真に収めている。

「へえ、詩つて北海道で生まれたんだ」

「そう。だから未だに『ゴミ投げて』って言っちゃうんだ。もう恥ずかしくて」

「そいじゃあこの修学旅行あまり楽しめなんじゃないのかい？」

「いやぁ、北海道のスキーは楽しみだよ。パウダースノーの上のスキーは良いんだよ。こけても怪我しないしね」

その前沢の暴露を須藤はなにやら真剣に聞いている。その姿を見て声を掛けることにしてみる。

「須藤、どうした？」

「いやっ、何でもないよ。ちょっと昔を思い出していて」
「ふーん???」

「寒ッ!!!」

そう叫んだのは当然のごとく須藤（赤点マスター）。他のクラスメートは叫ばなくても息を白くしたり、歯をガクガク震わせていたり寒がり方は人それぞれだ。

「それじゃあ、バスに乗りまーす。奥から詰めて乗って下さいねえ」
と添乗員さんに促がされてに誠のクラスが乗るバスに次々とクラスメート達がバスの中に乗り込んでいく。暖房がガンガンに効いたバスの車内は軽く蒸し風呂状態。さっきまで重宝していた暑苦しさうな上着を次々脱ぎ始める。もちろん誠も上着を脱ぎ隣に座った須藤も上着を脱ぎ膝の上にその上着を載せる。

「何か暑いなあ」

「そりゃ北海道の暖房だからな」

軽く須藤の言葉をあしらひ窓から見える風景をチラッと見る。まだ動いてはいない。雪は50センチくらい積もっている。除雪作業をしている重機をさりげなく凝視する。除雪をしている重機が作り上げた雪の山は大体1メートルくらいはあるだろうか？

「それで出発しまーす!」

添乗員さんの掛け声でバスのエンジンが掛かりバスが動き始める。

「皆さーん、こんにちは!」

「こんちわー!!!」

テンションがいきなりピークに達している男子生徒たち。それをちよつと呆れ気味に見ている女子生徒たち。誠のテンションはその女子生徒たち並みだったが…。

「私は今日皆さんの添乗員を担当させてただ来ます。沢渡です」

「下の名前は何ッすか!??」

「美雪です。美しい雪って書きまーす」

「おお、来たぞ美雪！」

「あはは、いきなり呼び捨てなんですね…」

美雪さんの舌は止まらない。楽しそうに学校の生活や文化の違いの話し、果ては恒例クイズ大会なるもので女子まで参加してほとんどの同級生が楽しんでいた。

「なんだよ、久瀬君！もっとテンションあげようぜ」

「まあ、お前達で頼んでくれよ。凄い眠たいんだ」

「ああ…、そういう事？」

「飛行機が久しぶりだったからな。ちよつと酔っちゃった。だから寝る」

「では、札幌に着きますよー」

「久瀬君。そろそろ着くぜ」

「ンツ…。分かった…」

目を軽くこすり窓から札幌の街並みを覗いて見る。緑色に塗装された札幌テレビ塔が見える。電光表示板には時計が表示されている。

「それでは皆さん。テレビ塔の麓で写真撮影がありますので私が降りた後に着いてきて下さいね。後今から上着を羽織ってくださいね」
「はい！」

修学旅行1日目

初日の札幌見学だがこういう場合、多少は観光し昼食を取りそのあとはゲームセンターに行ったりお土産屋に行くか、大抵はそれらどちらか二つに分かれるのが相場だ。班別行動と言う割には別の班と混ざったりバラバラに行動したりする。それが高校生の修学旅行の街並み見学の大抵の行動だ。誠の班は須藤、戸川、檜山の班だったわけだがそれはそれ誠を除く3人はゲームセンターに行きたがり誠の方は『どうにでもなれ』と投げやりな気持ちだった。

「うおお！さすが最新！飛び出すぜ！」

「檜山、協力プレイにするか？」

「そうだな…。そうしようか」

ちなみに集合場所は札幌テレビ塔前に午後3時。ゲームセンターに入ったのが2時10分。現在30分が過ぎて2時40分。どうも誠以外はゲームに夢中になっていて時間など気にも留めていないらしい。

「そろそろ、時間ヤバくね？」

「おっ、そうだな。そろそろ戻るか」

訂正する。時間の事は気には留めていたらしい。時間を合わせる為にゲームセンターで時間潰しをしていた様だ。

「行こうか、久瀬君」

「おう…。ちよっと急ぐぞ」

と、右手首に巻きつけている腕時計の針を見ながら4人はゲームセンターを脱出した。

「皆さーん！札幌見学どうでした？」

「短ーい！2時間じゃあ回れるもの回れないよー」

「北海道の女の子はレベル高かったぞお！美雪も！」

「あはは、ありがとねえ」

こんな会話がバスの中で展開されている。年上の人をしかもさつき会ったばかりの人のファーストネームを呼び捨てにしてかなり失礼にも思えるが、実際の所こう言う会話が現役高校生と若い添乗員との間に交わせる会話と言うやつだ。添乗員的美雪さんの方ももう扱い慣れているのか淡々と答えたりたまに出る「美雪は俺の嫁！」と言う言葉には「いままで私は何人の嫁になったんだろ？」と冗談を冗談で返すなどかなりベテランの様だ。

「ではですね。これから約3時間かけて皆さんが止まるホテルに行きたいと思います。私はですね…。これから前を向かなければならないので皆さんとはこれから一切話させーん」

「えっー冷たいよ」

「そうだぜ！美雪ちゃん」

「ごめんねー」

語尾に音符を出して美雪さんは可愛がつて断つてみるが益々男子達の“美雪コール”は暫く止む事は無かった…。

「うるせー…」

それから1時間後にトイレ休憩。その1時間後にトイレ休憩があるなど実に親切な休憩の取り方だった。誠は2回目のトイレ休憩でトイレを済ませると自分の席に座って結露が凍ったバスの窓から望まれる白銀の世界をボーっと見ていた。

「ねえねえ」

前の座席からひょつこと顔を出している女子が誠に話しかけてきた。聞き覚えのある声だし…コイツは…。

「ん？百合奈??」

「ほほう。遂に私のファーストネームを抵抗無く呼べるようになったかね。偉い偉い」

「何の様だよ？」

「んにや。明日のスキー。確か基本的には個人行動だったよね？」

「まあコースさえ外れなければな」

「そいじゃあ、里佳子や詩や須藤君と一緒に滑ろーよ！楽しいよ？きつと」

「お前は滑れるのか？」

「まあ一応は…。言ってももう3年も滑ってないしなあ」

「ほう。そいつは楽しみにしているよ」

「ソイツは…、失敗を？」

「それ以外の何がある？」

「やっぱりいい！！」

「皆さん。もうすぐホテルに到着しますよ。着いたら先生の後に着いて行つて下さい。私とはここでお別れになります。短い間でしたがありがとー」

「愛してるぜ！美雪！！」

「ありがとねー」

バスがスピードを落としホテルの前の駐車場に到着すると担任・藤枝が立ち上がってこれからの行動と諸注意を皆に聞こえる様に少し大きめの声で話す。

「これからホテルに入るんだが先に送っておいた大きい荷物がホテルの体育館で入館式をやるからクラス別に並ぶこと。あとそこに先に送っておいた荷物の受け渡しとスキー用ブーツのサイズ合わせがあるから荷物取ったらブーツのサイズ合わせをするように。ウェア類は部屋にオレンジ色の布袋があるからそこからセットを取り出してサイズが合っているか確かめる。もし合っていなかったら晩飯の

後にウェアを持って体育館に集合。一般の人泊まっているからうるさくするなよ。以上」

「はい」

「よしっ、行こうか里佳子」

「うん」

「須藤。早く出ろよ。俺が出られない」

「まあ待ってくれよ。こっちだって人の流れ見ているんだから」

午後6時30分。

修学旅行1日目終了。

スキー学校開講

修学旅行2日目、午前9時30分。

「では皆さん、おはようござます！」

「おはようございます」

スキーのゲレンデの下部で2年生全員がクラスごとに集合しその前には黄色いウェアを見たインストラクター達がスキー板はスノーボードを脇に置いて立っていた。スキー一日目は午前中はあらかじめ分けられたスキー・スノーボード班に分かれて軽くゲレンデを滑って練習をし昼食後は5時までフリータイムの予定。百合奈が昨日一緒に滑ろうといていたのはそのフリータイムの事だ。

「先生方からお話は聞いておられるとは思いますが午前中は皆さんの班の目の前にいるインストラクターの先生達が皆さんと一緒に滑り練習を行います。午後からはフリータイムと言う事なので立ち入り禁止区域には絶対に立ち入らないで下さい。木や鉄塔にぶつかったら命の保障は出来ません。ですので絶対に立ち入らないで下さい。立ち入り禁止区域はリフトの真下とゲレンデ両脇にある林です。その他は赤いゴム製のフェンスが張ってあるのでそれを基準にしてください。ゲレンデによっては他のルートと合流する場所があるので注意してください。その目印は黄色い布で『減速』と書いてあるので覚えて置いてくださいね。分かりましたか？」

「はい」

「では、皆さんの目の前にいるインストラクターの方の指示に従ってください」

誠たちの班は西先生と言う若いインストラクターで点呼を確認すると早速リフトに乗り込むように指示をする。最初に滑るルートはもちろん初級コース。勾配自体はそうきつくは無いのだが距離が長い

らしい。「皆さん。これから乗るリフトは4人乗りです。乗ったらすぐに安全バーを下ろしてください。降車駅で安全バーを上げてスキー板の先端も少しだけ上げてください」

「はい」

「では行きましょう。僕と一緒に乗る人来て下さい」

「はい」

リフトから見下ろす東京では味わえない白銀の世界。木には幻術的に雪がつきリフトの足元の雪は圧縮もされていないらしくふわふわと上に積もっていた。

「あれ？」

誠がふと右隣の林に目をやると林の間から何人かのスキーヤーの姿を確認した。

「あつ、また滑っていますね」

「言わなくていいんですか？」

「大丈夫。下で滅茶苦茶怒られますから」

西先生の言葉を聞いて誠以外の2人も一瞬だけ「ぷつ」と声を出して笑ってしまう。すると耳に機械音の聲が入ってくる。どうやらもうすぐ終点の様だ。

『まもなく終点です。手前の安全バーを上げスキーの先端を上げてお待ちしてください』

「では、降りますよ」

リフトから降りると白い雪が太陽に反射してゴーグルをかけていても眩しく感じる。西先生は降車口から見て左側に向って逆ハの字を作って進んでいる。次々とひよこの様に同じ班のメンバーが付いて行く。誠もその後を付いて行った。

ゲレンデの端で西先生は斜面に対して垂直に立ち西先生の目の前で

班のメンバーが横一列に先生と同じ様に立っていた。誠はちよつとだけ出遅れたので列の一番下端に滑り込んで横一列に並ぶ班の列に加わる。

「これで全員揃いましたね。それでは皆さん、僕の後に来るだけ一列に並んで滑ってきてください。上から順番に滑ってきてください。ある程度間隔が相手から次の人滑ってきてください。では行きま
す」

その掛け声を合図に次々と上から班のメンバーが滑っていく。

「お先に」

誠の1人前の知らない同級生が声を掛けて滑り出していく。誠も間隔を置いて一気に滑り始める。

「ぶはーっー!!」

「おっ、どうした福井? 凄い盛大にこけたな!」

「うるしえー!! わたしゃあ何年も滑ってないんだ!! 大体須藤君には言われたくない!」

「ふふっ、まアこれでこけてくれる仲間が出来たわけだ。安心安心」

「うっうわああ」

「里佳子まで…」

「ほう。沢も滑れないのか」

「だってえ…、スキーほとんど初めてなんだもん」

「へえ…、意外だねえ」

そこに里佳子たちの担当のインストラクターの先生が華麗な滑りで近付いてくる。

「君達、すぐに立てますか?」

「んにゃ…、板が突き刺さって…」

「ストックで板を外してください。沢さんと須藤君も」

「はいっ」

「はい…」

その姿を違う班で近くで集合していた前沢は少々呆れ気味にこけた
3人トリオの姿を一瞥する。

『何やってんだか…』

「前沢さん？聞いてる？」

「あつ、すみません！」

「凄いですよ、久瀬君。パラレルが使いこなせているじゃないですか」

「スキーは5歳くらいの頃からやっていたので…」

「へえ、それは中々ですよ。他の皆さんも大健闘です。今は…、1
1時ちようどですね。あと5本くらい滑ったらお昼にしましょう。

その後はお待ちかねのフリータイムですよ。ではさっきの要領で僕
の後に付いて来て下さいね。では行きまーす」

「はーい」

さっきの…、わざとでしょ？

午後のフリータイム。

フリータイムに差し掛かりそれぞれ知らない顔の同級生達がグループを作ってそれぞれ離散しリフトを乗り込み始める。誠も昼食とトイレを終えてゲレンデの看板付近で雪に突き刺しておいたスキー板とストックを抜き取りスキー板は右肩に担ぎストックは右手にまとめて運ぶ。

「おーいっ！」

手を振って誠を呼ぶ声がそこにあつた。バスの車内で誠とグループを作って一緒に滑ろうといってきた福井百合奈、その人だ。彼女の後ろには里佳子と須藤がすでに準備万端とばかりにスキー板をはめ込みストックを両手に握っている。あれ？一人だけ見当たらないことに気付く。

「前沢は？」

「詩は、あつたかい飲み物飲んでから来るって。場所は分かっていると思うよ」

「フーン…」

そう言くと百合奈から距離を取って里佳子の方に近付く。

「里佳子はどれくらい滑れるんだ？」

「それが全然なんだ…」

「ほっぺ赤いぞ」

「そりゃあ、私が滑った所風強かったしねえ…。恥ずかしい話顔からこけちゃって軽く霜焼けかも」

「それ…、危ないんじゃない？」

「ごめーん。遅れて」

「それ行つくぞ！」

そう掛け声を上げたのは百合奈。その掛け声と同時に彼女は進行方向に向って顔を雪に埋めて盛大にこけた。途端に里佳子、前沢、須藤の笑い声が聞こえる。

「何だよお前！綺麗にこけて！」

「うるへえ！！」

「あつ！」

“あつ！”と叫んだのは誠。百合奈がこけた場所から少し下くらいで誠も盛大にこけた。スキー板の右足の板が外れた位盛大にこけた。尻餅をついたらしい。お尻を痛そうに手のひらで擦っている。

「痛え……」

「あれ？誠ってスキー上手いんじゃないの？」

「バーカ。プロだって失敗する時だってあるんだよ、里佳子」

「へえ……」

「まあまあ、これで福井の事笑えなくなっちまったじゃないか……」

「そーだね。つまんないの」

残念がつている須藤と前沢の姿を見て呆れてしまった誠だが言葉にした所でこいつ等にはそう言うのは通用しないのは分かっていたので敢えて言葉を出すことは無かった。

「久瀬くん。私達先に下で待っているから早く来てよね」

「ああ。分かったよ」

「そいじゃあ」

そう前沢が言うのと彼女はコースを蛇行しながら滑り始める。それに続いて須藤も下手そうな足取りで前沢の後を付いて行った。そろそろ立ち上がろうと左足にスキー板を履いたまま右足に履いていたスキー板を手にとってブーツの裏にいっぱい付いた雪をストックでブーツの脇から叩いて雪を完全に落としてスキー板にブーツをはめる。

「ハア……参ったなあ」

「ねえ、誠。私も先に行っておくね」

「えっ、ちょっと待ってくれよ。もうすぐだから」

「うつん。もう待ち切れないや。それじゃあ」

その時の里佳子の顔は何処かニヤニヤしていた気もするがその辺はあくまで気のせいと言う事にしよう。スキー板をはめた所で先にこけていた百合奈の存在を思い出してチラッと百合奈の方を見つめてみる。

「さて行くとするか」

「ちよつと待ていいい！」

誠の言葉に容赦なく突っ込む百合奈。ちなみに百合奈の体勢はうつ伏せになりスキー板の先端は両方ともゲレンデの雪に突き刺さっている状態。実に格好悪い。ましてやウェアにはクラスと名前が書かれたゼッケンが肩から掛けられているので通りかかる同じ学校の生徒や拳句は一般客、別の修学旅行生に笑われる始末。

「ふー…、仕方ないな…」

そう言うのと折角はめたスキー板を外して2枚の板を肩にかけてそのあまりに格好の悪い百合奈に近付いてスキー板を肩から下ろしてそつと手を伸ばす。

「立てるか？」

「うつ、うん…」

百合奈の顔がちよつとだけ赤くなっている。霜焼けで赤くなっているのか、それとも気恥ずかしさで赤くなっているかは分からないが取り敢えず顔が赤いのは確かだった。

「うつ！お前重くないか？」

「失っ、しつれ　！うわぁ！！」

「うわぁ！」

“失礼な！”と百合奈が言いかけた所で百合奈が暴れてバランスを崩して百合奈と誠が同時に転んでしまい2人の体はx印みたいに重なる。誠は斜面に対してうつ伏せ、百合奈は誠の背中に対してうつ伏せになっている。もうこれでは冗談にならない。

「お前…、重い」

「失礼な！………ねえ………」

“ねえ”と声を掛けてきたのは誠の体の上に乗っかっている百合奈。うつ伏せになっているので百合奈の顔や表情は全然見えない。

「ん??」

取り敢えず、生返事だけで返してみる。

「さっきの…、わざとでしょ?」

「えっ?」

「転んだのわざとなんでしょ?違う??」

「……………」

「ほら、やっぱりね。あんなこけ方どんなに上手くこけても分かる人には分かるんだよ?だって私は転ぶのがプロなんだから」

「それ…、自慢なのか?」

「恥ずかしかったんだ…。友達にこけた所笑われるの…。でもなんか頭がスッキリした。もう笑われても平気だから……………」

すると百合奈は自力で立ち上がり誠はその立ち上がった際に出来た隙間から抜け出す。

「本当に、君は優しいな」

「うるせえ……………」

「ほらっ!早く滑らないと里佳子たち待ちくたびれていると思うよ?」

「……………」

おうつ。

次は名前で呼んでよね？これ宿題！（前書き）

グダっちまった…。凄い後悔してます…；

次は名前で呼んでよね？これ宿題！

フリータイムが過ぎるのはあつと言う間の事だった。ちなみにフリータイム中に百合奈がこけた回数は10回以上、里佳子もそれと同じくらい、須藤は…、論外。前沢の方は非常に手馴れているらしく一回もこける事は無かった。誠の方もアレを除いては一回もこける事は無かった。5時30分前にゲレンデ内で放送が流れて誠達のグループは宿泊先のホテルのロッカーにスキー板類を収めて自室に戻っていた。

「そーいえば、風呂どうする？ここの風呂露天風呂らしいぜ」
「そうか…。じゃあ須藤たちで行ったらどうだ？俺はパス」

「えっ？でも戸川と檜山はゲーセンだし…この時間帯だと風呂行っている奴なんていないぜ？」

「そんじゃあ…」

その時部屋のドアの向こうで“トントン”とノックする音が聞こえてきた。

「誰だろう？」

「須藤、出たら？」

「何で俺が？」

「お前がドアに近いから」

「……………、はいはい」

誠に上手い事言いくるめられ須藤は面倒くさそうな顔をしながら茶色いカラーリングされたドアを開ける。ノックをした主は、

「やつほー、康博ちゃん」

「前沢か…。お前も風呂か」

「うん。一緒に風呂行かない？アツもちろん混浴なんて無いけどね」
「当たり前だ。なあ…、他のやつ等は？沢とか」

「ああ、里佳子と百合奈はちょっと昼寝。スキーが疲れたって」

「そりゃあ、あんなにこければな」

「プツ…、逆に康博ちゃんは元気ねえ…」

「うるせえ！！くつ、久瀬君」

「ん??」

「一緒に風呂行こうぜ！」

「おっ…、おう…」

須藤のあまりにも威圧的な顔と態度と言葉に誠は彼に珍しく根負けしてしまった。と言っても風呂に行く用意はしていなかったので須藤と前沢の2人を先に行く様に言った。2人が先に風呂に行くと誠もホテル備え付けのタオルとあらかじめ用意していた着替えと洗濯物を入れる為のビニール袋を手にとって部屋を出て行った。

「あいつら、もう行っちゃったかな？」

そういえば、須藤は前沢の事が好きで前沢も須藤の事が好きだったよな？

「……………」

男と書かれた青色の暖簾と女と書かれた赤い暖簾の前に着いた所で、誠は風呂に入湯するのを躊躇う。風呂の前の小上がりに座って須藤と前沢が出て来るのを待つ事にした。

「邪魔しちゃあ悪いもんな…。おっビン牛乳か。飲もうっと」

露天風呂。

露天風呂の高い壁を隔てて前沢と須藤が話し合っている。他に入湯している人は見当たらない。同級生や一般人も全くいない。須藤の言った通り時間帯が時間帯な為に人がいないのだ。

「なあ、前沢？聞こえるか？」

「うん。よく聞こえる。こっちも人居ないみたい…」

「そうか…」

「ねえ、いつだったかな？」

「何が？」

「私と康博ちゃんがちゃんと話したのって」

「ああ、お前が転校してきてその何ヶ月かあとの修学旅行が最初だったかな？」

「懐かしいなあ。もう2年以上前の話か。そういえば初めて話したのもこんな状況だったわけ？」

「そう言えばそうだったよなあ…。お前が北海道から転校してきてまだ訛りが多くて全然ダチが出来ていない頃に俺が」

「そう。正直ビックリしたよ。だっていきなり“前沢あ！いるかあ？”だもん。こっちだってあせるよ」

「確かめる為に言ったんだよ。覚えてるか？お前に言った事？」

「忘れられる訳が無いじゃん。“お前牛乳好きかー！？”だもん。」

『牛乳好き？ツて何？』って思ったよ。だってそんな質問されて忘れられないでしょ？」

「まあ…、俺はバカだったって事かな？」

「今でも…、フッフ」

突然前沢がくすくす笑い始める。その小さい笑い声を須藤は聞き逃すことはなかった。

「何だよ？」

「なんかさあ。私達ってこのまま“牛乳飲み仲間”でいいのかな？つてね」

「はあ??」

「だってさあ。恋…、なんでもない」

「変な奴…。俺そろそろ上がるわ。何かのぼせちまった」

「えっ?もう??」

「お前はどーする？」

「もうちよつと入つとく」

「んじゃあ俺、さっきの牛乳売り場で待つとくわ」

「はい」

露天風呂を出て行く音が前沢の耳に入ってくる。それを聞いて自分が言った発言を恥ずかしがる。顔の下半分をお湯につけて鼻から息を吐く。

「何やってんだ…。私は…」

だつてさあ。恋人未満つて感じじゃない？

何でそんな事が言えないんだ？“恋人”って言う単語すら恥ずかしがつて言えない自分が恥ずかしい。人の恋愛相談に乗っていて自分の恋に対しては全然進展なし。

「……………」

前沢あ！いるかあ？

「……………」

お前、牛乳好きかー！？

「……………」

俺学校牛乳好きなんだ、今度帰ったら一緒に飲もうぜ。

「……………」

「よし！」

勢いよくお風呂から上がる。ザバーツと大きな水の音が辺りに響く。ちよつと勇気を振り出そう…。

あの時、須藤康博が私に声を掛けてきてくれたみたいに…。

「須藤、ほれっ」

「久瀬君。まさかずっと待ってた？」

「ああ。お前と前沢の間を邪魔しちゃ悪いと思ってな」

「何を……」

須藤は誠から受け取った牛乳瓶のフタを開けて中身の3分の1程度を飲むと右手にそれを握ったまま黙り込む。その顔を見ると何処か真剣に考え事をしている顔であった。

「なあ、須藤。お前は前沢とはどういう関係なんだ？本当に今のままでいいと思っっているのか？」

「えっ？」

「そのままの意味だよ」

「んっ、……………」

須藤が再び考え事を始めると途端に女湯の暖簾が一気にめくり上がり中から前沢が走りながら、

「あっ、おいっ前沢！」

小上がり座に座っている須藤の握っていた牛乳瓶を強奪する。もちろん中身はこぼれない様にして。

すると、今度は須藤の飲んでいた牛乳瓶の牛乳を一気に飲み下し誠と須藤はその姿を啞然としながら見る事しか出来なかった。呆気に取られた須藤と誠を尻目に前沢はその牛乳を一滴残さず飲み干した。

「プハッ！」

「前……沢さん??」

「間接キッス！」

と言うと彼女は牛乳瓶を返却用のかごに置いてニカーっとな敵な笑みを浮かべると須藤に人差し指をさして更に続ける。

「次は本物奪っちゃうからね？」

康博

「えっ？」

「次は名前で呼んでよね？これ宿題！」

そう言い残すと前沢は廊下を走って行きいつの間にかその姿は無くなっていた。

「うわああ」

「すつ、須藤!？」

須藤はいきなり脱力しその場で寝転がってしまう。

「悪い…。ちよつとのぼせちまつた…」

「須藤…」

牛乳奢つてやる。

ありがとよ…。久瀬君…。

久瀬君とはどうなの？

修学旅行2日目。

誠と須藤は廊下の端に設置されている自販機でペットボトル飲料を買いに来ていた。

「あつ…、前…」

「むっ」

須藤が声を掛けようとしたのは前沢だ。“あつ…、前沢”と声を須藤が声を掛けようとしたのだがそれを聞いて彼女は頬を子どもみたいに膨らませて須藤の目をじっと見つめる。

「うつ…、詩」

「はい、それでよろしい。今後も頼むよ。康博」

前沢の下の名前「詩」を須藤が呼ぶと前沢の顔はさっきとは打って変わり明るくなって半ば上機嫌に彼女は須藤と誠の目の前から姿を消す。

「へっー……お前もやるにえ？須藤？？」

「うるさいな…」

冗談交じりで放たれた誠の言葉を須藤は下手くそに流すと自販機にコインを投入しジュースを選び始める。

「俺もつくづく尻に敷かれるタイプだなア…」

「まあ、頑張れ。俺だって似た奴がいるからよ」

「ああ…、沢の事か」

「アイツ、案外前沢と似ているんだよ。性格が」

「ヘエ…。意外」

「意外だから俺も驚いてんだよ」

「フツ…、違いねえ」

ジュースを選ぶと取り出し口から須藤は冷たい缶コーヒーを取り出

してその場でキャップをあけて飲み始める。次は誠がコインを投入してジュースを何にするか悩み始める。

「なあ、久瀬君。何で俺はアイツとあそこまで仲良いんだろうな？」
その場で座り込みをしている須藤の顔は見えない。見えるのは彼のつむじだけだ。時々コーヒを口にしながら誠から答えが出るのを待っているようだ。

「さあな……。その辺はお前の持ち前の明るさじゃないのか？」

「明るさ？」

「お前は俺と違って明るすぎるんだよ。うちの妹みたいにな……」
「妹いんの？」

「ああ、中三だ。今年で受験生になる。俺と違って外向的でクソ明るいんだ、これが」

「……。明るさか」

ジュースが落ちる音が聞こえて取り出し口に手を伸ばす。ちなみに誠が選んだのは須藤と全く同じコーヒである。須藤が座り込みをしている右隣に座り込む。

「案外美味しいな。寒いのに冷たいコーヒは」

「ああ。逆に言えば冷たいやつしかなんだけどね。フッ」

「言えてる。温かい奴置いてもいいのに」

2人はしばらく自販機の近くに座り込んだまま冷たいコーヒを飲み続けた。ちなみに、その間同じ目的で自販機に飲み物を買いに来た同級生達は座り込みをしている須藤と誠に対して恐怖心を覚えながら飲み物を買うのを諦める者が多かった。

修学旅行3日目。

「あつ、里佳子。ケータイ鳴ってない？」

「えっ？あつ本当だ」

「聞いたことのない曲だね？」

「お父さんだよ、ちよつと出て行く。静かなところで話したいんだ」
「あつ、いいよ？」

里佳子は百合奈と前沢に断ってケータイを手にとって泊まっている部屋を出て行き廊下で通話に答える。

「もしもし？お父さんどうしたの？」

『あつ、里佳子…。ちよつと言ひ辛いんだけど…』

えっ??

「あれ？意外と早かったね？どうしたの??」

「うつ、うつん…。何でも無いから」

「まあ良いけど？それにしても明日になれば修学旅行も終わりだね」

「うつ、うつん。本当に早いねえ…」

「あつー！時間よ止まれ！」

憂鬱そうにベッドに背中からダイブした前沢は両手を天井にかざして“時間よ止まれ！”を繰り返している。

「あつ、そーいえば詩…、須藤君と上手く行ったのお？」

「あー、それがあのヘタレ。中々私のファーストネーム読んでくれないでねえ」

「羨ましい限りだね…。私なんかフラれたのに」

「えへへ、私だってやる時はやるんだよ？そういえば里佳子」

「ん？」

久瀬君とはどうなの？

「ふえっ!??」

「あつ、それ私も気になる。誠君となんか進展あった？」

「そっ…、それはあ…もう寝る!!!」

布団を被りうずくまる里佳子であったがこれは修学旅行。高校生の修学旅行というのは昼より夜のほうが遥かに長いのである。

「眠らせないよ?。」

「いにやあああ」

てっぺんまで

修学旅行4日目（最終日）

「え〜っと…、これは何かの縁なのでしょうか？」

「可愛いぞ美雪！」

「恋しかったよ！」

普通、修学旅行のバスの添乗員と言うのは初日と最終日とは違う人が割り当てられるのが多いのだが何かの縁だろうか？誠の乗っているバスの添乗員は初日と同じ沢渡美雪さんになったのだ。

「皆さん、スキー・スノボそれぞれやられたと思いますが…、どうでした？」

「美雪みたいな白い雪の上を滑ったよ！」

「寒かった！」

「美雪のためなら命張れる！」

「あははは、まともなの2つ目くらいかなあ？では気を引き締めて！これからですね函館の方に向いたいと思いますが何かイメージとがありますか？」

「百万ドルの夜景！」

「はい、そうですね。夜まで居られないのが残念ですが」

「美雪！」

「違いまーす、私は長万部で〜す」

美雪さんと楽しそうなトークが炸裂している中誠はやはり面倒くさそうにスルーし続けて窓から見える真っ白な雪が積もった開けた平地を望んでいた。寒くなつて前を向くと美雪さんと同級生達は楽しそうにトークを続けている。隣の席には須藤が座っているが眠っている。朝が早かった分眠かったんだろう。隣の列の席には窓側から里佳子と前沢が座っている。百合奈は誠のすぐ前の席で男子に混じってトークしている。取り敢えずこのバスに乗っている女子の中で

百合奈のテンションが一番高い。さすが騒音メーカー。里佳子と距離が大分離れているので表情こそよく読み取る事は出来なかったが修学旅行を楽しんでいる顔にはとてもじゃないが見えなかった。別のことを真剣に考えている様な目をしていた。

「美雪さんって何歳なんですか？」

「！???」

美雪さんに質問したのは百合奈、「！???」は美雪さんではなく誠。一瞬その質問に啞然としたがすぐに気を取り戻して百合奈の座っている席の後ろを膝で蹴って後ろを向かせる。

「なっ何？」

「お前失礼なのが分からないのか？」

「いいんじゃないね？“秘密”が常套文句なんだし」

それだけ言々と百合奈は再び前を向いて「いくつですか？」の質問を答える有り様。対する美雪さんはいえ困った表情を浮かべている。そりゃそうだ。函館の話題になっていて、いきなりそんな質問されるとは思いもよらなかったのだろうから。

「えっと、20代!!!」

「正確に…」

「20代!!!それ以上はいえない!!!」

この後百合奈はこのバスのほとんどの男子に“美雪泣かせ”の恥ずかしい称号を手に入れたのであった。

「ではもうすぐ函館市に到着します」

バスが駐車場に到着したのはそれから5分ほどしてからのものであった。バスが止まったのは函館山、日本三大夜景で100万ドルの夜景で知られる函館を望む展望台のある函館山の麓だ。バスから降りるとロープウェイが稼働しているのが目に留まる。ロープウェイのゴンドラの行く方向を追うと途中で見えなくなっていく。

「こつちに集合」
藤枝の合図でロープウェイを見つめるのを止めて、列に並ぶ事にする。

活動時間は3時間。15分前には集合を始め5分前には完全集合と言う流れをそれぞれの先生から聞き初日の札幌見学を思わせる解散の仕方をした。

「久瀬君、どこに行く？」

「そうだなあ。パンフ見てもどこも遠いし…、この辺ぶらつくか」

「そうするしかない様だけど…、せめてあのロープウェイ乗りたくないかい？」

「俺は構わんが…、前沢はいいのか？」

「あつ…」

「行つてやれ。1人でも平気だ」

「わっ悪いね…」

すぐに彼は誠の元から離れて前沢の元へ走り始めた。取り残された誠はあちこちを見渡して行き先をどうするか悩む。

『さてどうするか？』

「ねえ、誠」

「おっ？おう里佳子か？」

「ねえ…。これからさ」

「これから？？」

軽くデートでもしませんか？

「いいけど…」

「良かった、断られたらどうしようって心配しちゃった」

「けど、どこに？」

そう誠に聞かれるとすぐさま彼女はまっすぐ頭上を指差してニコッと可愛らしい笑顔を浮かべる。

「てっぺんまで」

私…、もうちょっとバカに生まれたかったかな？

里佳子に誘われた『軽いデート』。函館山の山頂にある展望台まで行く本当に軽いデート。発着駅の入り口に入るとゴンドラはすでにスタンバイしていた。扉から客が出て上に上るための客達が次々とゴンドラに入っていく。ゴンドラ内には知らない顔の同級生も何人かはいたがお互い顔は知らないから噂が立てられる心配も無いだろう。実際、本当のカップルもいる様だし。

「あそこ、座れるよ？」

「あつ、ああ」

里佳子に主導権を握られたままゴンドラのイスに横並びに出来るだけ詰めて座る。以前里佳子が誠の家に訪れた時とは違って乗客が多いので本当の意味でこれは詰める必要があった。発車ベルが駅構内に反響してその数秒後にゴンドラが少し揺れて出発し始める。

「やだつ、怖い！」

他の少数の乗客達がゴンドラの揺れに驚いて騒ぐ。騒ぎ終わると今度は出発する前と同じ感覚で雑談を再開する。後ろを向いて景色を眺めてみる。ゆっくりと動いていく山と函館の街の景色。遅いように感じて案外早かったりする。もう半分近く過ぎたのだろう、もう片方のゴンドラとすれ違う。

「ねえ、誠」

「ん？」

「誠って進路の事まだ迷ってる？」

「…、ああ？里佳子は？」

「私は…、大学かな…？」

「頭良いもんな」

「……、もしかしたら進学しか道無くなるかもね……」

「えっ？なんて言った？声小さくて……」

「うつん、何でもない」

『お待たせいたしました。間もなく到着致します。降り口は進行方向、向いまして右側となります。停車の際多少揺れますのでご注意ください。それでは山頂のひと時をお楽しみくださいませ』

そう放送が流れると揺れを伴って山頂の駅に到着した。乗客たちは右側の扉から出てゆく。

「着いたよ、行こっ」

「分かってるって」

「うわあ、本当に綺麗」

雪が降り積もった山と真っ白い函館の街並み。地上より何倍も寒い函館山の山頂に誠達はいる。

「夜だったらもつと良いんだろうけどなあ」

「昼でも十分だよ、北海道のくびれ、本当に見えるんだなあって。だってそうでしょ？地図帳でしか見た事無いんだから」

里佳子は白い頬を寒さで少しだけ赤くして息も真っ白だ。

「まあ、分かんなくてもないが」

北海道の下部の姿を目の当たりにして里佳子は感動している。まるでミニチュアの模型を上から眺めているような感覚だ。誠の方は両手をズボンのポケットに突っ込み、一步下がって里佳子の後姿と“北海道のくびれ”を見つめている。

「今何時？」

「1時だよ。あと2時間もある」

「3時間ってこう言う時は長いと思わない？行きの時は短いと思ったのに」

「寒いからあつという間だよ」

「なにそれ？」

「そういうもんだよ？理由とか深い事考えたら負けだ」

その時誠のポケットに仕舞っていたケータイのバイブがブーブーと音を立てて振動する。ポケットからそれを取り出して発信者とその

内容を確認する。

「遊里だ」

「遊里ちゃんから？メール？」

「ああ…、なんだろ？」

受信メールボックスを開いて中身を確認する。するとそれは実に単純な内容であつた。

お土産よろしく、出来ればご当地キーホルダーがいいな。

「だによ？」

「買ってあげれば？折角の要求だし」

「でもなあ、土産つっても色々あるしなあ」

「それじゃ、ご当地キティとか結構人気だと思っけど？」

「そうだな…、その辺はベタにいくか」

「あそこに土産売り場あるから入ってみようよ」

「おう」

取り敢えず誠が購入したのは里佳子推薦のご当地キティと夕張メロン風味のクッキー12枚入りを2箱。里佳子は白い恋人24枚入りを1箱買った。

「我ながら、中々ベタなの買ったなあ」

「別にいいんじゃないか？そういえばそれ一人で食うのか？」

「ううん、両親帰ってきてるし、一緒に食べようって」

「そつえば帰ってたとか言ってたな。百合奈から聞いたが」

「うん…、私このまま3年上がれるかなあ」

「何言ってるんだ？頭良いんだろ？」

「私…、もうちょっとバカに生まれたかったかな？」

「????？」

この時の里佳子の言葉の意味が誠には理解することが出来なかった。

「皆さん、これから数時間かけて新千歳空港に向います。私ともこれが最後になります」

「美雪と離れるなんて嫌だあ！」

「北海道の子、レベル高かった！」

「ああ。それって浮気？？サイテー」

「美雪に嫌われた！！チキショー！！」

里佳子の表情が土産屋から出た時からちよつとだけ暗い感じがする。目はどこか遠くを向いている。

「東京までもうちよつとですよ」

「嫌だあ！美雪と離れるなんて！！」

沢里佳子！

修学旅行から帰ってきて2週間が経とうとしていた。学年末テストの空気が徐々に濃厚となり掛けていた時にその事件が発生した。その日は冬だというのに日差しは暖かく冷たい風は珍しく全然吹いていない。修学旅行を名残惜しむクラスメイトも何人か残ってはいたもののそれはごく少数で就職・進学に鍵を握る学年末テストへ向ってテスト勉強をする者が大多数を占めていた。誠も前沢と須藤、そして百合奈に頼まれて勉強を教えて、里佳子は教科書やノートは机上には置いてあるがそれを開いてない。要するに彼女は勉強に全く手を出していなかった。

「……………」

その里佳子がかもし出す独特の“薄暗い空気”に友人の百合奈でさえ声を掛けることが出来ないでいた。以前出現した“ブラック里佳子”とは全く違った悲しげな、儚げな妙な距離感がいつの間にか出来上がりいつしか彼女に声を掛ける者は少なくなっていた。またこの距離感のせいで誠も遠慮してここしばらく里佳子に声を掛けていない。

「起立！礼！」

「ありがとうございます！」

いつもの帰りのST。STが終わると掃除の班は教室に残ってその他の人間は部活・帰宅・寄り道などそれぞれの目的を持って教室から出てゆく。自然と流れてゆく時間。いつもの歩き慣れた帰り道、見慣れた街並み。並木道の街路樹の枝から青々とした葉っぱはまだ芽吹いていない。晴れ渡った青い空、オレンジ色に突き刺さる夕日。誠は1人で帰宅の為に塚口駅に向かっていった。駅前の商店街の中に里佳子と出会ったりベラと言う本屋がある。向かいの道路で立って

いた彼は、本屋に入って少し時間を潰そう。そう考えてリベラに入店しようと近付いたのだが店内から何者かが走って出てきたのを見た。

「里佳…子？」

青信号になるとすぐに彼女が走り去っていった方向に走り始める。なぜかは分からない。ただ嫌な予感だけが誠の頭の中を駆け巡る。

「あのバカ…！」

無我夢中で走り続けて里佳子の姿を探す。単純な一本道なのだが高低差がある坂道が多く予想以上に体力の消耗が早い。里佳子もきつと息が切れてどこかで止まっているはずだ。

「はあはあ…」

しかし、中々彼女の姿を確認する事は出来ない。息が切れても尚誠は里佳子のその後姿を捜して走り続ける。軽く汗をかきネクタイを解いてカバンに突っ込んで走り続ける。

「居たっ…！」

やっと見つけた。里佳子の後ろ髪。様子からするに彼女も大分息を切れているらしい。里佳子の姿を確認して小走りに変えて彼女に近付く。

「探したぞ？」

「えっ？」

突然声を掛けられた里佳子は咄嗟に声の方を振り向いてその顔を見て声の主が誰かすぐに分かった。

「はあはあ」

「誠？」

「ここで何してる？はあはあ…」

「まっ、誠こそ……」

誠に返された里佳子の声は後ろめたそうな声であった。その声と同じ時に彼女は少しだけ後ずさる。

しかし、その行動を見て誠は一気に距離を縮めて彼女が手に持っていたものを取り上げる。

「どう言うつもりなんだ？」

「ゴメン……」

「ゴメンって……、もうしないって約束じゃなかったのか？」

「……………」

彼女は黙り込む。里佳子から取り上げたものを彼女の手元に戻して出来るだけ優しく声を掛けてみる。

「一体何があつたんだ？」

「……………」

「沢里佳子！」

「……………」

フルネームで大声で呼ばれると彼女はフツと顔を上げて途端に目から涙を流して手元に持っていたソレを無理矢理両手で誠の胸に押し付けて走ってきた方向とは逆方向に走り去っていく。

「……………」

誠が追う事は無かった。彼女に無理矢理押し込まれたソレを見るとどうにも彼女を追いかけることが出来なかったのだ。

「……………、クソッ」

ソレをごみ置き場に放り投げると誠も走ってきた方向をゆっくり歩き始めた。

里佳子は、また万引きをはたらいたのだ。

理由は、分からない。
。

ピンタ

その翌日。

里佳子とは結局なにも交信をする事などなかった。電話もメールもする事が出来なかった。万引きはもうしないと約束しておいて再び万引きをしてしまった里佳子。そして、単純な理由では無さそうなあの里佳子の涙。全てが謎であった。彼女の事を考えながら誠は今日もいつも通りに起きて顔を洗い、制服に着替えて、朝食をとりカバンを手にとって学校に向かう。いつもより遅めに家を出た誠の乗った電車は人が少し多めに乗っていた。ケータイをいじったり、漫画本を読んだり人それぞれであった。

『塚口、塚口です』

いつもの道、同じ制服を着ている先輩や同級生、後輩達は同じ目的で学校に向かう。里佳子は先に学校に行っているのだろうか？だとしたら理由を聞いてみよう。彼女が例え返答を断つても何度でも聞こう。誠は普段は人の言いたがらない事に関しては深く突っ込まない性格なのだが今回は例外中の例外だ。きつと何か理由であるのだろう。だから万引きをはたらいた。そうだと信じたい。

そう言う考えを巡らせながら階段を上がり自分の教室に到着しかけた時教室の前で人だかりが出来ているのに気付く。よく見ればクラスメイト以外の人間も教室の前にたかりそれをクラスメイトの男子や女子が追い出そうとしている。野次馬（別の同級生）と警官の攻防戦がそこで繰り広げられていた。何があつたのだろうか？

その攻防戦の上で立っているクラスメイトの男子に声を掛けて確認を取ろうとする。

「おいっ、何があつた？」

「久瀬か…。どうもこうもねえよ。沢の事で酷い落書きが…」

「落書き？里佳…、沢は？」

「中に…、あつ出てきた」

攻防戦をしている間から里佳子が涙を目に浮かべながら出てくる。そして黙ったまま誠の右手首を強く握ってそのまま連れ去られてしまう。無理矢理引つ張られる誠の声を里佳子は聞こうとはしない。やっと止まった所でいきなり彼女は誠に対して正面を向く。

「アレ…、誠が書いたの？」

「“アレ”って何だよ？話が読めないんだが…」

「私が約束破ったから書いたんでしょ！」

「お前…、何を言うんだ！」

「約束…、破ったのは悪かったよ…。でもだからって！」

「お前は何を言っているんだ！？ハッキリ言えよ」

「……………」

「おい！」

「もう止めて！」

里佳子が大声で叫ぶと途端に誠の頬を思いっきりビンタした。パンツと短い反響が廊下中に響く。攻防戦をやっていたクラスメイトや同級生もその音を聞いて攻防戦を止めて音のした方を遠目で見つめる。いきなりのビンタはかなり痛かった。赤くは腫れなかったものの理由も分からないままビンタされたことを考えると精神的にもかなり痛みを感じた。

「……………」

頬を押さえて誠は里佳子の顔を見るが彼女は自分がやったことに驚いているのか何も言えないらしい。そつと後ずさる彼女はそのままその場から逃げ出してしまった。その時の彼女の足は速かったのだから何度かこけ掛けているようにも見えた。

「久瀬君！」

「須藤…」

「沢はどこ言っただ？」

「一体何が起きたんだ？」

「…、それが」

教室に入るとおおきな黒板に白いマーカーでデカデカと太く書かれている文字が目に入った。

“ 沢里佳子は万引きの常習犯だ ”

「何だよ…、これ…」

「俺だつて来たときはビックリしたんだ…、酷い事するよな…。誰かが噂嗅ぎ付けてさっきの攻防戦だ。マーカーだから上手く消せないんだ」

「藤枝が来る前に、出来るだけ消そう」

「分かってる。今マーカー消しに出来そうなやつを檜山と戸川が探しているんだ。でも一体誰が…」

「……………」

私知ってる。

“ 私知ってる ” そう言つて来たのは里佳子の友人である百合奈であった。

「百合奈？」

「私犯人知ってる。本当だよ」

「誰がやったんだ？教えてくれ」

「いいけど。条件付」

「条件??」

百合奈が提示した条件、それは誠1人で百合奈と話し合うこと。集合時刻は放課後の5時。場所は駅前のコーヒーショップ。集

「いい？」

「…、分かった」

「おい！マーカ―消せそうなやつ持って来たぞ！」

放課後はすぐにやってきた。

コーヒーショップに5時丁度についた誠はテーブル席に座っている百合奈の姿を発見し百合奈と向かい合わせに座る。

「教えてくれないか？」

「……………」

「犯人は…」

「いるよ？」

「えっ??」

君のすぐ目の前に。

「えっ？」

削除（前書き）

一部の読む人にとっては、気分を害する内容かもしれません……

削除

「百合奈が？犯人なのか？」

“アレ”の…。

百合奈は言葉では言わなかったもののゆっくり頷いて誠が言った言葉を肯定した。静まり返る2人の座るテーブル席。暫く沈黙が続いたが誠は沈黙を破る。

「どうしてだ？」

出来るだけ彼は優しく目の前に居る“犯人”に声を掛け彼女の返答を待つ。百合奈が黙り込んでも誠は深くは追求しない。百合奈の口から離されるのを待っているのだ。それを悟ったのか百合奈は重たそうな口を開ける。

「私さ、前にフラれたって言ったよね？覚えてる？」

「ああ…、でもそれが」

「フラれた理由、相手が里佳子の事を好きになったからだよ」

「へっ??？」

「里佳子が私とソイツとの関係を終わらせた原因だったんだよ…」

「じゃあ、里佳子が言って相手の元力ノって言うのが…」

「そう、私の事。アイツが里佳子と出会わなければ私達が分かれる事も無かったんだよ」

「じゃあ、お前そのこと根に持って…」

「うつん、その事自体は落書きとはまだ直結していない。その後なんだよ。里佳子がその相手と付き合っていた事も、妊娠してたことも…、それから万引きの常習犯って事も知ってた」

「それじゃあ、なんであんな酷い事を??」

「誠君だよ」

「俺??？」

突然話の中に飛び出した自分の名前。

「君が里佳子と近付いていくとき、私が妙に寂しくなるんだ…。詩も須藤君とうまく行っているし…。周りを見てみると自分だけ浮いて感じた…。一体なんで私だけ別れなきやいけないんだ？つて…。ゴメンね。私1人の“ヤキモチ”のせいで…。ごめん、ごめんね。久瀬君」

「……………」

いままで自分の事を“誠君”と呼んでいた百合奈が突然“久瀬君”と呼び方を変えた。きつと百合奈自身も後悔しているのだろう。わざわざ自分から名乗り出てくれたのだ。しかも犯人として。黙っていればバレなかったのに…。だ。

「感謝するよ、百合奈」

「えっ？？？」

「俺は里佳子が行っていた万引きをもみ消しにした…。それを百合奈が止めてくれたんだよ？だから俺はお前を責めたりしない」

「でっでも…」

「あーっ、もう終わり。この話は終わり」

「久瀬君…」

「気持ち悪いよ、その呼び方。じゃあな」

そう言い残すと誠はカバンを手にとってテーブル席から立ち上がってコーヒーストップを出て行く。その後を百合奈が追いかけるがもうそこに彼の姿はなくなっていた。

里佳子は次の日から学校に来なくなっていた。その次の日も…。里佳子は姿を現すことはなかった。メールを入れても彼女は反応してくれなかった。電話を入れても『お掛けになった電話番号は現在電

源が入っていないか、電波の届かないところにあるため掛かりません』と帰ってくるだけだ。

カラーマーカーのあとが微妙に残っている黒板で毎日授業を受けている。あの告白を誠は誰にも話していない。

そして、百合奈とは全くの疎遠となりかけていた。

「起立！礼！」

「ありがとうございました！」

帰りのSTが終わり生徒達が教室を次々出てゆく。教卓で荷物を整理している藤枝を見て誠は彼に近付いた。

「どうした？久瀬」

「先生、ちよつと話を聞きたいんですが」

「おう??」

「少しでいいですから」

廊下を歩きながら誠は質問をすることにした。里佳子の事についてだ。

「沢か…、本当は口止めされていたんだがな…」

「???」

「あいつは…、アメリカの大学に飛び級で飛んだんだよ。あの落書きがあつた次の日に」

「えっ??飛び級？アメリカ??」

「いつかお前に話したことが合つたよな？頭がいい奴は世間の目が逃す訳が無いって」

「はいっ…」

「沢が正にそれだったんだ。聞いた話だがあいつの両親の知り合いが沢の存在を知って『それなら是非』とばかりにあいつにテストをさせたんだ。その大学の」

「でもそんな話…」

「本人が内緒にしてと言ったんだ。冬休みの中頃にテストを受けて合格通知が来たのが修学旅行の3日目の話だ」

私…、もうちょっとバカに生まれたかったかな？

そう言う事だったのか…。里佳子が修学旅行の4日目に言ったあの言葉は…。

「それで…3年にあがる必要も無くなったんだ。なにせ大学に飛び級出来る権利が出来たからな」

私このまま3年上がれるかなあ。

「……………」

「本人は嫌がったんだが…、落書きのあった日に『行きます』ってな。急に」

「…そうだったんだんですか…」

「お前にも秘密にしていたのか、あいつは表向きは『転校にしてくれ』と言っていたから明日言うつもりでいたんだ」

「……………」

里佳子が俺の傍から消える。そんなこと全く考えたことが無かった。

久瀬君って、里佳子の事どう思っているの？

「……………」

君は里佳子の事どう思っているの？

「……………」

ああ、そうか。そう言う事が。

俺はあいつの事が好きなんだ。

それでフラれた。情けないな…。本当なら傍に居てやらなければいけないのに、俺はあいつの事を拒絶した。

ケータイを開いて、アドレス帳を開いて“沢 里佳子”のアドレスを開く。

削除。

削除（後書き）

すみませんすみません。

こんな展開にしちゃって……

最終回

里佳子は俺の目の前から姿を消した。全く何も言わないままにだ。何も知らせてくれなかった。誤解までされて拳句の果てはビンタと言う最悪の別れ方をして俺と里佳子の関係は終わった。これで里佳子の秘密は秘密では無くなった。まあ、ほとんどが落書きの内容をあくまでいたずらとして受け取ってくれているのが幸運だが。

もうあいつのメールアドレスと電話番号を携帯電話から削除して半年になる。3年に進級し“進学”と言う形で身を固めることにした。その大学に進学する人間は俺以外には百合奈くらいしか居ない。彼女は今はそこを受けるために必死に勉強していて、俺も勉強に付き合っている。あのイタズラがあつて俺達は疎遠になりかけていたが藤枝から飛び出した『里佳子転校』の話聞いて百合奈から声を掛けられ俺達は事実上の和解をした。里佳子だつてきつと許してくれる。そう信じての事であつた。

そうそう、遊里はちゃんと高校に受かつた。受けたのは俺と同じ高校。きつと何か困り事があつたら俺に頼ろうという魂胆もあるのだから今のところそういう素振りは見せていない。

「じゃあな、須藤」

「おう」

須藤は前沢の事をちゃんと下の名前で呼べるように克服し前沢も前沢で須藤にいちやついている。あの衝撃的な出会いと別れを経験した冬を越えて現在は夏真っ盛りな7月だ。里佳子がいるアメリカはもっと暑いのだろうか？それとももう少しだけ涼しいのだろうか？どうでもいい事だ。

「里佳子の事…、いつまで経っても忘れられない訳無いよなあ…」

もう、休み時間を遊びに使う同級生はほとんど居なく、勉強やら就職に向けての面接の練習を行っている。俺は休み時間を利用して毎日百合奈に勉強を教え続けている。

「分かるか？」

「おう！何とか分かった気がする！」

百合奈の制服に生徒会バッジのバッジはもう無い。あの事件を引き起こした責任かどうかは分からないがきつとそうなのだろう。3年にあがるのをきっかけに百合奈は生徒会をやめてしまった。将来“生徒会長” 確定だったそのポストを降りての事であった。

暑い夏の日ざし、涼しいエアコンが効いている校舎内と蒸し暑そうな温風を出しているエアコンの室外機、通学路もまた1人で行ったり来たりを繰り返すように戻っていた。塚口駅に到着すると必ずコインロッカーの方へ最初に足を踏み入れてしまう。なぜならそこに里佳子が居るかも知れないからだ。でも、居る筈も無く毎日誰もいないコインロッカーを見に行くのが一種の習慣になっていた。

「ただいま」

「おかえり、今日はお父さん達帰っているよ？」

「そうか」

親との関係もまあそこそこ回復しかかっている。里佳子が望んだ常と一緒に家いる両親。その両親といえるからには俺も上手くやろうと考えたのだ。全く…、どこにでもアイツは現れる。

「誠。大学勉強はかどっているか？」

「まあ、ボチボチだな。なにせ勉強教えている立場な訳だし」

「お前も人気だな」

夕食を済ませベッドに寝転び携帯電話を机の上に置いて明日は百合奈に何を教えようかと考えを巡らせていると次第に眠気が俺を襲う。

ゆっくりとまぶたを閉じるとそのまま眠気に負けてしまう。

その直後に誰からか送られてきたメールに気付く事もなく…。

「おはよう」

「あつ、おはよう。今日はどうしたの？土曜日でしょ？」

「知ってんだろ？クラスメイトと勉強会」

「そうか…、いやぁ誠は人気者だなぁ」

「親父と同じ事言いやがって」

「まぁ、いいじゃん？えっもう出るの？朝御飯は？」

「コンビニで適当に買うよ。今日はコンビニおにぎり食いたい気分」

「なにそれ？」

「行ってくる」

「うん…、あつ誠ケータイ忘れているよ？」

遊里がテーブルに置き忘れたケータイを俺に手渡してくれるとポケットに突っ込んでそのまま出かけて行く。蒸し暑い真夏の太陽の日差しを浴びながら。

「暑いなぁ…、百合奈に『今出た』ってメールでも入れとくか…」

そう思いケータイを開いてみると『未読メール 1件』と言う文字が浮かび上がっていた。メールを開くと見覚えの無いメールアドレス。英単語や数字ばかり出ているから登録していないメールアドレスだろう。誰からか分からないそのメールを開いて中身を確認することしよう。

こんばんは、お久しぶりです。お加減いかがでしょうか？

丁寧に出だしから始まったメール。何処か見覚えのあるメールの打ち方。その出だしを読みスクロールする事にした。

あの時は、ピンタをしてごめんなさい。本当はあの後何度謝ろうとメールを打とうとしたり電話しようとしたが怖くて出来なかったのです。誠が…、自分の事嫌っているんじゃないかなって考えるとても辛くて…。

今回は謝罪と近況報告をしたいと思います。私が現在通っている大学はもう勉強が難しくてその上、アメリカ人の英語が早すぎて、もう頭がパンクしそうです（汗）

あなたは前に言っていた通り、就職ですか？それとも進学ですか？もし進学だったら嬉しいなあ。もしかしたら会えるかも知れないって。

ああ、大切なことを忘れていました。ピンタしておいて言うのは何ですが…、

私は、久瀬誠の事が好きです。

だから、私が日本に帰ってきたらもう一度仲良くしましょう！では長文失礼しました。

久瀬 里佳子（なんちゃって）

「……、あのバカ……」

携帯電話を閉じるとその場に立ち止まって辺りを見渡す。暑い太陽。熱をためているアスファルト。小さな小さな小川。うるさく鳴くセミ達。

そして、再び歩き始める。

待ち合わせの時刻までは後10分ほど。しかし、目的地の図書館は歩いて10分ではちょっとばかり厳しい所にある。

「ちょっと、走ろうか」

『ロッカールーム』 E N D

最終回（後書き）

今まで、こんな小説を読んでくださった方ありがとうございます！

ちょっと、詰めが甘かった感じもありますがこれで完結です。

今まで、本当にありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6310p/>

ロッカールーム

2011年3月11日09時17分発行